長野市の埋蔵文化財第121集

長野遺跡群

元善町遺跡

もとよしちょう

――善光寺大本願明照殿建設地点――
――善光寺仁王門東地点――

善光寺門前町跡(2)

ぜんこうじもんぜんまちあと

――八幡屋磯五郎大門町店建設地点――

2008年3月

長野市教育委員会

元善町遺跡（大本願明照殿地点） 調査区遠景

大本願明照殿地点　第１次遺構検出面　全景（北東より）

大本願明照殿地点　第２次遺構検出面　全景（北東より）

大本願明照殿地点　第３次遺構検出面　全景（北東より）

大本願明照殿地点　土層断面

大本願明照殿地点　瓦集中区（西より）

大本願明照殿地点　単弁六弁蓮華文軒丸瓦

仁王門東地点　調査区全景（南より）

出土軒丸瓦

出土軒丸・軒平瓦

不明土製品（塑像？）

写真　漆喰壁片

序

古来より信仰を集めてきた善光寺は、日本を代表する寺院であり、国宝の本堂や重要文化財の三門、経蔵など境内には貴重な歴史的建造物が多数残されています。古代において一地方寺院に過ぎなかった善光寺が、中世以降の浄土信仰や女人救済思想、鎌倉幕府の保護など様々な影響によって、広く知れ渡るようになり、室町時代には高野山と並んで東西を代表する一大霊地として発展したといわれています。現在、善光寺には年間600万人を超える参詣者が訪れており、日本全国はもとより海外からも多数の方が来訪されています。

本書で報告する元善町遺跡は、宝永４年に現在地に善光寺本堂が移築される以前、本堂（如来堂）が存在したとされる元善町の地下に埋蔵される遺跡であり、現在の善光寺境内域における初めての発掘調査となりました。調査は善光寺大本願明照殿の改築および住宅建設に伴う記録保存を目的とした緊急発掘調査でしたが、多量の古代瓦の出土や中世遺構などが確認できたこともあり、連日の報道によって長野市内はもとより全国からも注目を集めました。調査成果は、古代瓦葺建物の存在や中世の大規模造成などを示しており、古代･中世の善光寺解明のための貴重な手掛かりになるものと期待されます。また、八幡屋礒五郎大門町店の店舗建設に伴う善光寺門前町跡の調査では、中世末の溝跡を確認しました。こちらも、戦国期の動乱に巻き込まれた善光寺門前町の様子が伺える貴重な資料となります。

ここに長野市の埋蔵文化財第121集として刊行いたします本書には、このたびの発掘調査によって得られた成果を詳しく掲載しております。その成果は連綿と綴られてきた人々の歴史のほんの一部にすぎませんが、地域史解明の一助としてお役立ていただければこの上ない喜びであります。

最後になりましたが、埋蔵文化財保護に対する深いご理解とご協力、ならびに発掘調査に際して多大なご尽力を賜りました善光寺大本願、株式会社八幡屋礒五郎、山ノ井大樹氏および関係各位の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成20年３月

長野市教育委員会
教育長　立岩睦秀

例　　言

1．本書は、平成18・19年度に長野市大字長野字元善町・大門町内で実施された開発事業に伴って、長野遺跡群の各遺跡で実施した埋蔵文化財発掘調査報告書を、長野市の埋蔵文化財第121集として合冊にしたものである。

2．本書で報告する元善町遺跡と善光寺門前町跡は、密接に関連する遺跡であるため、遺跡の地理的環境等の記載は統一して記載する。

3．各遺跡の発掘調査は、各事業主体者と長野市とによる埋蔵文化財発掘調査委託契約に基づいて、長野市教育委員会（文化財課埋蔵文化財センター担当）が実施した。事業主体および起因事業は次のとおりである。

［遺跡名（地点）］		［事業主体者］	［起因事業］
元善町遺跡（善光寺大本願明照殿地点）	：	善光寺大本願	「明照殿改築工事」
元善町遺跡（仁王門東地点）	：	山ノ井大樹	「住宅建設工事」
善光寺門前町跡（八幡屋礒五郎大門町店地点）	：	株式会社八幡屋礒五郎	「店舗建設工事」

4．各遺跡の調査地・発掘調査面積は次のとおりである。

［遺跡名（地点）］		［調査地］	［調査面積］
元善町遺跡（善光寺大本願明照殿地点）	：	長野市大字長野字元善町500	500㎡
元善町遺跡（仁王門東地点）	：	長野市大字長野字元善町468－1	60㎡
善光寺門前町跡（八幡屋礒五郎大門町店地点）	：	長野市大字長野字大門町82－3	30㎡

5．本書の発掘調査平面図に示した座標は、平面直角座標系の第Ⅷ系座標値（日本測地系2000）であり、標高は日本水準原点に基づく。

6．調査では、略記号としてSB（住居跡）、SD（溝跡）、SE（井戸跡）、SK（土坑）、SN（石組・敷石）、SP（小穴）、SR（遺物集中区）、SX（不明遺構）を用いた。

7．本書の編集・執筆は長野市教育委員会文化財課埋蔵文化財センターの宿野隆史、柴田洋孝が担当した。また出土金属製品の整理業務は山野井智子が、出土遺物の写真撮影は佐々木麻由子が担当した。

8．出土陶磁器・土器のうち、大本願明照殿地点については株式会社アルカの西本正憲が観察表の作成等整理業務を実施している。

9．調査によって得られた図面・遺物等の諸資料は、長野市教育委員会文化財課埋蔵文化財センターにて保管している。なお出土遺物には遺跡の注記記号として、元善町遺跡（善光寺大本願明照殿地点）は「NGMD」、元善町遺跡（仁王門東地点）は「NGMY」、善光寺門前町跡（八幡屋礒五郎大門町店地点）は「NGYI」と表記している。

目　　次

序
例　言
目　次

第Ⅰ章　調査の経過 …… 1
　第１節　調査に至る経過 …… 1
　第２節　調査日誌（抄） …… 3
　第３節　調査体制 …… 5

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境 …… 6
　第１節　地理的環境 …… 6
　第２節　遺跡周辺の考古学的環境 …… 7
　第３節　歴史的環境 …… 8

第Ⅲ章　調査成果 …… 11
　第１節　大本願明照殿地点の調査概要 …… 11
　第２節　仁王門東地点の調査概要 …… 82
　第３節　八幡屋礒五郎大門町店地点の調査概要 …… 106

第Ⅳ章　自然科学分析（パリノ・サーヴェイ） …… 118

第Ⅴ章　結　語 …… 122

附章　参考文献 …… 127

挿　図　目　次

第１図　調査位置図 …… 2
第２図　調査地周辺地形と遺跡 …… 6
第３図　調査位置図 …… 7
第４図　調査区南西隅部　断面模式図 …… 11
第５図　大本願明照殿地点　調査区概念図 …… 12
第６図　第１次遺構検出面　調査平面図 …… 14
第７図　１次検出面遺構出土遺物 …… 17
第８図　第１次面出土遺物 …… 19
第９図　第２次遺構検出面　調査平面図 …… 21
第１０図　第２次面遺構出土遺物
(SD04・SD05・SD06・SE01・SK01) …… 25
第１１図　第２次面遺構出土遺物
(SK02・SK03・SK04・SK07) …… 27
第１２図　第２次面遺構出土遺物
(SK15・SK19・SK22・SK23・SK25) …… 29
第１３図　第２次面遺構出土遺物
(SK25・SK28・SK29・SK31・SK33) …… 31
第１４図　第２次面遺構出土遺物
(SK33・SK34・SK35・SK40・SK46) …… 33
第１５図　第２次面遺構出土遺物(SK46) …… 35
第１６図　第２次面遺構外　出土遺物 …… 37
第１７図　第３次面遺構検出面　調査平面図 …… 39
第１８図　第３次面遺構出土遺物
(SB02・SD02・SD03・SD07) …… 43
第１９図　第３次面遺構出土遺物(SK38・SK41
・SK44・SK45・SK47・SK49・SK51・SK55) …… 45
第２０図　第３次面遺構外　出土遺物 …… 47
第２１図　第４次面遺構検出面　調査図 …… 49
第２２図　第４次面出土遺物(SK60・SK61・SX01
・瓦包含層・瓦集中区・遺構外) …… 53
第２３図　大本願明照殿地点出土古代瓦
(軒丸瓦・道具瓦・文字瓦・丸瓦) …… 58
第２４図　大本願明照殿地点出土古代瓦(丸瓦)　59
第２５図　大本願明照殿地点出土古代瓦(丸瓦)　60
第２６図　大本願明照殿地点出土古代瓦
(丸瓦・平瓦) …… 61
第２７図　大本願明照殿地点出土古代瓦(平瓦)　62
第２８図　大本願明照殿地点出土古代瓦(平瓦)　63
第２９図　大本願明照殿地点出土古代瓦(平瓦) …… 64
第３０図　大本願明照殿地点出土古代瓦(平瓦) …… 65
第３１図　大本願明照殿地点出土古代瓦(平瓦) …… 66
第３２図　大本願明照殿地点出土金属製品 …… 71
第３３図　大本願明照殿地点出土金属製品 …… 72
第３４図　大本願明照殿地点出土銭貨 …… 75
第３４図　大本願明照殿地点　出土石製品 …… 77
第３５図　仁王門東地点　第１次遺構検出面 …… 84
第３６図　仁王門東地点　第２次遺構検出面 …… 85
第３７図　仁王門東地点　１次検出面出土遺物
(SK01・SK02・SK04・SK05・SK07・SK11
・遺構外) …… 89
第３８図　仁王門東地点　２次検出面盛土
出土遺物(SP01・SP04・SP05・遺構外
・盛土２・盛土３・盛土４) …… 91
第３９図　仁王門東地点出土古代瓦
(軒丸瓦・軒平瓦) …… 95
第４０図　仁王門東地点出土古代瓦
(文字瓦・丸瓦) …… 96
第４１図　仁王門東地点出土古代瓦(丸瓦) …… 97
第４２図　仁王門東地点出土古代瓦(平瓦) …… 98
第４３図　仁王門東地点出土古代瓦(平瓦) …… 99
第４４図　仁王門東地点出土古代中世瓦(平瓦) 100
第４５図　仁王門東地点　出土金属製品 …… 104
第４６図　八幡屋礒五郎大門町店地点
遺構全体図 …… 107
第４７図　調査区南壁　土層断面図 …… 108
第４８図　八幡屋礒五郎大門町店地点
遺構出土遺物 …… 111
第４９図　八幡屋礒五郎大門町店地点
出土遺物 …… 113
第５０図　八幡屋礒五郎大門町店地点
遺構外出土遺物 …… 115
第５１図　八幡屋礒五郎大門町店地点出土銭貨
…… 116
第５２図　湖東式軒丸瓦出土分布図 …… 125
第５３図　古代瓦出土遺跡分布図 …… 126

第Ⅰ章　調査の経過

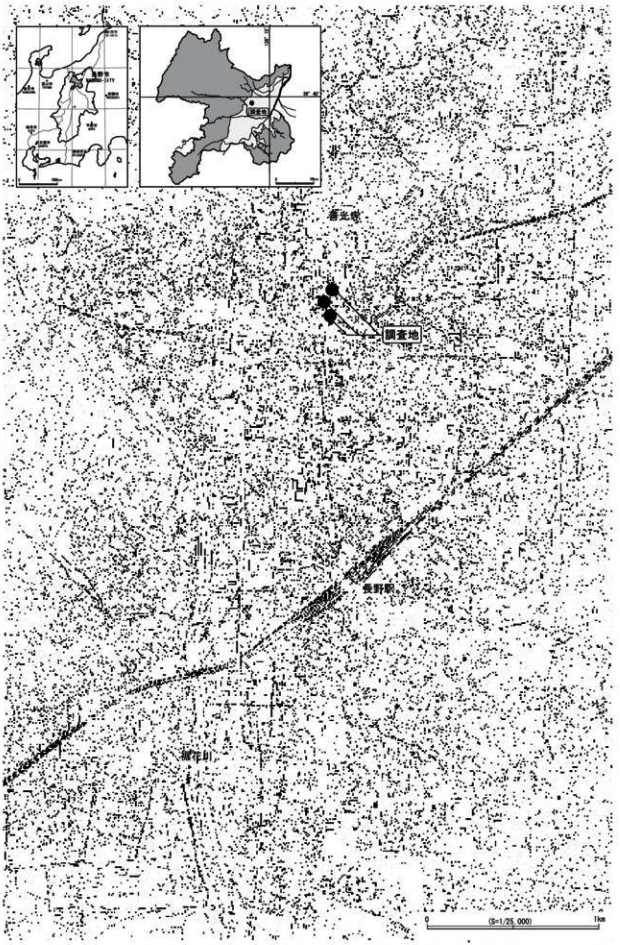
第１節　調査に至る経過

調査地は善光寺境内域の大字長野字元善町および大門町に位置する。周辺は善光寺を中心として宿坊や門前町など歴史的な町並みが広がっている。近年、善光寺・地区住民・市内のまちづくり団体・学識経験者・市民代表などによって構成される「善光寺周辺地域まちづくり協議会」が結成され、平成13年度には善光寺周辺地区街並み環境整備方針が策定された。当該地区内では、この方針における景観形成テーマに従い、具体的な街並み環境整備事業が進められている。また、善光寺と門前町は世界遺産登録を目指しており、重要伝統的建造物群保存地区選定のための調査を継続的に実施している。本調査報告の起因となった開発行為は、このような善光寺周辺のまちづくり推進に伴って実施された改築・新築工事であり、地中に埋蔵する文化財の保護についても協議が進められた。以下、各地点ごとに経過を述べる。

大本願明照殿地点　平成17年12月21日に善光寺大本願より、改築工事にともなう埋蔵文化財包蔵地の照会がなされ、開発行為区域が「長野遺跡群　元善町遺跡」の範囲内であり埋蔵文化財包蔵の可能性が極めて高い旨を回答した。その後、埋蔵文化財保存のための保護協議を重ね、平成19年１月16日に試掘調査を行い、複数面にわたる埋蔵文化財の包蔵を確認する。その結果、平成19年１月18日付で長野市と善光寺大本願との間にて「埋蔵文化財発掘調査協定」を締結し、協定に基づく「埋蔵文化財発掘調査委託契約」を平成18・19年度と年度ごとに契約締結し、発掘調査の実施に至った。調査期間は平成19年２月15日から４月５日までの50日間に渡って実施された。

仁王門東地点　平成19年４月９日に市民からの通報により仁王門東地点にて工事実施中の電話連絡を受け、当センターにて現地確認、事情聴取を行う。現地では既存建物解体工事が完了し、新規建物建設を予定していたため、平成19年４月26日に試掘調査を行い、複数面にわたる遺物包含層を確認する。その後、保護協議を重ねたが、新規建物が地下施設を伴う構造で計画されたことを受け、平成19年８月24日付けで山ノ井大樹氏と長野市との間で「埋蔵文化財発掘調査委託契約」を締結し、発掘調査の実施に至った。調査期間は平成19年９月25日から10月12日までの17日間に渡って実施された。

八幡屋磯五郎大門町店地点　平成19年４月24日に北野建設株式会社より、既存店舗の解体及び新築工事計画について照会がなされ、開発行為区域が「長野遺跡群善光寺門前町跡」の範囲内であり、埋蔵文化財包蔵の可能性が高い旨を回答した。平成19年５月23日に試掘調査を実施し、焼土層とともに多量の中世から近世の遺物を確認する。その後平成19年７月２日付で株式会社八幡屋磯五郎と長野市との間で「埋蔵文化財発掘調査委託契約」を締結し、発掘調査の実施に至った。調査期間は平成19年７月４日から７月17日までの14日間に渡って実施された。



第１図　調査地位置図

第２節　調査日誌（抄）

現地における発掘作業は、委託契約締結後に直ちに着手した。作業の経過は次のとおりである。

【大本願明照殿地点】

平成19年２月15日　重機による表土除去開始。

２月20日　作業員による遺構検出作業に着手。

２月22日　第１次遺構検出面の写真撮影。
第２次遺構検出の試掘実施。

２月26日　第１次遺構検出面の測量（委託）。

３月２日　第２次遺構検出面（北半）の完掘及び写真撮影。

３月８日　第２次遺構検出面（南半）の完掘及び写真撮影。

３月13日　第２次遺構検出面の測量（委託）。

３月22日　第３次遺構検出面の完掘および写真撮影。

３月23日　第３次遺構検出面の測量（委託）。

３月31日　第４次遺構検出面の完掘および写真撮影。

４月１日　瓦集中区の掘り下げを完了。

４月３日　第４遺構検出面の空中写真撮影及び測量（委託）。
報道機関用の現地説明会開催。

４月４日　土層観察用畦から軒丸瓦出土。
現地における発掘調査作業を完了。

４月中旬～埋蔵文化財センターにて整理作業を実施。

表土除去

調査風景

遺構測量

現地説明会

【仁王門東地点】

平成19年９月25日　重機による表土除去開始。
９月26日　作業員による遺構検出開始。
９月28日　第１次遺構検出面の写真撮影及び測量。
９月29日　調査区南に石積みを検出。
10月３日　第２次遺構検出面の写真撮影。
巴文軒丸瓦が出土。
10月４日　第２次遺構検出面の測量（委託）。
10月９日　土層確認トレンチを設定・掘削。
10月11日　トレンチ完掘、写真撮影。
現地での作業員作業終了。
10月12日　調査区全体の遺構測量（委託）。
現地における発掘調査作業完了。
10月18日　報道機関に調査情報を提供。
11月上旬～埋蔵文化財センターにて整理作業を実施。

調査風景（仁王門東地点）

遺構測量（仁王門東地点）

【八幡屋礒五郎大門町店地点】

平成19年７月４日　重機による表土除去開始。
作業員による遺構検出開始。
７月５日　調査区西側にて石積を検出。
７月６日　第１次遺構検出面の写真撮影。
７月９日　第１次遺構検出面の測量（委託）。
７月12日　関係者対象の調査説明会開催。
７月13日　第２次遺構検出面の写真撮影。
現地での作業員作業終了。
７月16日　第２次遺構検出面の測量。
７月17日　機材撤収。
現地における発掘調査作業完了。
８月上旬～埋蔵文化財センターにて整理作業を実施。

調査風景（八幡屋礒五郎大門町店地点）

調査説明会（八幡屋礒五郎大門町地点）

第３節　調査体制

調査主体者　長野市教育委員会教育長　立岩睦秀
総括管理者　文化財課長　北村真一郎（H18）・雨宮一雄（H19）
総括責任者　局主幹兼理蔵文化財センター所長　矢口忠良（H18）・青木和明（H19）
（庶務担当）　係長　宮沢和雄
職員　吉村久江
事務員　塚田容子（H18）
（調査担当）　係長　青木和明（H18調査員）
主査　風間栄一・小林和子
主事　宿野隆史（調査員・編集）
専門員　遠藤恵実子・長瀬　出
山野井智子（調査員・編集）
石丸敦史（H18）・小出泰弘（H18）
森田利枝（H18調査員）・山岸千晃
小池勝典・柴田洋孝（調査員・編集）
向山純子（H19）・佐々木麻由子（H19）
整理調査員　青木善子・池田寛子・多羅沢美恵子・鳥羽徳子・中殿章子・武藤信子・矢口栄子
整理作業員　倉島敬子・小泉ひろ美・清水さゆり・関崎文子・富田景子・西尾千枝・三好明子・村松正子
陶磁器整理　株式会社アルカ
遺構測量　株式会社写真測図研究所
Ｘ線撮影　長野県工業技術総合センター

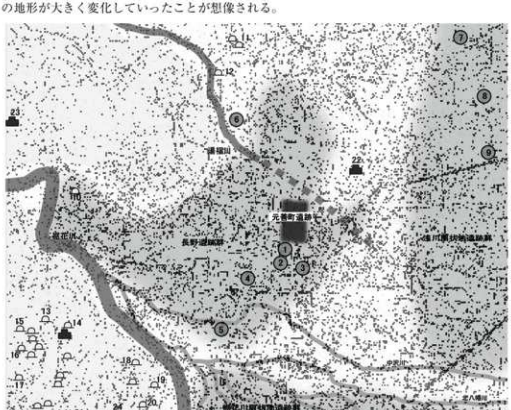
報告調査および整理作業を通じて、下記の方々、関係機関より数多くの貴重なご指導・ご助力を賜った。（敬称略）
調査指導　近畿大学　教授　大脇　潔
信州大学　教授　牛山佳幸
同志社大学　准教授　鋤柄俊夫
愛荘町立歴史館　館長　林定信、学芸員　三井義勝
飯綱町立いいづな歴史ふれあい館　学芸員　小山丈夫
上田市立国分寺資料館　館長　倉澤正幸
長野市地方文化財保護審議会　委員　笹澤浩
調査協力者　長野市教育委員会文化財課　係長　飯島哲也、専門員　清水竜太
長野市立博物館　学芸員　降幡浩樹
同　分館茶臼山自然史館　学芸員　畠山幸司
松代文化施設等管理事務所　学芸員　原田和彦、松下愛

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境

第１節　地理的環境

調査地は裾花川段丘と湯福川扇状地による複合地形の上に立地する。現在の裾花川は、近世に瀬直しされているが、それ以前の流路は旭山北麓の里島付近を扇頂に南東方向に広がっていたと想定される。元善町遺跡・善光寺門前町跡を含む長野遺跡群はこの裾花川の扇状地を望む河岸段丘上に位置し、また箱清水北西を扇頂とする湯福川の急傾斜扇状地として押し出された台地・丘陵地にあたる。砂・礫の堆積物を地盤とする水はけのよい沖積土壌と、日当たり良好な南下りの緩斜面という条件から、居住に適した環境であったと想定される。これまでの調査によって長野遺跡群内では縄文時代から古墳時代までの複数の竪穴住居跡を確認しており、調査地周辺地が善光寺造営以前からの集落域であったことが判明している。また現在の湯福川は善光寺本堂を迂回する流路となっているが、本堂が現在地に移された宝永４年（1707）までは寛慶寺と大勧進の間を流れていたと記されている。

善光寺造営後の遺構としては、善光寺門前町跡（竹風堂善光寺大門店地点）の発掘調査において、区画の痕跡とみられる中世の溝跡を確認しており、中世以降広範囲に渡って大規模な造成が進められたものと推測される。また、近世・近代になると門前町の繁栄とともに行政機関の建設など急速な市街地化が進行したことにより、人為的な造成による地形の改変も進んだものと思われる。現在の善光寺本堂は、宝永４年（1707）に現在地に造営されたものであるが、それ以前の本堂は堂庭と称される仁王門より北側の平坦部（現仲見世）に位置したとされる。この堂庭の平坦部も人為的な造成により築かれた可能性が高く、善光寺の発展とともに善光寺および門前町の地形が大きく変化していったことが想像される。



第２図　調査地周辺地形と遺跡（S=1/25,000）

第２節　遺跡周辺の考古学的環境

調査地周辺では、平成７・８年度に国道406号線・市道県庁大門町線の道路拡幅にともなう発掘調査（西町遺跡・東町遺跡）を実施している。また、平成17年度には株式会社竹風堂善光寺大門店建設にともなう善光寺門前町跡の発掘調査を実施している。元善町遺跡および善光寺門前町跡に関する工事立会および試掘調査の件数は平成16年度以降13件に達しており、うち本件を含める４件において発掘調査を実施している（平成20年３月現在）。

西町遺跡　縄文時代から近世までの遺構を確認する。最も古い遺構・遺物は縄文時代中期前半（約5000年前）まで遡る。縄文時代から弥生時代の遺構は後代の改変により遺存状態が悪い。古墳時代後期には比較的大規模な集落が形成されたと思われる。中世の遺構は、善光寺参道（中央通り）に面する大門地区に集中する。13世紀から15世紀後半に相当する出土遺物とともに溝跡や土坑、半地下施設を確認している。

東町遺跡　弥生時代中期から近世に至る遺構を確認する。遺跡が扇状地の端部傾斜地に位置するため、弥生・古墳時代の遺構は、湯福川の氾濫堆積土によって地表下２ｍ以上も埋没していた。堆積土下層の弥生・古墳時代の遺構は36軒の竪穴住居跡など良好な遺存状況で確認できたが、堆積土上層の中世・近世の遺構は土坑・小穴など僅かな遺構を確認するにとどまった。

善光寺門前町跡（竹風堂善光寺大門店地点）　古墳時代から近世の遺構を確認する。調査区中央部に東西に延びる溝跡を検出した。幅2.5ｍの溝跡は、調査区外まで続いており、覆土からは13世紀後半から14世紀代の製品が出土している。西町遺跡の溝跡とほぼ同時期に造成されたものとみられ、広範囲にわたる門前町の区画造成が想定される。

第３図　調査位置図（S=1/5000）

第３節　歴史的環境

（１）善光寺の歴史概要

善光寺の創建と発展　信濃善光寺の創建について記された当時の確実な史料は確認されていない。そのため、寺の創設時期は境内から出土する古代瓦や本尊である阿弥陀如来像の様式などから推測されている。長野市若槻上野地区で行われた浅川扇状地遺跡群（牟礼バイパスＢ・Ｃ・Ｄ地点）の発掘調査において、善光寺境内出土といわれる古代瓦と酷似した文様の軒丸瓦が９世紀後半の住居跡から出土したことにより、少なくともほぼ同時期に元善町周辺に瓦葺き建物が存在した可能性が高まった。善光寺の名が文献上に現れる最初の例は、10世紀ごろに成立した仏教説話集『僧妙達蘇生注記』の中に記される「水内郡善光寺」であり、この頃はまだ地方の一寺院と認識されていたと思われる。善光寺の僧職である「善光寺別当」は、『後二条師通記』の永長元年（1096）の条に記載される。平安時代末期になると、中央の寺院が地方寺院の別当職を掌握する傾向が高まり、善光寺も有力寺院である寺門派の園城寺の末寺化が進められたことにより、その名前が貴族社会・仏教界で知られるようになったと考えられる。

善光寺縁起　善光寺の存在を広く宣伝する役割を果たしたものとしては、「善光寺縁起」と女人救済思想の存在がある。善光寺縁起は私撰史書の『扶桑略記』や『伊呂波字類抄』など複数に引用されている。縁起の内容は、善光寺本尊の由来を『日本書紀』の仏教公伝記事と結びつけ、日本で最古の仏像とするものであり、鎌倉時代以降その内容は次第に膨らんでいく。この縁起の内容は、阿弥陀信仰の高まりとともに、旧仏教系の寺院から排除されていた女性たちを積極的に受け入れて救済する思想が加わったことにより、広く全国に浸透していった。

鎌倉幕府と善光寺　善光寺は治承３年（1179）に火災によって消失するが、文治３年（1187）には、源頼朝が国内の御家人に再建を命じており、建久２年（1191）には主要伽藍が落成していることが『吾妻鏡』に記されている。その後、幕府の実権が執権北条氏に移ってからも善光寺に対する崇敬・保護政策は進められ、全国の武士層に善光寺信仰を普及させることとなった。

戦乱と善光寺の復興　戦国期には甲斐の武田信玄と越後の上杉謙信による川中島の戦いの際に、武田氏が本尊やその他の寺宝を甲府に移している。その後、武田氏の滅亡、織田信長の死など、戦乱とともに善光寺本尊は転々とし、慶長３年（1598）に豊臣氏より40年振りに信濃に本尊が戻される。江戸時代になると徳川家康が善光寺に千石の寺領を与え、再興が進められた。中世から近世において、善光寺は火災によって幾度か焼失しており、宝永４年（1707）に境内地北側の現在地に本堂を移す。江戸時代末の弘化４年（1847）、明治24年（1891）の火災では仁王門や大本願などを焼失しており、門前町も大部分はこの火災後の再建である。

寛文の如来堂と門前町
（「信濃水内参神別神社遺跡之図」長野市立博物館蔵）

（2）調査地の歴史概要

大本願明照殿地点　大本願は善光寺創建期から続くといわれる尼僧寺院であり、善光寺の本坊として、天台宗の大勧進とともに善光寺の運営をつとめる。大本願境内の南東隅に位置する明照殿は、大正３年（1914）に造営されたものであり、北に位置する寿光殿と連結している。建物は入母屋瓦葺屋根の木造２階建であり、１階には小間と108畳の広間があり、２階には「お物見」と呼ばれる参道に面した部屋があった。

元禄以前の寛文如来堂を描いたとされる「善光寺境内見取図」では、大本願の南東隅に「諏方北向ノ社家」との記載がある。明治時代になると神仏分離政策により、善光寺境内の社は撤去され、横沢町の八幡社などに合祀されたといわれる。明治初期の「善光寺大本願現今境内」には、大本願敷地南東隅に独立した「物見」が記されている。明治11年には、ほぼ同位置に長野電信分局が設置されており、「信濃国善光寺略絵図」（県立歴史館所蔵、明治24年）には、南に窓を有する２階建ての洋風建築が描かれている。

仁王門東地点　仁王門の東に位置し、近年までみなとや旅館が存在した場所にあたる。元禄以前の古境内絵図を写したとされる「信州善光寺惣境内古絵圖」では、大本願北東に接する階段は描かれるものの仁王門は記載されず、調査区周辺に地蔵堂、善導堂、法然堂と記されている。仁王門は、本堂移転後の宝暦２年（1752）に現在地に建立されており、現在の仁王門は明治24年の大火によって消失し、大正７年に再建されたものである。調査地点は現在、仁王門や仲見世とほぼ同レベルに造成されているが、調査区東端には南北に延びる石積があり、石積より東部は約1.5m低くなる。石積は明治期以降の築造であるが、旧境内域の造成の名残と考えることもできる。

八幡屋磯五郎大門町店地点　調査地は、大門町北部の表参道東側にあたり、八幡屋磯五郎既存店舗と藤屋旅館との間に位置する。大門町の名は善光寺境内南方位に存在した南大門（二天門）に由来すると考えられ、比較的早い段階で門前町が形成された地区といわれている。近世以降、盛んに定期市が開かれた大門町の表参道は大正12年に市区改正（大門の通りを５間から10間に拡幅する工事）を行っており、藤屋旅館も大正13年に新築されている。調査地は藤屋旅館の敷地内通路として利用されていた箇所であり、比較的近代の改変を受けていない。

「信州善光寺惣境内古絵圖」
（善光寺境内一件但附属図トモ（明治４年～８年）（坤）：長野県立歴史館蔵）

「善光寺大本願現今境内」
（善光寺境内一件但附属図トモ（明治４年～８年）（坤）：長野県立歴史館蔵）

「信濃国善光寺略絵図」（長野県立歴史館所蔵）

◎善光寺・門前町の歴史概要

西暦	和暦	善光寺・門前町に関する事象	出典	時代
9世紀後半		瓦葺きの建物が存在（善光寺前身寺か？）		平安
1179	治承 3	火災により善光寺焼失	「平家物語」・「吾妻鏡」	
1187	文治 3	源頼朝が信濃国目代等に善光寺再興を命じる	「吾妻鏡」	
1191	建久 2	善光寺再建落成	「吾妻鏡」	
1268	文永 5	善光寺で火災	「見聞私記」	鎌倉
1313	正和 2	善光寺で火災	「続史愚抄」	
1370	応安 3	火災により善光寺全焼	「花営三代記」	室町
1413	応永 20	金堂再建	「三井続燈記」	
1425	応永 32	善光寺で火災との噂が京で広まる	「看聞日記」	
1427	応永 34	善光寺で火災	「続史愚抄」	
1474	文明 6	火災により如来堂焼失	「尋尊大僧正記」	
1558	永禄 1	武田信玄が本尊を甲斐に移す	「王代記」	
1597	慶長 2	豊臣秀吉が甲斐善光寺如来を京都方広寺大仏殿に移す	「甲斐善光寺文書」	戦国
1598	慶長 3	本尊が信濃に戻される	「梵舜日記」	
1600	慶長 5	豊臣秀頼が如来堂を再建	「慶長日記」	
1601	慶長 6	徳川家康が善光寺に千石の領地を与える（大門町を含む）	「善光寺文書」	江戸
1615	元和 1	落雷により本堂（如来堂）焼失、諸堂・寺中全焼	「本光国師日記」	
1642	寛永 19	仮堂が焼失	「善光寺本堂建立由来留書」	
1650	慶安 3	如来堂仮堂に入仏	「善光寺本堂建立由来留書」	
1666	寛文 6	仮本堂（寛文如来堂）を再建	「善光寺本堂建立由来留書」	
1688	元禄 1	東之門町から出火、横町等焼失	「善光寺史」	
1692	元禄 5	本堂の建設を計画（再建目的の出開帳を寺社奉行より認可）	「善光寺本堂再建回国勧化記」	
1700	元禄 13	火災により再建中の本堂・焼失	「善光寺本堂建立由来留書」	
1705	宝永 2	西之門町より出火、大本願・三寺中・東之門町等焼失	「長野史料」	
1707	宝永 4	本堂再建	「善光寺本堂建立由来留書」	
1750	寛延 3	三門建立	「善光寺別当伝略」	
		堂庭の品物販売について、大門町から訴えあり	「長野市史考」	
1751	宝暦 1	西之門町より出火、大本願・町屋一帯 1500 軒を焼失	「長野市史」	
1752	宝暦 2	仁王門建立	「善光寺別当伝略」	
1759	宝暦 9	経蔵落成	「善光寺別当伝略」	
1830	天保 1	宿坊と大門町が旅客の宿泊について争う	「大勧進文書」	
1847	弘化 4	善光寺地震により家屋 3000 戸、仁王門・大本願等焼失	「弘化四年大地震御届之写」	
1849	嘉永 2	東之門町が条件付で宿屋営業を許可される	「長野市史考」	
1864	元治 1	仁王門再建	「善光寺取調書」	
1871	明治 4	上知令により善光寺領を中野県（のち長野県）に編入		近現代
1891	明治 24	5.24 東之門町から出火、伊勢町・岩石町・元善町焼失		
		6.2 上西之門より出火、仁王門・大本願・院坊・元善町等焼失		
1908	明治 41	本堂特別保護建造物に指定		
1918	大正 7	仁王門再建		
1953	昭和 28	本堂が国宝に指定		
1965	昭和 40	三門・経蔵が重要文化財に指定		

第Ⅲ章　調査成果

第１節　大本願明照殿地点の調査概要

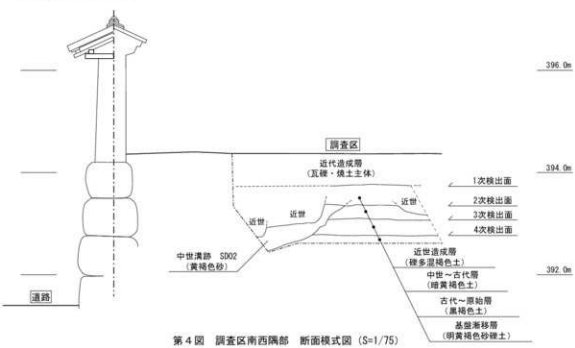
（１）調査の方法

調査は、大本願明照殿改築に伴う地階建設部分約500㎡を対象として、記録保存を行った。調査では掘削深が２ｍを超えるため、既存建物の解体後に掘削範囲外周に土留め矢板を設置して、調査を実施することとした。発掘調査においては、重層的に埋没する各時代の遺構をそれぞれ検出するため、表土層を除去した後に、堆積土層に応じて検出面を設定し、４次にわたる掘り下げと遺構確認を実施した。

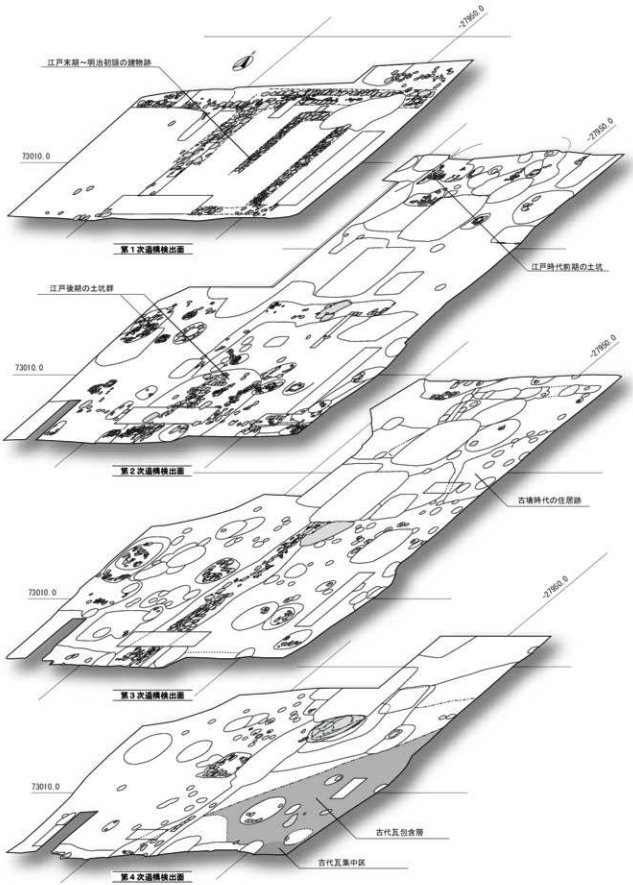
（２）基本層序

調査では、試掘調査成果および調査区南部の土層確認ベルトを基に、堆積状況に応じて検出面を設定した。地表下約60㎝までは、多量の焼土・炭化物とともに江戸時代末から明治時代の製品が包含されており、明治24年（1891）の火災後から大正３年（1914）明照殿造営までの近代造成と想定される。調査では、この近代造成土除去後を第１次面、中世～古代の堆積と想定される暗褐色土直上を第２次面、古代～原始の堆積と想定される黒褐色土直上を第３次面、遺物の包含されない明褐色砂礫土（基盤漸移層）直上を第４次面として遺構検出にあたった。なお、調査区南東隅は基盤漸移層が南東方向に落ち込んでおり、傾斜地に古代瓦片が集中して堆積している状況が確認されたため、傾斜地の古代瓦包含層を第４次遺構検出面の遺構として取り扱う。

また調査区は南東方向に緩く傾斜しており、旧来の自然地形はより大きな高低差があったと思われる。調査区北端部では393.3ｍにて基盤層が確認されるのに対し、調査区南端の基盤層（基盤漸移層）高は391.9ｍであり、1.4ｍの比高差が看取される。そのため、調査区北部では表土除去後が第２次遺構検出面となり、第３次遺構検出面は基盤層直上となった。



第４図　調査区南西隅部　断面模式図（S=1/75）



第５図　大本願明照殿地点　調査区概念図

◎長野遺跡群　元善町遺跡　遺構製察表

遺構No.	検出面 1	2	3	4	想定時期	遺構概要・規模	備考	出土遺物 概要	重量(kg)	図版
SB01		○			古墳時代後期	竪穴住居跡（北東軸）			0.67	
SB02			○		古墳時代前期	竪穴住居跡（北東軸）		土器（高坏・甕）	0.78	第 18 図
SB03				○	古墳時代	竪穴住居跡			0.09	
SD01	○				江戸末～明治期	L字の石組溝、内法幅 30 ～ 40cm	雨落溝か	瓦・陶磁器・金属製品	3.94	第 7·32 図
SD02			○	○	中世（15 ～ 16C）	東西の溝跡（幅不明）		陶磁器・土器	0.69	第 18 図
SD03				○	中世（15 ～ 16C）	東西溝跡（幅不明）		土器	5.41	第 18 図
SD04		○			江戸初期	L字の溝跡	SD01の掘り込み	陶磁器・土器	3.53	第 10 図
SD05		○			江戸末～明治期	東西の溝跡		陶磁器・金属製品	2.43	第 10·33 図
SD06		○			江戸後期	東西の溝跡、地鎮転用	建物地業か	陶磁器	0.31	第 10 図
SD07		○	○	○	江戸期	南北の溝跡	井戸からの排水路か	陶磁器・土器	4.19	第 18 図
SD08		○				南北の溝跡			0.01	
SE01	○	○	○	○	江戸後期	円形土坑（直径約 1.5m）	井戸跡（旧 SK32）	陶磁器・土製品・金属製品	0.80	第 10·32 図
SK01	○				江戸後期	長方形土坑（北部調査区外）		陶磁器	0.62	第 10 図
SK02	○				江戸末～明治期	円形土坑（直径約 2.7m）		瓦・陶磁器・土器・金属製品	0.42	第 11·32 図
SK03	○				江戸後期	不整形土坑		陶磁器・土器	2.18	第 11 図
SK04	○				江戸前期	形状不明、底面より SK08・SK09 検出		陶磁器・石製品	1.09	第 11 図
SK05	○					円形土坑（直径約 1.4m）			0.05	
SK06	○					楕円形土坑（北東軸：2.1m × 0.9m）				
SK07	○	○			江戸中期	円形土坑（直径約 1.9m）		瓦・陶磁器・土器	2.5	第 11 図
SK08	○					楕円形土坑（西半部調査区外）			0.05	
SK09	○					長方形土坑（北半部調査区外）			0.04	
SK10	○					不整形			4.46	
SK11	○					楕円形土坑			0.1	
SK12	○					円形土坑（直径約 0.7m）			0.13	
SK13	○					不整形			0.13	
SK14	○					不整形、多量の礫（五輪塔含む）			0.13	
SK15	○	○				東西軸長方形土坑	SK39と同一	陶磁器・土器	0.92	第 12 図
SK16	○					円形土坑（直径約 1.5m）			0.03	
SK17	○					円形土坑（直径約 0.6m）			0.13	
SK18	○					楕円形土坑（東西軸：0.8m × 0.5m）			0.02	
SK19	○				江戸期	円形土坑（直径約 0.6m）		土器	0.06	第 12 図
SK20	○					楕円形土坑（約 0.4m × 0.2m）			0.01	
SK21	○					円形土坑（直径約 0.4m）				
SK22	○				江戸末～明治期	円形土坑（直径約 1.0m）		陶磁器・金属製品	0.13	第 12·33 図
SK23	○	○	○			楕円形土坑（約 1.6m × 1.1m）		陶磁器・金属製品	1.63	第 12·33 図
SK24	○	○	○			楕円形土坑（南半部調査区外）			5.96	
SK25	○	○	○	○	江戸後期	円形土坑（直径約 1.6m）		陶磁器・土器・金属製品	6.56	第 12·13·33 図
SK26	○					円形土坑（直径約 0.6m）			0.01	
SK27	○					円形土坑（直径約 0.9m）			0.04	
SK28	○	○			江戸後期	楕円形土坑（約 1.8m × 1.1m）		陶磁器	1.46	第 13 図
SK29	○				江戸後期	長方形土坑（南北軸：2m × 1.1m）		瓦・陶磁器	1.89	第 13 図
SK30	○					楕円形土坑（約 1.2m × 0.9m）			0.32	
SK31	○				江戸中期	楕円形土坑（南北軸：1.4m × 0.7m）		陶磁器・金属製品	0.3	第 13·32 図
SK32						欠番				
SK33	○	○	○	○	江戸後期	円形土坑（直径約 2.7m）		陶磁器・金属製品	10.6	第 13·14·32·33 図
SK34	○				江戸末～明治期	長方形土坑（南北軸：1.1m × 0.6m）		陶磁器	0.05	第 14 図
SK35	○	○			明治期以降	長方形土坑（南半部調査区外）		陶磁器・金属製品	0.1	第 14·32 図
SK36	○	○				円形土坑（直径約 0.9m）			0.03	
SK37	○					円形土坑（直径約 1.0m）			0.05	
SK38		○			江戸前期	円形土坑（直径約 2.5m）		陶磁器・土器	2.51	第 19 図
SK39						欠番			0.63	
SK40	○	○	○	○	江戸後期	方形土坑（約 1.5m 四方）		陶磁器・金属製品	3.17	第 14·32·33 図
SK41		○	○	○	江戸期	楕円形土坑（約 2.0m × 1.6m）		土器	3.85	第 19 図
SK42		○	○			円形土坑（直径約 2.2m）			3.7	
SK43		○	○		江戸期	不整形		土器	0.46	第 19 図
SK44		○			江戸前期	楕円形土坑（約 1.4m × 1.0m）		陶磁器	0.03	第 19 図
SK45		○			江戸前期	不整形、底面に SK56		陶磁器・土器・石製品・金属製品	1.38	第 19·32 図
SK46	○	○				円形土坑（直径約 1.6m）	（旧 SK33 ﾖﾘを含む）	瓦・陶磁器・土器・金属製品	15.71	第 14·15·32·33 図
SK47		○	○	○	江戸期	円形土坑（直径約 2.0m）	五輪塔多数、底面下石敷	土器・金属製品	0.95	第 19 図
SK48		○				不整形			0.58	
SK49		○	○	○	江戸期	楕円形土坑		土器	0.74	第 19 図
SK50		○				円形土坑（直径約 0.8m）			0.03	
SK51		○	○			楕円形土坑（約 1.1 × 0.9m）		瓦	0.14	第 19 図
SK52		○				不整形	複数の土坑か		0.15	
SK53		○				円形土坑（直径約 0.9m）			0.31	
SK54		○				円形土坑（直径約 0.7m）			0.02	
SK55		○			江戸期	楕円形土坑（約 1.4m × 1.0m）		土器	0.26	第 19 図
SK56		○	○			円形土坑（直径約 0.8m）			0.22	
SK57			○			楕円形土坑（約 1.0m × 0.6m）			0.11	
SK58			○			方形土坑（約 2.2m 四方）				
SK59			○			形状不明			0.09	
SK60			○		古墳時代後期？	形状不明	巨石の掘り出し跡か	土器（高坏）	0.17	第 22 図
SK61			○		江戸期	楕円形土坑		土器	0.18	第 22 図
SN01	○					石積み				
SN02	○				江戸後期	南北約 4.6m 東西 2m の L 字の石列	建物地業か	瓦・陶磁器・金属製品	1.23	第 7 ·8 · 33 図
SN03	○					東西約 5.5m の石列、幅約 50cm	建物地業か			
SX01			○		古墳時代後期	方形状溝跡か？		須恵器・土器	0.43	第 22 図
瓦溜空間				○		布目瓦溜空間		瓦・須恵器・土器	98.97	第 22 · 23 ～ 31 図

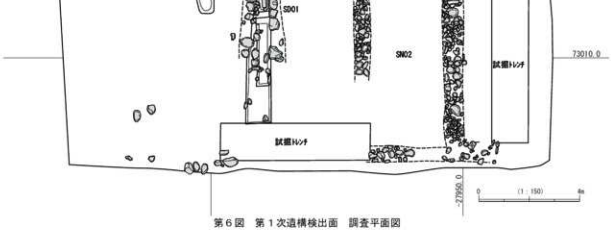
（3）調査概要

調査においては、重層的に埋没する各時代の遺構をそれぞれに検出するため、表土層を除去した後に、堆積土層に応じて検出面を設定し、４次にわたって掘り下げと遺構確認を実施した。調査では古墳時代から近世の遺構を確認しているが、古代や中世に比定される遺構は少なく、大部分は江戸期の遺構である。また、江戸期の井戸跡や土坑などは、掘削深が大きいため数次面にわたって確認されている。以下、遺構検出面ごとの概要を記す。

○第１次遺構検出面

遺構の概要　１次面は、調査区南部のみで確認し、溝跡１箇所（SD01）と石列３箇所（SN01・SN02・SN03）を検出した。SD01は内法幅30～40cmの石組溝であり、L字状に検出された。SD01西部では、溝の底面下からも石積みが確認されている。SN01はSD01の北西隅から西に延びる石積みであり、SD01南壁石積みと同一ライン状に存在するが、切れ合い関係よりSD01より古い段階の石積みと思われる。SN02はSD01の南に近接する石列遺構であり、平面形は東西約3.6m（２間）、南北約7.2m（４間）の長方形を呈する。近代の撹乱によって定かではないが、東に延びる可能性もある。SN03はSN01とほぼ同一ライン状に西に延びる東西約5.5mの石列であるが、SN01を掘り込んで築かれている。SN01は石積みだが、SN02およびSN03は溝状の掘り込みに石材を充填した建物基礎の根固めと想定される。SD01は建物に伴う雨落溝と判断される。

出土遺物　江戸時代中期から末期までの肥前系陶磁器を中心に、明治時代以降の瀬戸・美濃系磁器、京焼系・薩摩系陶器が出土している。SD01からは江戸時代末の磁器とともに藁灰釉が施釉された初期肥前系陶器が出土している。２次面にて検出するSD04は、石組溝（SD01）形成時の掘り込みであり、近世初期の製品が集中して出土していることから、江戸初期に石組溝が築造され、多少の改変を経ながらも幕末まで利用された状況が伺える。SN02・SN03は幕末から明治初頭の陶磁器が出土しており、明治11年に築かれた長野電信分局の建物基礎と想定される。SN01の機能は定かではないが、石組溝(SD01)西側の下部石積みと同時期の遺構と想定される。



第６図　第１次遺構検出面　調査平面図

第１次遺構検出面　全景

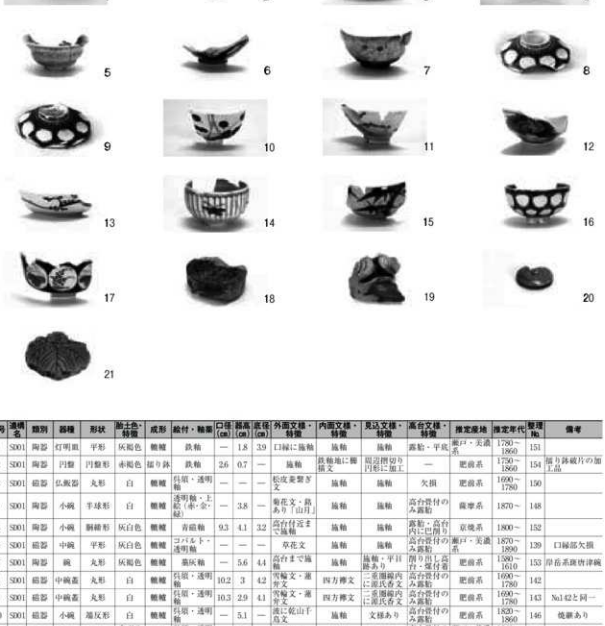
SN01

SN02

SN03

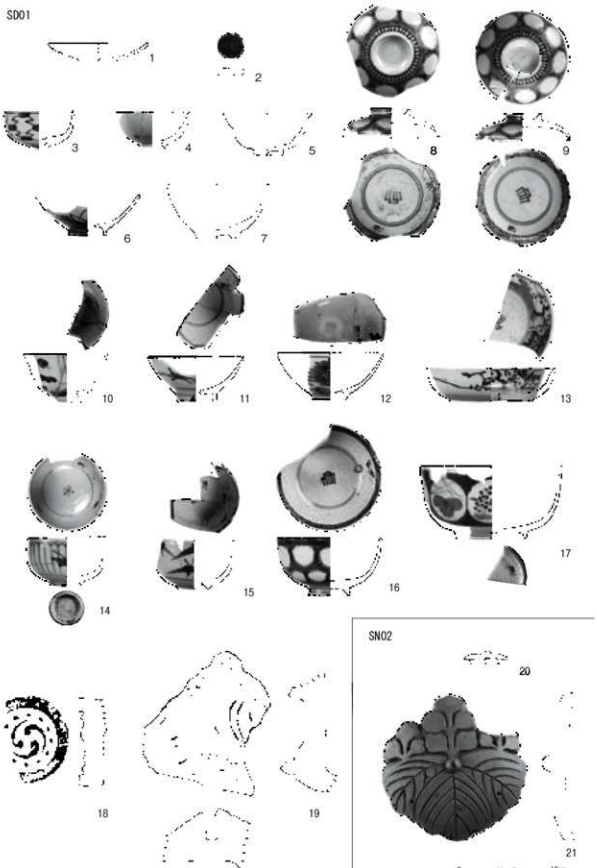
埋設木箱

SD01



番号	遺構名	類別	器種	形状	胎土色・特徴	成形	紋付・釉薬	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面文様・特徴	内面文様・特徴	見込文様・特徴	高台文様・特徴	推定産地	推定年代	整理No.	備考
1	SD01	陶器	灯明皿	平形	灰褐色	轆轤	鉄釉	—	1.8	3.9	口縁に施釉	施釉	施釉	露胎・平底	瀬戸・美濃系	1780～1860	151	
2	SD01	陶器	灯盤	円盤形	赤褐色	型与	鉄釉	2.6	0.7	—	施釉	鉄釉地に櫛描文	周辺押切り円形に施工	—	肥前系	1750～1860	154	型与陶破片の加工品
3	SD01	碗類	広腰碗	丸形	白	轆轤	石灰・透明釉	—	—	—	松皮菱繋ぎ文	施釉	施釉	欠損	肥前系	1690～1780	150	
4	SD01	陶器	小碗	半球形	白	轆轤	透明釉・上絵（赤・金・緑）	—	3.8	—	菊花文・鉄あり「山月」	施釉	施釉	高台登付のみ露胎	薩摩系	1870～	148	
5	SD01	陶器	小碗	朝顔形	灰白色	轆轤	青磁釉	9.3	4.1	3.2	高台付近まで施釉	施釉	施釉	露胎・高台内に巴削り	京焼系	1800～	152	
6	SD01	碗類	中碗	平形	灰白色	轆轤	コバルト・透明釉	—	—	—	草花文	施釉	施釉	高台登付のみ露胎	瀬戸・美濃系	1870～1890	139	口縁部欠損
7	SD01	陶器	碗	丸形	灰褐色	轆轤	藁灰釉	—	5.6	4.4	高台まで施釉	施釉	施釉・平目跡あり	削り出し高台・藁付着	肥前系	1580～1610	153	岸岳系唐津譜碗
8	SD01	碗類	中碗蓋	丸形	白	轆轤	石灰・透明釉	10.2	3	4.2	雲輪文・瀧紋文	四方禅文	二重圏線内に混沌香文	高台登付のみ露胎	肥前系	1690～1780	142	
9	SD01	碗類	中碗蓋	丸形	白	轆轤	石灰・透明釉	10.3	2.9	4.1	雲輪文・瀧紋文	四方禅文	二重圏線内に混沌香文	高台登付のみ露胎	肥前系	1690～1780	143	No.142と同一
10	SD01	碗類	小碗	端反形	白	轆轤	石灰・透明釉	—	5.1	—	流に乗る山千鳥文	施釉	文様あり	高台登付のみ露胎	肥前系	1820～1860	146	焼継あり
11	SD01	碗類	小碗	丸形	白ガラス質	轆轤	石灰・透明釉	—	4.6	—	稲穂文	横線	圏線	高台登付のみ露胎	瀬戸・美濃系	1840～1870	141	
12	SD01	碗類	中碗	平形	灰白色	轆轤	コバルト・透明釉	—	4.9	3.8	草花文	横線・草文？	施釉	高台登付のみ露胎	瀬戸・美濃系	1870～1890	140	
13	SD01	碗類	鉢類	丸輪花形	白	轆轤・型押し	石灰・透明釉	—	3.5	—	唐草文	梅樹文	五弁花文	高台登付のみ露胎	肥前系	1730～1810	144	
14	SD01	碗類	小碗	半球形	白	轆轤	石灰・透明釉	8.5	5.2	3.6	櫛に蔓文	二重線	圏線内に五弁花文	高台登付のみ露胎	肥前系	1780～1860	155	朱文字、焼継あり
15	SD01	半磁器	小碗	半球形	灰白色	轆轤	石灰・透明釉	—	5.2	3.2	雪持笹文	二重線	圏線内に星文	高台登付のみ露胎	瀬戸・美濃系	1840～1870	147	
16	SD01	碗類	中碗	丸形	白	轆轤	石灰・透明釉	11.1	6.1	4.4	雲輪文・瀧紋文	四方禅文	二重圏線内に混沌香文	高台登付のみ露胎	肥前系	1690～1780	149	
17	SD01	碗類	蓋物鉢	腰張形	白	轆轤	石灰・透明釉	—	7.8	—	松葉梅文・枕草文	口縁を長いて施釉	施釉	高台登付のみ露胎	肥前系	1780～1860	145	朱文字
20	SN02	陶器	蓋	台形	灰	轆轤・貼付	灰釉	4.8	1.3	3.3	施釉	露胎	貼り付け把手	一部露胎	瀬戸・美濃系	1780～1860	160	短歌の蓋か
22	SN02	碗類	鉢類	輪花形	白	轆轤・型押し	石灰・透明釉・鉄彩	—	4.3	8.8	口縁に鉄彩・施釉	流文・滝文	壁の滝登り文	蛇の目凹形高台	肥前系	1780～1860	158	朱文字、焼継あり

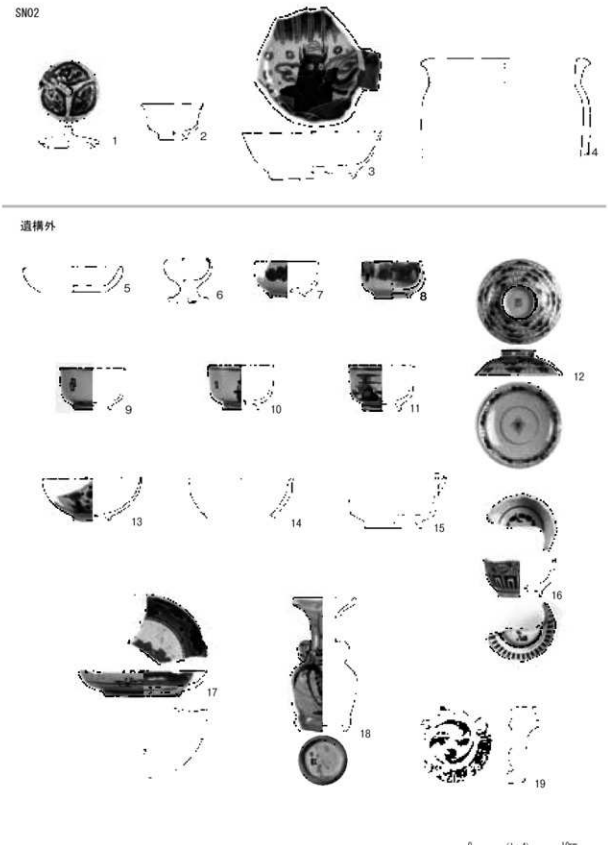
番号	遺構名	類別	種類	形状	胎土色・特徴	軸薬	総幅(cm)	横幅(cm)	厚さ(cm)	文様	推定年代	整理No.	備考
18	SD01	瓦	軒丸瓦		灰白	焼し瓦	9.2	—	2.1	巴文	江戸時代	—	
19	SD01	瓦	飾瓦		明灰	焼し瓦	—	—	2.3	桐の葉か？	江戸時代	—	
21	SN02	瓦	飾瓦		灰	焼し瓦	15.4	15.0	1.8	桐文	江戸時代	—	



第７図　１次検出面遺構出土遺物（SD01・SN02）

番号	遺構名	類別	器種	形状	胎土色・特徴	成形	絵付・釉薬	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面文様・特徴	内面文様・特徴	見込文様・特徴	高台文様・特徴	推定産地	推定年代	整理No.	備考
1	SN02	箱型	蓋	平形	白	轆轤	伝景・透明釉	6.5	2.3	5.4	—	—	菱形窓絵に松・竹・梅文	蓋設置部貼	肥前系	1780～1860	156	灰吹の蓋か
2	SN02	陶器	小碗	筒端反形	黄灰色	轆轤	伝景・鉄絵・透明釉	—	3.8	2.9	松文？	施釉	施釉	高台畳付の み露貼	京焼系	1800～1860	157	煎茶碗か
3	SN02	箱型	鉢類	輪花形	白	轆轤・型押し	伝景・透明釉・鉄彩	—	4.3	8.8	口 羽 に 鉄彩・施釉	波文・渦文	壁の渦巻き文	蛇の目凹形高台 朱文字	肥前系	1780～1860	158	焼継あり
4	SN02	陶器	壺	頸部縊形	明灰色・白粒子	轆轤	鉄釉	—	—	—	施釉	施釉	—	—	松代焼系	1810～1860	159	胴部下半欠損
5	検1	土器	ちわら汁小鍋	丸形	橙茶	轆轤糸切	なし	—	2.4	—	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕	中央に窪持	回転糸切	在地系	不明	223	
6	検1	陶器	壺瓶	台付だんごう形	白灰	轆轤・貼付	鉄釉	5.0	4.7	3.6	瓔下まで施釉	施釉	芯立て（上面平円境）	回転糸切、中央に石	瀬戸・美濃系	1700～1800	215	
7	検1	箱型	蓋物小瓶	腰張形	白	轆轤	伝景・透明釉	—	3.7	3.8	コンニャク印唐草文	口縁文縁い て施釉	施釉	高台畳付の み露貼	肥前系	1690～1780	216	
8	検1	箱型	小碗	筆管形	白	轆轤・指押し	鉄彩・透明釉	6.3	3.8	3.7	口羽から側部に鉄彩・指押し鉄彩	口羽から側部に鉄彩	施釉	高台畳付の み露貼	不明	19ｃ	221	
9	検1	箱型	小碗	腰張形	白 ガラス質	轆轤	伝景・透明釉	—	4.4	3.8	山水家屋文	横線	施釉	高台畳付の み露貼	瀬戸・美濃系	1840～1870	219	
10	検1	箱型	小碗	腰張形	白灰	轆轤	伝景・透明釉	6.8	4.6	—	山水家屋文	横線	施釉	高台畳付の み露貼	瀬戸・美濃系	1840～1870	220	
11	検1	箱型	小碗	腰張形	白灰	轆轤	伝景・透明釉	6.8	4.7	3.9	山水家屋文	横線	施釉	高台畳付の み露貼	瀬戸・美濃系	1840～1870	218	
12	検1	箱型	中鉢蓋	端反形	白 ガラス質	轆轤	伝景・透明釉	9.4	2.7	3.7	樹木・網文 繋ぎ文重複	樹木・網文 繋ぎ文	腰線内に花文	高台畳付の み露貼、高台内に銘	肥前系	1820～1860	222	
13	検1	箱型	碗	浅半球形	白	轆轤	伝景・透明釉	—	4.5	—	若松文・雷輪文・花文	施釉	施釉	高台畳付の み露貼	肥前系	1690～1740	213	
14	検1	陶器	碗	天目形	灰褐色	轆轤	鉄釉	—	—	—	瓔中央まで施釉	施釉	施釉	—	瀬戸・美濃系	1650～1700	311	底部、高台欠損
15	検1	陶器	片口鉢	筒形	灰褐色	轆轤・貼付	鉄釉	—	—	5.8	瓔下まで施釉	淡く施釉	淡く施釉	畳敷・削り出し高台	瀬戸・美濃系	1780～1860	312	口縁部欠損
16	検1	箱型	小鉢	菊花形	白	轆轤・型押し	伝景・透明釉	—	—	—	幾何 草文・連弁文	—	二重腰線内に壺状紋型 格文	畳敷・高台内に文字	肥前系	1780～1860	217	口縁部欠損
17	検1	箱型	小皿	丸形	白	轆轤	伝景・透明釉	—	2.6	—	唐草文	雷輪内にコンニャク印	雷輪内に花文	高台畳付の み露貼、高台内に腰線	肥前系	1690～1740	214	
18	検1	箱型	仏花瓶	壺口形	白	轆轤・貼付	伝景・透明釉	—	14.1	5.1	草花文	口縁のみ施釉	露貼	高台畳付の み露貼・朱で文字書き	波佐見系	1690～1740	310	焼継あり

番号	遺構名	類別	種類	形状	胎土色・特徴	釉薬	縦幅(cm)	横幅(cm)	厚さ(cm)	文様	推定年代	整理No.	備考
19	検1	瓦	軒丸瓦		黄褐色		8.2	—	1.5	巴文	不明		



第８図　第１次面出土遺物（SN02・遺構外）

○第２次遺構検出面

遺構の概要

主な遺構と概要　２次面では、４箇所の溝跡（SD）と36基の土坑（SK）、１箇所の井戸跡（SE）を確認した。調査区中央部のSD04は、１次面の石組溝（SD01）の形状と対応しており、SD01築造時の掘り込みと考えられる。調査区南東隅のSD05・SD06は東西方向の溝跡であり、SD06は五輪塔（地輪）を転用して並べている。調査区北部の土坑群からは多数の江戸初期の陶磁器、かわらけが出土しており、多くは江戸時代前期の遺構と考えられる。ただし、土坑の形状・位置関係などに規則性は看取されず、遺構の性格を推測することは難しい。また、調査区北東部の土坑（SK01･SK02･SK03）は江戸時代末から明治初頭の遺構と考えられる。調査区南部の土坑は、江戸時代中期から後期の所産と想定される。調査区南西部では井戸跡（SE01）を確認しており、出土遺物から江戸末期まで使用していたと推測される。

出土遺物の概要

調査区北東部の土坑（SK01～03）　SK01からは松代焼系の秉燭（ひょうそく）（図10－25）が一点出土している。台付きのたんころ形で、瀬戸・美濃系の秉燭を手本とした製品と推定される。SK02からは瀬戸・美濃系磁器碗１点と、かわらけ２点が出土している。瀬戸･美濃系磁器碗は筒丸形で、江戸時代末期～明治時代初期の製品と見られる。SK03からは波佐見系のくらわんか碗１点と京・信楽系の色絵碗１点、他にかわらけ２点と土器鉢１点が出土している。

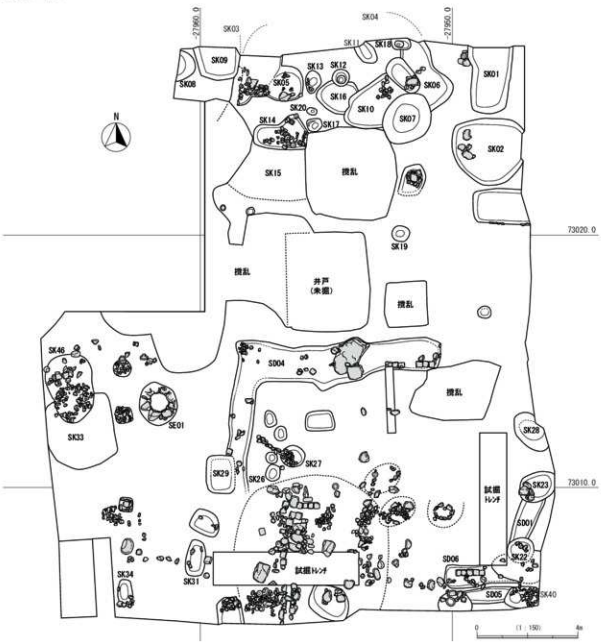
調査区北部土坑群（SK04～19）　SK04からは近世初期の瀬戸・美濃系陶器碗２点と中世の広口長頸壺破片１点が出土している。瀬戸・美濃系陶器碗の内１点（図11－11）は、鉄絵地に長石釉が施釉されたいわゆる志野織部製品である。広口長頸壺破片（図11－12）は頚部の付根に凸帯があり、平安期に尾張地方で生産された製品と推定される。釉薬が表面に掛かっているが、二次被熱を受け全体に釉薬が発泡しており、意図的に施釉されたものか自然釉かは判別できない。SK07からは肥前系磁器・瀬戸美濃系陶器・かわらけが出土している。肥前系磁器は江戸時代中期に比定される浅半球形染付碗だが、下層から出土している瀬戸美濃系陶器碗（図11－17）は近世初期の志野製品とみられる。SK15からは肥前系陶器碗１点、瀬戸・美濃系陶器小皿１点、かわらけ１点が出土した。肥前系陶器碗（図12－３）は灰釉が施釉されているが、二次被熱を受けており、内外に一部炭化物が付着する。大橋編年Ⅰ期（1580～1610年代）に比定される製品と見られる。瀬戸・美濃系陶器小皿は緑味がかった灰釉が施釉され、見込みは露胎である。近世初期の大窯後期製品と見られる。SK19からは、かわらけの小皿１点が出土している。内外口縁部に煤付着が見られ、灯明具として使用されたものと考えられる。

調査区南部の土坑（SK22～35,40,46）　SK22からは江戸時代末期に比定される肥前系磁器２点が出土している。１点は染付の腧皿（ひなす）で高台に「上人様」の朱墨があり、もう１点は色絵の鶴首瓶である。SK23からは大橋編年Ⅳ期（1690～1780年代）の肥前系染付磁器２点（丸形碗、腧皿）が出土している。SK25からは肥前系磁器染付腧皿１点・松代焼陶器植木鉢３点・備前系焼締皿１点・越前系陶器鳶口小壺１点・関西系磁器染付馬上盃１点他に土器・土製品などが出土しており、概ね江戸時代後期に比定される。SK28からは江戸時代中期以降の肥前系染付磁器２点と波佐見系青磁仏花瓶１点が出土している。SK29からは漉器と灯明受皿計２点が出土した。灯明受皿は江戸時代中期以降の瀬戸・美濃製品である。SK31からは江戸時代中期頃の瀬戸・美濃系灰釉碗が出土している。SK32からは肥前系染付磁器腧皿と松代系陶器秉燭、ミニチュア宝塔土製品が出土している。SK33・SK46からは多量の陶磁器が出土しており、肥前系陶磁器と瀬戸・美濃系陶器が主である。肥前系陶器は擂鉢２点が出土しており、磁器は碗、皿、火入、灰吹などが見られる。瀬戸・美濃系陶器は碗、皿、仏飯器、三足香炉、壷、片口鉢などが確認される。他に波佐見系くらわんか碗と京・信楽系色絵碗、土器・土製品が出土している。下層

から焙烙３点などが確認される。いずれも江戸時代中期から後期に比定される製品とみられる。SK34からは江戸時代末期に比定される肥前系の半球形碗１点が出土している。SK35からは明治以降の瀬戸・美濃系磁器隅切四方形小皿１点が出土。SK40からは江戸後期以降の京焼系製品とみられる軟質施釉陶器の緑釉竹筒形涼炉が出土した。他に江戸時代後期から末期ごろの瀬戸・美濃系染付磁器小碗が供出している。

溝跡（SD04）　瀬戸・美濃系陶器が多く出土している。特筆すべきは、北列に近世初期の製品が集中しており、瀬戸・美濃系陶器では天目形碗１点（図10－８）、灰釉小皿２点（図10－２・３）、長石釉菊花形小皿１点（図10－10）が確認され、いずれも大窯後期の製品とみられる。また、大橋編年Ⅰ期（1580～1610年代）に比定される肥前系陶器の胴締輪花形灰釉小皿（図10－９）も１点確認される。

その他の遺構（SD05・06）　SD05からは江戸期の肥前系染付磁器小碗・小皿、陶器の擂鉢３点と明治時代以降の瀬戸・美濃系磁器１点が出土している。SD06からは肥前系京焼風陶器碗１点と京・信楽系色絵碗１点が出土している。



第９図　第２次遺構検出面　調査平面図

第２次遺構検出面（北半）

第２次遺構検出面（南半）

井戸跡
（SE01）

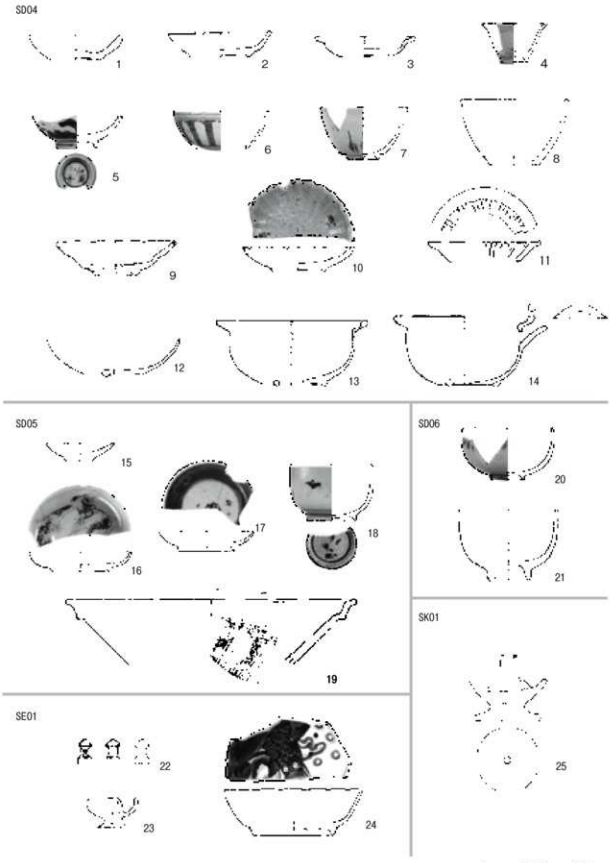
SK06・SK07・SK10

SK29

SD04

SD05・SD06

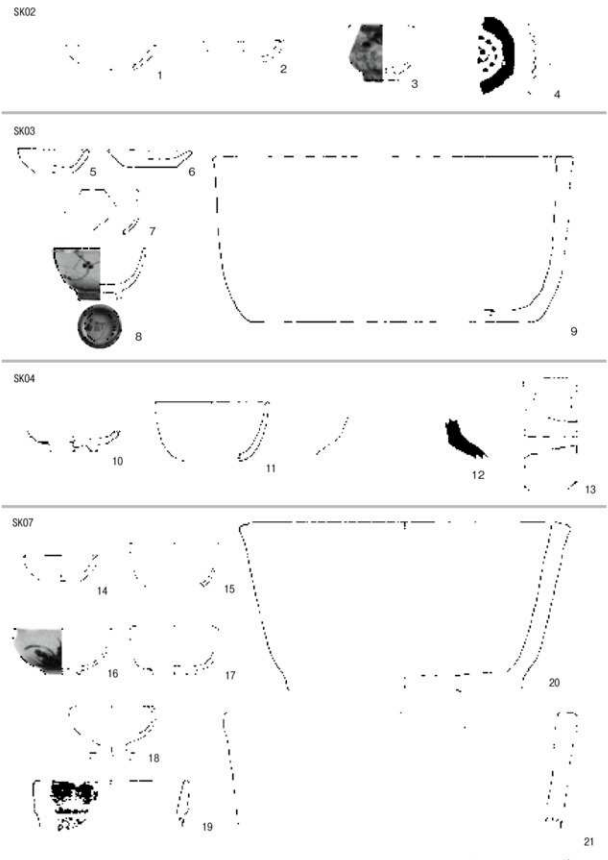
番号	遺構名	類別	器種	形状	胎土色・特徴	成形	釉付・釉薬	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面文様・特徴	内面文様・特徴	見込文様・特徴	高台文様・特徴	推定産地	推定年代	整理No.	備考
1	SE04	土器	かわらけ小皿	薄内折形	赤褐色	轆轤糸切	なし	10.1	2.5	5.6	轆轤ナデ一部煤付着	轆轤ナデ一部煤付着	轆轤ナデ痕	回転糸切	在地系	不明	174	
2	SE04	陶器	小鉢	丸形	灰褐色	轆轤	灰釉	11.8	2.8	6.3	全面に施釉	施釉	施釉・釉薬詰めに留まる	施釉・粘土接着ヘラ	瀬戸・美濃系	1530～1570	169	
3	SE04	陶器	小鉢	折縁形	灰白色	轆轤	灰釉	—	2	5.7	全面に施釉	施釉	施釉・中央に露胎	一部施ハケ・粘土接着ヘラ	瀬戸・美濃系	1570～1600	170	
4	SE04	瓶器	徳口	端反形	白灰	轆轤	灰釉・透明釉	—	4.1	3.8	草花文	施釉	施釉	高台巻付の為露胎、砂付痕	肥前系	1690～1740	163	
5	SE04	手瓶器	瓶	丸形	白灰	轆轤	灰釉・透明釉	—	—	4.2	雪輪文・梅樹文	—	施釉	高台巻付痕跡・圏線内に三文字	波佐見系	1680～1810	161	口縁部欠損
6	SE04	瓶器	小瓶	丸形	白	轆轤	灰釉・透明釉	9.9	—	—	唐草柱文	二重線	—	—	肥前系	1780～1860	162	底部、高台欠損
7	SE04	陶器	小碗	杉形	灰白色	轆轤	鉄絵・灰釉	9	5.5	3.3	小杉文・高台まで施釉	施釉	施釉	露胎・削り出し高台	京・信楽系	1700～1770	166	
8	SE04	陶器	中碗	天目形	灰褐色	轆轤	鉄釉	—	—	—	漏手まで施釉	施釉	施釉	露胎	瀬戸・美濃系	1530～1600	172	底部、高台欠損
9	SE04	陶器	小鉢	輪縁形	灰	轆轤・指押し	鉄釉	—	3.5	4.8	漏手まで施釉・口縁金泥押圧成形	施釉	施釉・段差あり	露胎・削り出し高台	肥前系	1580～1610	173	古唐津鉢
10	SE04	陶器	小鉢	菊花形	灰白色	轆轤・ヘラ削り	長石釉	—	2.7	5.9	全面に施釉	施釉・ヘラ削り	菊花状縞	高台外にハリ跡あり	瀬戸・美濃系	1580～1600	171	
11	SE04	陶器	小鉢	折縁ソギ形	灰	轆轤・ヘラ削り	灰釉	—	—	—	施釉、二次被熱あり	菊花状縞	—	—	瀬戸・美濃系	1570～1600	164	底部、高台欠損
12	SE04	陶器	土鍋	三足形	灰	轆轤・貼付	灰釉	—	—	6.2	漏手まで施釉	施釉	施釉	露胎・小さな三足付き	伊賀系？	19 c	165	口縁部欠損
13	SE04	陶器	土鍋	折縁三足形	灰褐色	轆轤・貼付	鉄釉	—	6.7	6.1	漏手まで施釉	施釉	施釉	露胎・小さな三足付き	瀬戸・美濃系	1780～1860	167	把手部欠損
14	SE04	陶器	土鍋	折縁注口形	灰褐色	轆轤・貼付	鉄釉	—	8.6	5.3	注口・把手付き	施釉	施釉	露胎・小さな三足付き	瀬戸・美濃系	1780～1860	168	
15	SE05	陶器	小鉢	平形	灰褐色・輝石・砂粒	轆轤糸切	鉄釉	—	1.8	—	口縁に施釉	口縁のみ施釉	露胎	回転糸切	不明	不明	177	
16	SE05	陶器	小鉢	丸形	白ボラ又質	轆轤	青磁釉・透明釉・上絵	—	1.9	6	青磁釉施釉	青磁釉施釉	青磁釉施釉・山水文色絵	高台巻付露胎・高台内施釉	瀬戸・美濃系	1870～	179	
17	SE05	陶器	小鉢	丸形	白	轆轤	灰釉・透明釉	—	2.1	6.1	横線	仏須施に黒弾き文様文	雁縁内に玉青花文	高台巻付露胎・圏線	肥前系	1690～1740	176	
18	SE05	陶器	小碗	腰張形	白	轆轤	灰釉・透明釉	8.6	5.9	5.4	草花文	施釉	施釉	雁縁内に「大明年製」	肥前系	1650～1690	175	
19	SE05	陶器	擂鉢	二段口縁形	赤褐色	轆轤	鉄釉	—	—	—	口縁に施釉	口唇のみ施釉・下露胎部に擂目	—	—	肥前系	1650～1690	178	口縁部破片
20	SE06	陶器	碗	手球形	灰	轆轤	灰釉・色絵（青・緑）	—	5.6	3.5	口縁部に色絵で十菊花文	施釉	施釉	露胎・削り出し高台	京・信楽系	1780～1860	181	
21	SE06	陶器	中碗	腰張形	灰褐色	轆轤	灰釉	10.5	7.6	4.3	施釉	施釉	施釉	高台巻付露胎・砂付痕	肥前系	1650～1690	180	
22	SE01	土製品	ミニチュア宝塔	宝塔形	灰褐色	型押し	なし	1.5	—	1.5	縦中央に鳥居	縦中央に円	塔芯欠損	中央に孔	不明	近世	47	
23	SE01	陶器	染壺	寄付たんころ形	赤茶・白粒子	轆轤	鉄釉	—	3.1	3.1	全面に施釉	施釉	施釉	芯立て（上面平円環）	信楽系	1810～1860	46	
24	SE01	瓶器	鮑瓶	梅花形	白	轆轤・型押し	灰釉・透明釉・鉄彩	—	4.8	8.7	口縁に鉄彩・施釉	波文	鮑文	蛇の目円形高台・米文字	肥前系	1780～1860	45	焼継あり
25	SE01	陶器	染壺	寄付たんころ形	赤茶・白粒子	轆轤	土灰釉	—	—	6.5	施釉	施釉	施釉	芯立て（上面平円環）	信楽系	1810～1860	1	



第10図　第２次面遺構出土遺物（SD04・SD05・SD06・SE01・SK01）

番号	遺構名	種別	器種	形状	胎土色・特徴	成形	絵付・釉薬	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面文様・特徴	内面文様・特徴	見込文様・特徴	高台文様・特徴	推定産地	推定年代	整理No.	備考
1	SK02	土器	かわらけ小皿	腰内折形	赤褐色	轆轤水切	なし	—	3.1	—	轆轤ナデ、底部に煤付着	轆轤ナデ痕	—	回転糸切	在地系	不明	3	
2	SK02	土器	かわらけ小皿	腰内折形	赤褐色	轆轤水切	なし	—	2.3	—	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕	—	回転糸切	在地系	不明	4	
3	SK02	瓶器	中瓶	筒丸形	白(ガラス質)	轆轤	引掛・透明釉	—	5.8	—	素掘粘文・蓮文型文	無文	無文	高台畳付の為鉋粘	瀬戸・美濃系	1840～1870	2	
5	SK03	土器	かわらけ小皿	平底丸形	赤褐色	轆轤水切	なし	7.4	2.6	4	轆轤ナデ、口縁に煤付着	轆轤ナデ痕・煤付着	轆轤ナデ痕・煤付着	回転糸切	在地系	不明	8	
6	SK03	土器	かわらけ小皿	平形	赤褐色・黄褐・砂	轆轤水切	なし	8.9	1.8	6	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕	回転糸切	在地系	不明	7	
7	SK03	陶器	小碗	丰球形	黄灰色	轆轤	透明釉・上絵(緑)	—	—	—	素文	無文	—	—	京・信楽系	1780～1860	6	底部、高台欠損
8	SK03	手描器	小碗	丸形	白灰	轆轤	引掛・透明釉	9.6	5.4	4.2	雷紋文・梅樹文	無文	無文	高台内に文字	唐津見込	1750～1810	5	
9	SK03	土器	鉢	平底筒形	赤褐色・黄褐・砂	轆轤・横削り	なし	—	—	—	轆轤ナデ、底部に削痕	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕	平底	在地系	近世	9	
10	SK04	陶器	碗	筒形	灰褐色	轆轤	鉄釉	—	—	5.1	蓮弁まで施釉	—	施釉	削り出し高台	瀬戸・美濃系	1600～1620	11	口縁部欠損
11	SK04	陶器	碗	鱗張形	黄灰色	轆轤	鉄絵・長石釉	—	—	—	口縁部に格子・七星帯文	口縁下二重線	—	—	瀬戸・美濃系	1610～1630	10	底部、高台欠損
12	SK04	陶器	広口長瓶壺	胴部凸線	明灰色	輪積み・無調整	灰釉	—	—	—	胴部に凸帯文、灰釉	露胎	—	—	尾張系	11 c～12 c	12	二次被熱　胴部のみ残存
14	SK07	土器	かわらけ小皿	腰内折形	赤褐色	轆轤水切	なし	—	2.5～3.1	4.5	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕	回転糸切	在地系	不明	16	
15	SK07	瓶器	碗	浅半球形	白	轆轤	引掛・透明釉			—	獅子文	無文	—	—	肥前系	1700～1750	14	底部、高台欠損
16	SK07	瓶器	中碗	浅半球形	白	轆轤	引掛・透明釉				菊花文	無文	無文	高台畳付の為鉋粘	肥前系	1700～1750	13	
17	SK07	陶器	碗	筒形	灰褐色	轆轤	長石釉		5.1	4.6	蓮弁まで施釉	施釉	施釉	削り出し高台	瀬戸・美濃系	1580～1600	18	
18	SK07	陶器	瓶壺	台付たんこう形	灰褐色	轆轤・貼付	鉄釉	—	5.8	4.5	蓮弁まで施釉	施釉	芯立て欠損	回転糸切、中央に凸	瀬戸・美濃系	1750～1800	15	芯立て欠損
19	SK07	土器	鉢	口縁凸帯形	明灰色	轆轤・鉢巻・付足	なし	—	—	—	口縁下凸帯線上に雑線文、下に印花	轆轤ナデ痕	—	—	不明	不明	19	口縁部のみ残存
20	SK07	土器	鉢	足付き台形	赤褐色・黄褐・砂	轆轤・貼付	なし	—	—	—	横削り調整	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕	脚部欠損	在地系	近世	17	
21	SK07	土器	鉢	台形		轆轤	なし	—	—	—	横削り調整	轆轤ナデ	轆轤ナデ	脚部下欠損	在地系	近世		口縁部のみ残存

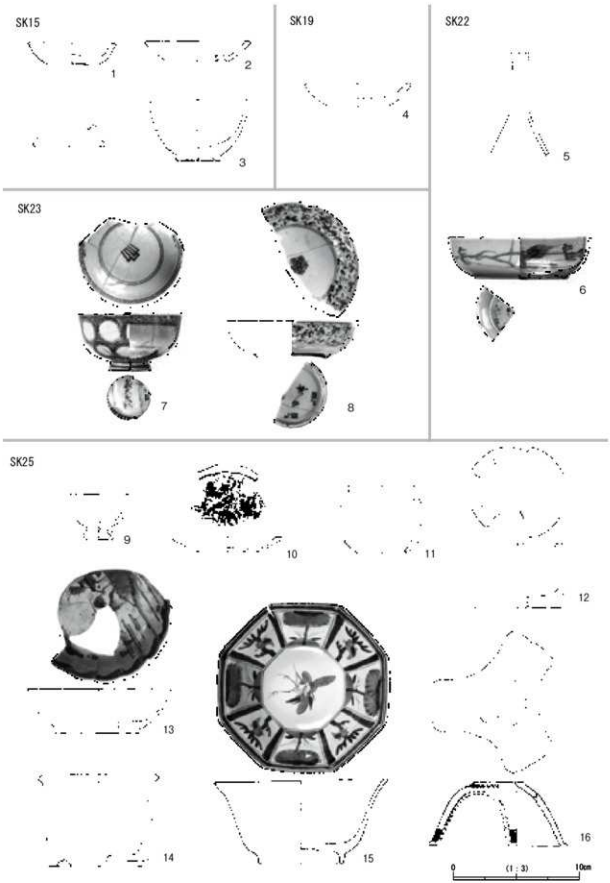
番号	遺構名	種別	種類	形状	胎土色・特徴	釉薬	縦幅(cm)	横幅(cm)	厚さ(cm)	文様	推定年代	整理No.	備考
4	SK02	瓦	軒丸瓦		灰白		8.1	—	1.7	巴文	不明		
13	SK04	石製品	硯石		灰		—	5.7	0.9		不明		



第11図　第２次面遺構出土遺物（SK02・SK03・SK04・SK07）

◎出土遺物　観察表

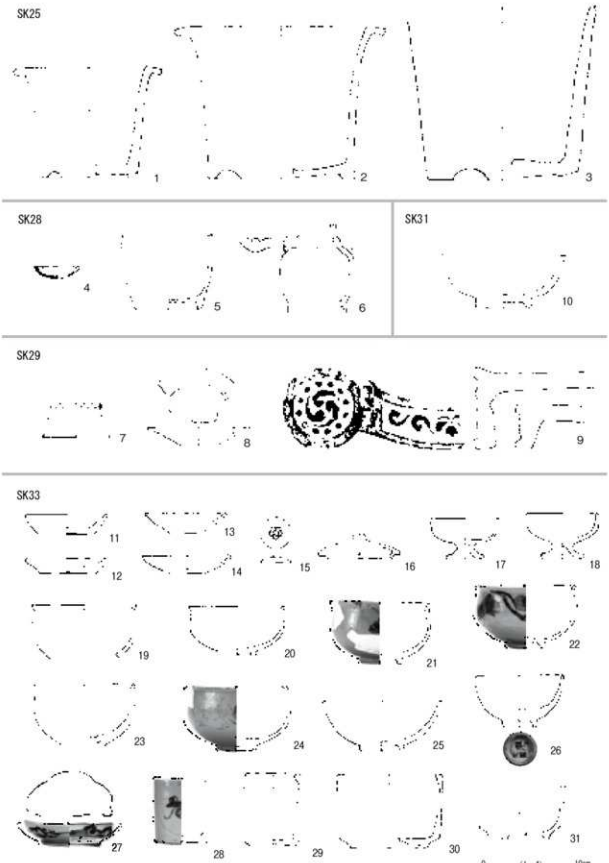
番号	遺構名	種別	器種	形状	胎土色・特徴	成形	絵付・釉薬	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面文様・特徴	内面文様・特徴	見込文様・特徴	高台文様・特徴	推定産地	推定年代	整理No.	備考
1	SK15	土器	かわらけ小皿	平底丸形	赤褐色	轆轤水切	なし	9.2	2.5	5.3	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕・煤付着	轆轤ナデ痕・煤付着	回転糸切	在地系	不明	22	
2	SK15	土器	かわらけ小皿	端反形	赤褐色	轆轤	なし	—	2.5	—	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕	—	回転糸切	在地系	近世	85	底部欠損
3	SK15	陶器	碗	丸形	灰褐色	轆轤	灰釉	—	6.3	4.6	胴中ほぼ施釉	施釉	施釉・煤付痕	削り出し二出目高台	肥前系	1580～1610	20	古切込・三次被熱？
4	SK19	土器	かわらけ小皿	平底丸形	灰褐色	轆轤水切	なし		2.6	6.3	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕・煤付着	轆轤ナデ痕・煤付着	轆轤ナデ痕	在地系	不明	23	
5	SK22	磁器	瓶	鶴首形	白	轆轤	透明釉・上絵（赤・金）	1.8	—	—	胴部に赤絵金箔菊文、金彩	口縁のみ施釉	—	—	肥前系	1780～1860	25	胴部以下欠損
6	SK22	磁器	鉢類	丸形	白	轆轤	呈色釉・透明釉	—	4.1	—	火炎文	雲龍・火炎文	圏線	蛇の目四形高台　朱文字	肥前系	1780～1860	24	焼継あり 朱文字「上人様」
7	SK23	磁器	小碗	丸形	白	轆轤	呈色釉・透明釉	11.1	6	4.6	雪輪文	四方雅文	圏線内に梅氏香文	高台畳付のみ露胎・朱文字	肥前系	1690～1780	26	焼継あり
8	SK23	磁器	鉢類	丸形	白	轆轤	呈色釉・透明釉	—	3.9	7.4	唐草文	花唐草文	コンニャク印四五弁花文	高台畳付及び一部露内に「・・・」	肥前系	1690～1780	27	
9	SK25	磁器	小碗	馬上盃形	白	轆轤	呈色釉・透明釉	—	4.9	3.2	窓絵に梅樹文・唐草文	輪草文	施釉	高台断面曲線形状	関西系	1820～1860	29	焼継あり
10	SK25	焼締	小鉢	巻口底輪花形	赤褐色	轆轤・型押し	なし	—	1.7	4.6	轆轤ナデ痕	輪花形縁	葡萄葉扇文	巻唇底形	備前系	19 c	32	大保磯通窯製品か
11	SK25	土製品	ミニチュア燈籠	燈篭火袋形	橙色	轆轤・ヘラ調整	なし	—	6.8	—	円形窓と方形窓あり	ヘラ・指押形調整	—	—	在地系	近世	35	
12	SK25	陶器	小皿	唐口形	褐色	轆轤	鉄釉・自然釉	9.8	6.7	9.2	全面に施釉・一部自然釉	施釉	施釉	回転糸切	越前系	18 c～19 c	31	
13	SK25	磁器	鉢類	輪花形	白	轆轤・型押し	呈色釉・透明釉	—	4.6	9.2	施釉	波文警告	山水文・梅文・菊花文	蛇の目四形高台	肥前系	1780～1860	28	二次被熱あり
14	SK25	陶器	植木鉢	玉縁口縁形	赤茶・白粉子	轆轤・型押し	白泥・御縁	12.7	9.7	10.3	白化粧後施釉	白化粧後、口縁のみ施釉	中央穴開き・白化粧	高台三方削り・白化粧	松代焼系	1810～1860	33	
15	SK25	磁器	鉢	八角形	白	轆轤・型押し	呈色釉・透明釉	18.5	9.3	9	窓枠雷気文	窓絵鳥文・窓絵植物文	鶴文	蛇の目四形高台	肥前系	1780～1860	36	完形品
16	SK25	土製品	不明	三脚形	赤褐色	型押し	なし	5.4	6.7	14.8	脚部周囲に円形凸文	指押し調整	円形穴周縁に円形凸文	厚底状凸縁	在地系	近世	37	



第12図　第２次面遺構出土遺物（SK15・SK19・SK22・SK23・SK25）

番号	遺構名	種別	器種	形状	胎土色・特徴	成形	紐付・輪薄	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面文様・特徴	内面文様・特徴	見込文様・特徴	高台文様・特徴	推定産地	推定年代	整理No.	備考
1	SK25	陶器	植木鉢	筒縁形	暗茶	轆轤	灰釉	15.7	11.3	10.1	底部近くまで施釉	口縁のみ施釉	露胎・中央孔開き	高台三方開り・露胎	松代焼系	1810～1860	30	
2	SK25	陶器	植木鉢	折縁口縁	暗灰色・白粒子	轆轤	鉄釉	22.3	16.5	15.2	底部近くまで施釉	口縁のみ施釉	中央穴開き	高台三方開り・露胎	松代焼系	1810～1860	34	
3	SK25	上器	植木鉢	折縁口縁	橙灰色	轆轤	なし	—	18	15.6	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕	中央穴開き	高台三方開り	在地系	近世	38	
4	SK28	磁器	紅皿	端平形	白	型押し	透明釉（白磁）	4.7	1.4	1.4	全体に蓮文・露胎	透明釉（白磁）	透明釉（白磁）	露胎	肥前系	1710～1860	41	
5	SK28	磁器	瓶	器鳴底形	白灰	轆轤	白釉・透明釉	—	—	6.9	草花文・雨滴文	露胎	露胎	高台巻付の為露胎	肥前系	1780～1860	39	胴部上半欠損
6	SK28	磁器	仏花瓶	筒口形	白灰	轆轤・貼付	青磁釉	—	—	—	胴部下に松笠状突起貼付	轆轤ナデ痕	—	—	波佐見系	1750～1860	40	胴部より上・高台内面欠損
7	SK29	陶器	徳利	筒形	灰褐色	轆轤・鋳型	灰釉	—	—	—	下部に施釉・鋳型	下部に施釉・鋳型	—	—	伊賀系？	19 c	42	下半部欠損
8	SK29	陶器	灯明受皿	油皿形	灰白色	轆轤	鉄釉	—	3.1	3.8	口縁部のみ施釉	施釉	施釉	削り・平底	瀬戸・美濃系	1750～1860	43	
10	SK31	陶器	中鉢	鐘状形	灰白色	轆轤	灰釉	—	—	5.9	高台まで施釉	施釉	施釉	高台巻付の為露胎	瀬戸・美濃系	1690～1750	44	口縁部欠損
11	SK33	上器	赤行灯小鉢	逆台形	赤褐色	轆轤・赤切	なし	—	2.6	5.8	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕	回転赤切	在地系	不明	75	
12	SK33	上器	赤行灯小鉢	平形	赤褐色・黄母・砂	轆轤・赤切	なし	8.8	1.4	6.4	轆轤ナデ痕	赤彩	赤彩	回転赤切	在地系	不明	70	
13	SK33	陶器	灯明皿	平形	灰褐色	轆轤	鉄釉	—	2.1	3.4	側中まで施釉	施釉	施釉	回転赤切	肥前系	1690～1780	56	
14	SK33	陶器	小鉢	器鳴底形	灰白色	轆轤	鉄釉	9.6	2	3.1	口縁部のみ施釉	施釉	施釉	巻鳴底削り出し	瀬戸・美濃系	1780～1860	74	
15	SK33	上器/瓦器	チューチュア茶	平形	橙色	型押し	なし	—	0.9	3.2	表面に赤彩	—	花びら状痕み	指押し痕	不明	近世	69	
16	SK33	陶器	蓋	浅丸形	灰白色	轆轤	灰釉	8.7	2.5	6.8	蓋表面に施釉	施釉	摘みあり	露胎	瀬戸・美濃系	1690～1780	64	
17	SK33	陶器	仏飯器	台付丸形	灰白色	轆轤	灰釉	—	4.4	3.9	台付近まで施釉	施釉	施釉	露胎・中央孔	瀬戸・美濃系	1700～1730	63	
18	SK33	陶器	仏飯器	台付丸形	灰灰色	轆轤	灰釉	7.4	5	4.3	台付近まで施釉	施釉	施釉	露胎・中央孔	瀬戸・美濃系	1700～1730	67	
19	SK33	陶器	中鉢	天目形	灰	轆轤	灰釉	—	—	—	施釉	施釉	—	—	瀬戸・美濃系	1780～1860	73	底部、高台欠損
20	SK33	陶器	小鉢	天目形	灰	轆轤	灰釉	—	5.2	4	糸下まで施釉	施釉	施釉	削り出し高台	瀬戸・美濃系	1780～1820	59	
21	SK33	陶器	中鉢	天目形	灰	轆轤	鉄絵・灰釉	10.5	6.4	4.7	松文・糸下まで施釉	施釉	施釉	削り出し高台	瀬戸・美濃系	1780～1820	72	
22	SK33	陶器	中鉢	天目形	灰	轆轤	鉄絵・灰釉	—	6.5	4.2	松文・糸下まで施釉	施釉	施釉	削り出し高台	瀬戸・美濃系	1780～1820	57	
23	SK33	陶器	中鉢	半球形	橙灰色	轆轤	灰釉	—	—	—	施釉	施釉	施釉	—	瀬戸・美濃系	1780～1860	60	底部、高台欠損
24	SK33	陶器	中鉢	天目形	灰	轆轤	鉄絵・灰釉	—	6.6	4.4	松文・糸下まで施釉	施釉	施釉	削り出し高台	瀬戸・美濃系	1780～1820	58	
25	SK33	陶器	中鉢	浅丸形	灰	轆轤	鉄絵・灰釉	—	5.3	4.5	松文・糸下付近まで施釉	施釉	施釉	削り出し高台	瀬戸・美濃系	1780～1820	61	鄭茶碗
26	SK33	手描器	小鉢	丸形	灰白色	轆轤	白釉・透明釉	9.3	5.4	3.3	雪輪文・梅樹文	施釉	施釉	高台内に文字	波佐見系	1750～1810	48	
27	SK33	磁器	小鉢	輪花形	白	轆轤・型押し	白釉・透明釉	—	2.3	—	四季文	松文・岩文	五弁花文？	高台内部に圏線	肥前系	1690～1780	50	
28	SK33	磁器	灰皿	筒形	白	轆轤	白釉・透明釉	6	6.9	5.8	笹文・竜文	口縁のみ施釉	露胎	露胎	肥前系	1780～1860	52	
29	SK33	磁器	灰皿	筒形	灰白色	轆轤	青磁釉	5.9	7.6	4.7	底部近くまで施釉	口縁のみ施釉	露胎	露胎	肥前系	1780～1860	71	
30	SK33	陶器	火入	筒形	白灰	轆轤	青磁釉	10.9	7.8	8.3	全面に施釉	口縁のみ施釉	露胎	蛇の目凹形高台	肥前系	1780～1860	53	
31	SK33	陶器	香炉	筒形・一定	灰	轆轤・貼付	鉄釉・瓦石釉	—	6.1	—	鉄釉底に瓦石釉貼らし	施釉	露胎	底面に足貼付	瀬戸・美濃系	1690～1780	65	

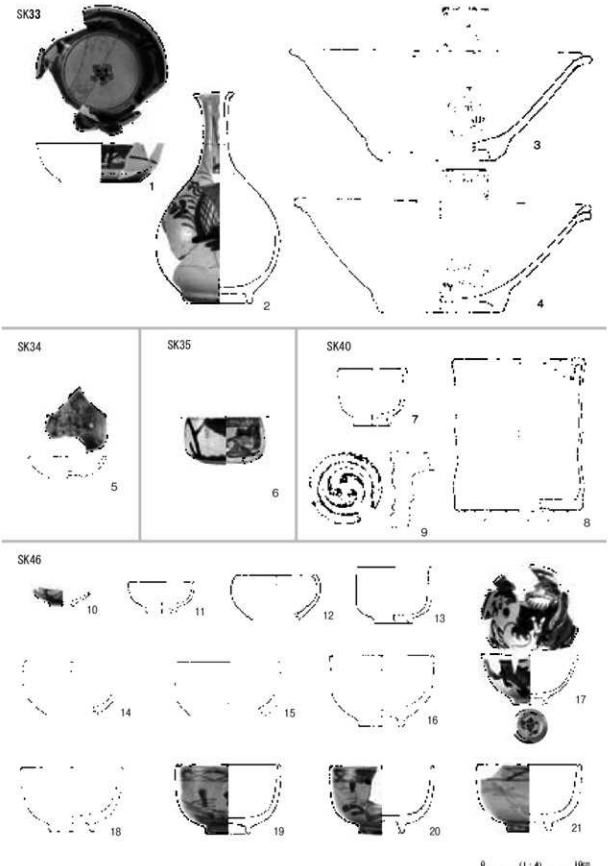
番号	遺構名	種別	種類	形状	胎土色・特徴	釉薬	厚径(cm)	厚径(cm)	厚さ(cm)	文様	推定年代	整理No.	備考
9	SK29	瓦	軒丸瓦		灰白		8.5	—	1.8	丸部：巴文、平部：均整唐草文	不明		



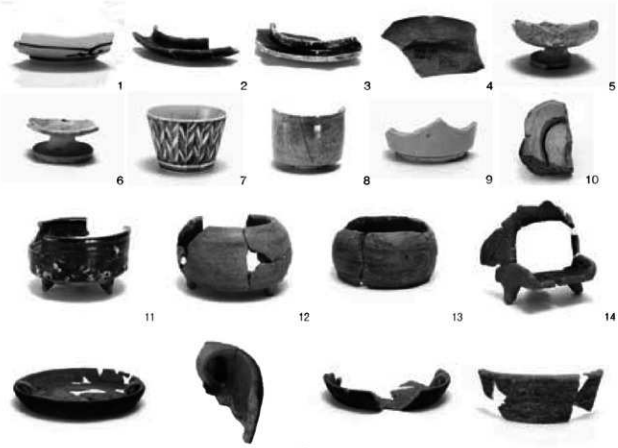
第13図　第２次面遺構出土遺物（SK25・SK28・SK29・SK31・SK33）

番号	遺構名	類別	器種	形状	胎土色・特徴	成形	施釉・釉薬	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面文様・特徴	内面文様・特徴	見込文様・特徴	高台・特徴	推定産地	推定年代	整理No.	備考
1	SK33	瓷器	鉢類	丸形	灰褐色	轆轤	石灰・透明釉	13.8	4.0	8.5	唐草文	草樹文	雁縄内に五弁花文	低の目圏形高台	肥前系	1780～1860	49	
2	SK33	瓷器	小瓶	瓶首形	白	轆轤	石灰・透明釉	21.9	4.2	7.3	花籠文	口線のみ施釉	露胎	高台畳付のみ露胎、砂付痕	肥前系	1690～1780	51	
3	SK33	陶器	摺鉢	高台付片口	灰	叩き整形ナデ	鉄釉	32.8	11.4	12.5	高台付近まで施釉	放射状摺り目	放射状摺り目・円形に砂付痕	全体に砂付着	肥前系	1750～1860	54	
4	SK33	陶器	摺鉢	高台付片口	赤褐色	叩き整形ナデ	鉄釉	31.6	11.7	13.3	全面に施釉	放射状摺り目	放射状摺り目・円形に重ね焼跡	高台畳付のみ露胎	肥前系	1750～1860	55	
5	SK34	瓷器	碗	半球形	白	轆轤	石灰・透明釉	—	—	—	樹木文・草文	四方襷文	二重圏線	—	肥前系	1780～1860	76	底部、高台欠損
6	SK35	瓷器	小皿	端切四方皿	白(ガラス質)	型押し	透明釉（白濁）	—	2.3	3.8	施釉	流陽刻文	花瓶刻文	高台畳付のみ露胎	瀬戸・美濃系	1870～1960	77	
7	SK40	瓷器	小碗	筒丸形	白	轆轤	石灰・透明釉	—	6.1	3.8	蝙蝠文	施釉	施釉	高台畳付のみ露胎	瀬戸・美濃系	1840～1870	86	
8	SK40	軟質陶器	壺か	竹筒形	橙灰色	轆轤・ヘラ削り	緑釉	14.1	17.1	—	全面に施釉、一部剥化	五態状突起	一部施釉	露胎・足付	京焼系	18ｃ後半～19ｃ	87	所蔵道の壺か
11	SK46	陶器	小碗	浅半球形	白	轆轤	石灰・透明釉	—	—	2.5	菊花文・水鉄文	施釉	施釉	高台畳付のみ露胎	肥前系	1690～1780	101	口縁部欠損
11	SK46	陶器	小碗	丸形	灰白色	轆轤	灰釉	6.9	3.2	3.1	高台付付近まで施釉	施釉	施釉	削り出し高台	瀬戸・美濃系	1680～1780	110	
12	SK46	陶器	壺蓋	台付たんころ形	赤褐色	轆轤	鉄釉	8.0～8.8	—	—	施釉	施釉	—	—	肥前系	1780～1860	107	底部、高台欠損
13	SK46	陶器	小碗	腰張形	灰褐色	轆轤・ロクロ目	鉄釉（濃・淡）	7.7	6.1	4.0	口縁部のみ施釉・十弦に横線文、薄く施釉	施釉	施釉	高台畳付のみ露胎	瀬戸・美濃系	1780～1840	109	蓋茶碗
14	SK46	瓷器	小皿	輪花形	白	轆轤・型押し	石灰・透明釉	—	2.3	—	唐草文	花唐草文	雁縄	高台畳付のみ露胎	肥前系	1690～1780	102	
14	SK46	陶器	小碗	丸形	橙灰色	轆轤	白釉	—	—	—	施釉	施釉	—	—	萩焼系	18ｃ～19ｃ	119	
15	SK46	陶器	小碗	端反形	黄灰色	轆轤	灰釉	—	—	—	施釉	施釉	—	—	瀬戸・美濃系	1780～1860	117	
16	SK46	陶器	小碗	端反形	黄灰色	轆轤	鉄絵・灰釉	11.0	7.5	4.7	鉄絵・高台周辺まで施釉	施釉	施釉	高台畳付・高台内露胎	瀬戸・美濃系	1780～1860	118	
17	SK46	瓷器	小碗	丸形	白	轆轤	石灰・透明釉	10.3	5.4	3.8	雲龍文	雲龍文・火焔文	雲龍柳	高台内部に渦文	肥前系	1760～1780	99	
18	SK46	手瓷器	小碗	腰張形	灰	轆轤	鉄絵・透明釉	—	6.8	4.7	樹木文	施釉	施釉	高台畳付のみ露胎、砂付痕	波佐見・平戸系	1680～1810	103	
19	SK46	手瓷器	小碗	腰張形	灰	轆轤	石灰・透明釉	—	7.1	4.5	四方襷文・樹木文	施釉	施釉	高台畳付のみ露胎、砂付痕	波佐見・平戸系	1680～1810	104	
20	SK46	手瓷器	小碗	腰張形	灰	轆轤	石灰・透明釉	—	7.1	4.7	四方襷文・樹木文	施釉	施釉	高台畳付のみ露胎、砂付痕	波佐見・平戸系	1680～1810	105	
21	SK46	手瓷器	小碗	腰張形	灰	轆轤	石灰・透明釉	—	7.1	4.5	四方襷文・樹木文	施釉	施釉	高台畳付のみ露胎、砂付痕	波佐見・平戸系	1680～1810	106	

番号	遺構名	類別	種類	形状	胎土色・特徴	釉薬	最幅(cm)	横幅(cm)	厚さ(cm)	文様	推定年代	整理No.	備考
9	SK40	瓦	軒桟瓦		灰		8.2	—	2.2	巴文	不明		



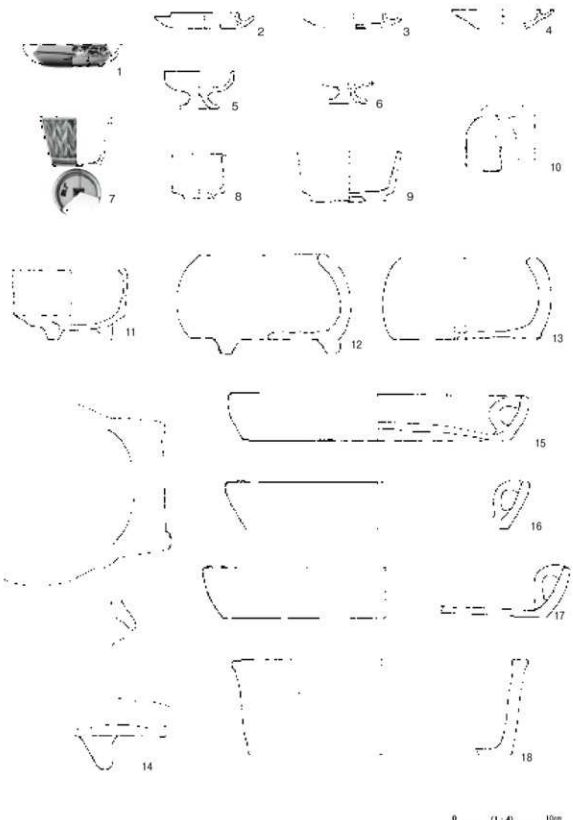
第14図　第２次面遺構出土遺物（SK33・SK34・SK35・SK40・SK46）



番号	遺構名	種別	器種	形状	胎土色・特徴	成形	釉付・釉薬	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面文様・特徴	内面文様・特徴	見込文様・特徴	高台文様・特徴	推定産地	推定年代	整理No.	備考
1	SK46	瓷器	小皿	輪花形	白	轆轤・型押し	信楽・透明釉	—	2.3	—	唐草文	花卉草文	圏線	高台骨付のみ露胎	肥前系	1690～1780	102	
2	SK46	陶器	灯明受皿	油溜形	灰褐色	轆轤	鉄釉	—	1.6	—	底部近くまで施釉	施釉	施釉	露胎	瀬戸・美濃系	1750～1800	115	
3	SK46	陶器	灯明受皿	油溜形	灰白色	轆轤	鉄釉	—	1.6	—	縁ぎまで施釉	施釉	施釉	露胎	瀬戸・美濃系	1750～1800	116	
4	SK46	焼締	灯明受皿	—	赤褐色	轆轤	なし	—	—	—	轆轤ナデ痕	灯明皿受け法あり	—	—	肥前系	1780～1860	108	底部欠損
5	SK46	陶器	仏飯器	台付丸形	黄灰色	轆轤	灰釉	—	4.1	4.1	台付近まで施釉	施釉	施釉	露胎・中央孔	瀬戸・美濃系	1700～1730	113	
6	SK46	陶器	仏飯器	台付丸形	黄灰色	轆轤	灰釉	—	—	3.9	台付近まで施釉	—	施釉	露胎・中央孔	瀬戸・美濃系	1700～1730	114	口縁部欠損
7	SK46	瓷器	徳口	筒形	白	轆轤	信楽・透明釉	7.5	5.4	4.9	矢羽文	施釉	施釉	圏線内に角瓶	肥前系	17世紀～1780	100	
8	SK46	陶器	香炉	筒形	灰白色	轆轤	灰釉	5.8	4.6	3.3	縁ぎまで施釉	口縁のみ施釉	露胎	露胎・削り出し高台	瀬戸・美濃系	1680～1780	112	
9	SK46	瓷器	火入	筒形	灰白色	轆轤	青磁釉	—	—	8.1	高台まで施釉	露胎	露胎	蛇の目凹形高台・全面露胎	肥前系	1780～1860	98	口縁部欠損
11	SK46	陶器	香炉	筒形・三足	灰褐色	轆轤・貼付	鉄釉・長石釉	12.1	7.2	8.4	鉄釉地に長石釉散らし	口縁のみ施釉	露胎・煤付着	底面に足貼付け	瀬戸・美濃系	1690～1730	111	
12	SK46	土器	植木鉢	三足丸形	赤褐色	轆轤・摺き・貼付	なし	13.0	10.7	15.1	上部と下部横摺き	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ・中央孔開き	平底に足貼付け	在地系	近世	120	
13	SK46	土器	植木鉢	三足丸形	赤褐色	轆轤・摺き・貼付	なし	14.5	—	15.6	上部と下部横摺き	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ・中央孔開き	平底に足貼付け	在地系	近世	121	足部欠損、摺り切り？
14	SK46	土器	燭台？	足付き台口形	赤褐色・釉石・砂	板起こ・貼付け	なし	—	—	—	施ぎ跡・口上部に煤付着	全体に煤付着	—	平底に足貼付け	不明	近世	122	開口部のみ残存・焼塩用か
15	SK46	土器	焙烙	内耳形	赤褐色	輪積み・貼付け	煤付・煤付着	なし	32.7	4.7	29.2	輪積ナデ痕・煤付着	二ヶ所耳貼付	—	平底・煤付着	不明	近世	127	完形品
16	SK46	土器	焙烙	内耳形	赤褐色	輪積み・貼付け	煤付・煤付着	なし	—	5.2	—	輪積ナデ痕・煤付着	耳貼付	—	平底・煤付	不明	近世	126
17	SK46	土器	焙烙	内耳形	赤褐色	輪積み・貼付け	煤付・煤付着	なし	33.1	5.7	28.0	輪積ナデ痕・煤付着	二ヶ所耳貼付	—	平底・煤付着	不明	近世	125
18	SK46	土器	鉢	壁形	赤褐色・釉石・砂	轆轤・摺き	なし	—	10.0	—	横削り調整	轆轤ナデ痕	—	平底	不明	不明	124	

番号	遺構名	種別	種類	形状	胎土色・特徴	釉薬	厚(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	文様	推定年代	整理No.	備考
10	SK46	瓦	鬼ノ瓦		橙褐色		—	—	1.8	不明	不明		

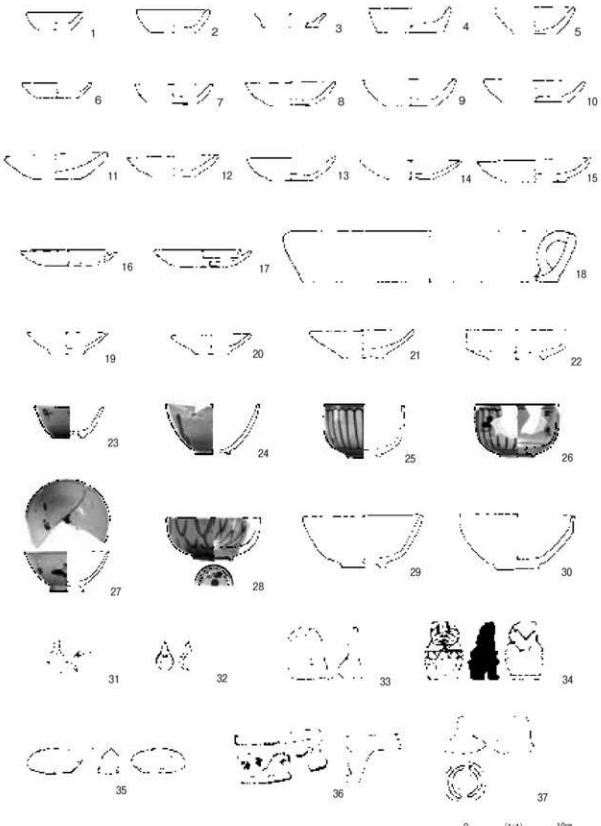
SK46



第15図　第２次面遺構出土遺物（SK46）

番号	遺構名	種別	器種	形状	胎土色・特徴	成形	絵付・釉薬	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面文様・特徴	内面文様・特徴	見込文様・特徴	高台文様・特徴	修復箇所	推定年代	整理No.	備考
1	検2	土器	おかわり寸小皿	丸形	赤褐色(7.5YR)	轆轤ナデ	なし	—	1.9	3.8	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕	円形沈線	回転糸切	在地系	不明	267	
2	検2	土器	おかわり寸小皿	丸形	灰白色(5Y7/1)	轆轤ナデ	なし	—	2.3	4.6	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕	回転糸切	在地系	不明	254	
3	検2	土器	おかわり寸小皿	端反形	灰褐色(5YR5/2)	轆轤ナデ	なし	—	1.5	—	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕	—	回転糸切	在地系	不明	225	
4	検2	土器	おかわり寸小皿	蛸形	褐灰色(10YR5/1)	轆轤ナデ	なし	—	2.6	—	轆轤ナデ痕・一部煤付着	轆轤ナデ痕・一部煤付着	轆轤ナデ痕	回転糸切・粗土師焼成	在地系	不明	253	
5	検2	土器	おかわり寸小皿	深鉢形	赤褐色(7.5YR)	轆轤ナデ	なし	8.3	2.9	4.3	轆轤ナデ痕・一部煤付着	轆轤ナデ痕・大半に煤付着	轆轤ナデ痕	回転糸切	在地系	不明	232	
6	検2	土器	おかわり寸小皿	鍋形	褐灰色(10YR5/1)	轆轤ナデ	なし	—	1.5	4.5	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕	回転糸切	在地系	不明	234	
7	検2	土器	おかわり寸小皿	丸形	暗赤褐色(5YR3/2)	轆轤ナデ	なし	7.9	2.1	4.6	轆轤ナデ痕・一部煤付着	轆轤ナデ痕・大半に煤付着	轆轤ナデ痕	回転糸切・煤付着	在地系	不明	231	
8	検2	土器	おかわり寸小皿	鍋形	赤褐色(5YR4/6)	轆轤ナデ	なし	9.4	2.5	4.7	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕	回転糸切	在地系	不明	229	一部黒色化成
9	検2	土器	おかわり寸小皿	深鉢形	暗灰色(N3/)	轆轤ナデ	なし	9.7	2.7	5.4	轆轤ナデ痕・一部煤付着	轆轤ナデ痕・一部煤付着	轆轤ナデ痕・一部煤付着	回転糸切・煤付着	在地系	不明	251	
10	検2	土器	おかわり寸小皿	丸形	暗赤褐色(5YR3/2)	轆轤ナデ	なし	10.6	2.6	7.2	轆轤ナデ痕・一部煤付着	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕	回転糸切・煤付着	在地系	不明	268	
11	検2	土器	おかわり寸小皿	鍋形・深手	赤褐色(5YR4/6)	轆轤ナデ	なし	11.1	2.7	4.7	轆轤ナデ痕・一部煤付着	轆轤ナデ痕・一部煤付着	轆轤ナデ痕	回転糸切・煤付着	在地系	不明	224	
12	検2	土器	おかわり寸小皿	鍋形	褐灰色(10YR5/1)	轆轤ナデ	なし	9.3	2.3	4.5	轆轤ナデ痕・一部煤付着	轆轤ナデ痕・一部煤付着	轆轤ナデ痕・一部煤付着	回転糸切・煤付着	在地系	不明	252	
13	検2	土器	おかわり寸小皿	深鉢形	灰褐色(5YR5/2)	轆轤ナデ	なし	9.3	2.5	4.5	轆轤ナデ痕・煤付着	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕	回転糸切・煤付着	在地系	不明	233	表面油膜化・煤付着
14	検2	土器	おかわり寸小皿	平形	赤褐色(5YR4/6)	轆轤ナデ	なし	—	2	4.8	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕	回転糸切	在地系	不明	236	
15	検2	土器	おかわり寸小皿	鍋形	褐灰色(10YR5/1)	轆轤ナデ	なし	12	2.4	6.7	轆轤ナデ痕・一部煤付着	轆轤ナデ痕・大半に煤付着	轆轤ナデ痕	回転糸切・煤付着	在地系	不明	230	表面一部油膜化・煤付着
16	検2	陶器	石明空瓶	油徳形	灰白色(N7/)	轆轤	鉄釉	10.3	1.8	—	口縁に施釉	施釉	施釉	露胎・平底	瀬戸・美濃系	1750～1800	246	
17	検2	陶器	石明空瓶	油徳形	灰	轆轤	鉄釉	—	1.7	5.1	口縁に施釉	施釉	施釉	露胎・平底	瀬戸・美濃系	1750～1800	263	
18	検2	土器	焙烙	内耳形	赤褐色(5YR4/6)・褐灰(10YR5/1)	轆轤・紐作り	なし	—	5.3	—	金属巾・煤付着	接ぎ手調整・煤付着付	—	—	在地系	不明	273	
19	検2	陶器	小皿	平底形	灰褐色(5YR5/2)	轆轤・紐作り	鉄釉	—	2.5	3.7	口縁に施釉	施釉	施釉	回転糸切	在地系	不明	240	
20	検2	陶器	小皿	平形	橙灰色(5YR6/4)	轆轤	土灰釉	11	3.2	4.1	口縁に施釉	施釉	施釉・石高あり	三日月痕・市高台	肥前系	1580～1610	258	古唐津類
21	検2	陶器	小皿	平底形	灰褐色(5YR5/2)	轆轤	鉄釉	8.4	2.1	3.7	口縁に施釉	口縁のみ施釉	施釉	回転糸切	在地系	不明	265	
22	検2	陶器	小皿	馬蹄型	灰褐色(5YR5/2)	轆轤	鉄釉	—	3.1	5.8	底部近くまで施釉	施釉	中央露胎	露胎・器筒底	在地系	不明	249	
23	検2	磁器	小碗	端反形	白(5Y8/1)	轆轤	灰白(7.5Y8/1)・青磁釉・鉄	7.3	3.4	3.5	唐草文・菊花文・雷文・草文・青磁釉	透明釉	透明釉	蛇の目凸形・高台内施釉	瀬戸・美濃系	1690～1810	248	胎土細れ
24	検2	陶器	小碗	桔形	黄灰色(2.5Y6/1)	轆轤	鉄絵・透明釉	—	5.4	3.8	若松文	施釉	施釉	高台畳付・高台内施釉	京・信楽系	1700～1770	264	
25	検2	陶器	小碗	半球形	白	轆轤	白磁・透明釉	—	5.3	3.7	櫛に雷文	二重圏	一重圏線内に高台畳付	高台畳付・高台施釉	肥前系	1780～1820	242	
26	検2	陶器	小碗	半球形	白	轆轤	白磁・透明釉	—	5.5	—	櫛に雷文	二重圏	二重圏線	高台畳付・高台施釉	肥前系	1780～1820	238	
27	検2	陶器	小碗	丸形	白	轆轤	白磁・透明釉	8.9	4.2	3.6	蛇文・蛇腹帯文・十五文	施釉	虫文	高台畳付・高台施釉	肥前系	1780～1820	241	釉薬あり
28	検2	陶器	碗	浅手球形	灰白色(5Y7/1)	轆轤	白磁・透明釉	—	4.8	3.9	二重網目文	網目文	網目文・二重圏線内に花文	高台内部に粘土	肥前系	1710～1750	260	
29	検2	陶器	中碗	腰張形	褐灰色(10YR5/1)	轆轤	土灰釉	—	5.8	4.7	高台畳付近まで施釉	施釉	施釉	蛇の目凸形・畳付施釉	肥前系	1580～1610	239	印南系か唐津？
30	検2	陶器	中碗	天目形	白(5Y8/1)	轆轤	鉄釉	11.9	5.9	4.5	胴下まで施釉	施釉	施釉	蛇の目凸形・畳付施釉	瀬戸・美濃系	1650～1690	227	
31	検2	土製品	土鈴？	—	橙灰色(5YR6/4)	型押し・貼付け	なし	—	—	—	三重巡拝・孔あり	蓋貼付け痕跡	—	—	—	不明	256	
32	検2	土製品	土鈴？	—	橙灰色(5YR6/4)	型押し・貼付け	なし	—	—	—	三重巡拝・孔あり	蓋貼付け痕跡	—	—	—	不明	257	
33	検2	土製品	人入れ	唐傘形	橙灰色(5YR6/4)	型押し・貼付け	なし	—	—	—	唐傘開入・胴部欠損	指押し調整	—	—	中央に孔	不明	255	胴部欠損
34	検2	土製品	唐傘傘部	唐傘形	橙灰色(5YR6/4)	型押し	なし	—	—	3.2	十二本の骨・表皮	表皮・光沢	—	—	中央に孔	不明	255	胴部欠損
35	検2	金属製品	形状不明	鐘形	灰褐色(5YR5/2)	鋳造	青銅釉・緑銹釉	—	2.5	—	十二に文	—	—	—	在地系	不明	266	錆欠損
37	検2	土器	鉢・壺類	円形	赤褐色(5YR4/6)・褐灰(10YR5/1)	轆轤	なし	—	—	—	円形内に花・沈線	荒縄圧痕跡	—	—	在地系	鎌倉時代中期	237	胴部文系

番号	遺構名	種別	形状	胎土色・特徴	釉薬	最大幅(cm)	最大厚(cm)	厚さ(cm)	文様	推定年代	整理No.	備考
36	検2	瓦	軒瓦丸	瓦		4.9	—	1.8	均整唐草文（中央花文）	不明	269	



第16図　第２次面遺構外　出土遺物

○第3次遺構検出面

遺構の概要

主な遺構概要　３次面では、古墳時代から江戸時代前期までの幅広い時期の遺構が確認された。主な遺構は、古墳時代の竪穴住居跡、中世の溝跡、近世の土坑などである。土坑は、江戸期前期に比定される遺構が主となり、一部に中世末と考えられる土坑も存在する。土坑内には掘立柱の据え石（礎石）と想定されるものや、多量の炭化物が混入するものを確認している。

古墳時代の遺構　古墳時代の遺構としては、竪穴住居跡が２棟検出された。１号竪穴住居跡（SB01）は北西方向に主軸をとる長方形の住居跡であり、東半部は調査区外にかかる。床面は黄褐色粘土を貼り床とし、北壁にカマドを有する。出土遺物より古墳時代後期の所産と想定される。２号竪穴住居跡（SB02）は、１辺が3.6m内外の方形住居跡と思われるが、西半部が近代の撹乱によって改変されており、平面形は判然としない。北壁際に高坏坏部２個体が完形で出土しており、古墳前期に属すると考えられる。

中世の遺構　調査区南西部に東西に延びる溝跡を確認した。溝跡南部は調査区外にかかっており、幅は不明である。近世以降の改変によって形状は判然としないが、南宋から明時代の輸入磁器が出土しており、中世後期の遺構と判断される。また、SK38など中世末の遺物を一定量包含する土坑もあるが、江戸時代初期の陶磁器も出土しており、明確な中世土坑は看取されない。

近世の遺構　３次面では、18基の土坑（２次面から続く土坑を除く）を確認した。検出された土坑は、出土遺物より江戸時代初期から前期に属する遺構と考えられる。SK43・SK47では、土坑内に多量の五輪塔が埋没しており、廃棄・転用されたものと思われる。

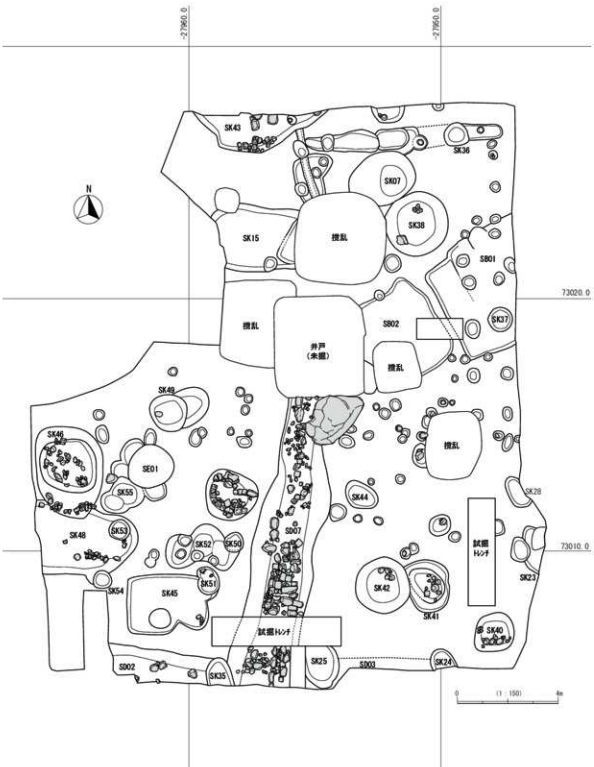
出土遺物の概要

古墳時代の遺物（SB01,02）　１号竪穴住居跡（SB01）からは土師器甕破片１点が出土。古墳時代後期の製品とみられる。２号竪穴住居跡（SB02）からは土師器甕破片１点と脚部が欠損した土師器高坏２点が出土。古墳時代前期に比定される。

中世溝跡（SD02）　竜泉窯系青磁破片が２点と、かわらけ２点が出土している。竜泉窯系青磁破片のうち１点は蓮弁文碗の底部で、畳付が露胎であることから南宋から元時代にかけての製品（図18－６）と思われる。もう１点は鉢の底部で、高台畳付にも施釉され、高台内が釉剥ぎされた明時代の製品（図18－７）である。

中世～近世の土坑・溝跡（SK36～39,41～45,47～56,SD07）　SK38からは瀬戸・美濃系陶器碗３点、肥前系陶器３点と古墳時代土師器１点が出土している。瀬戸・美濃系陶器碗は鉄釉の丸形碗（図19－５）と天目形碗（図19－２）、長石釉の筒形碗（図19－４）で、後者は志野茶碗に多く見られる歪みや歪みが殆ど見られない。初期の瀬戸黒茶碗に見られるような均整な形状をしていることから、桃山期の大窯後期に属する製品と推定される。肥前系陶器は大橋編年Ⅱ期（1600～1650年代）に比定される砂目積灰釉小皿（図19－１）と大橋編年Ⅲ期（1650～1690年代）に比定される呉器形灰釉碗、呉須絵京焼風陶器碗の３点である。SK39・SK41からは、それぞれかわらけが１点ずつ出土している。SK43からは、かわらけ５点が出土している。内４点が口縁部を欠損している。煤付着などはいずれも見られない。SK44からは瀬戸・美濃系鉄釉丸形小碗１点の出土である。瀬戸窯連房式登窯第１段階（1610～17世紀後葉）の製品と見られる。SK45からは肥前系陶器２点が出土しており、大橋編年Ⅰ期（1580～1610年代）に比定される灰釉小皿と大橋編年Ⅱ～Ⅲ期（1650～1780年代）に比定される鉄描皿破片が確認される。他１点かわらけを含む。SK47からは、かわらけ５点が出土した。近世の製品とみられる。SK49からは、かわらけ２点が出土しており、１点は口縁部などに煤が付着していることから、灯明皿と考えられる。

SK55からは口縁直径が約８㎝の小型のかわらけが出土している。SD07からは土器鍋破片２点とかわらけ３点が出土している。



第17図　第３次面遺構検出面　調査平面図

第３次遺構検出面（北東より）

第３次遺構検出面南半（西より）

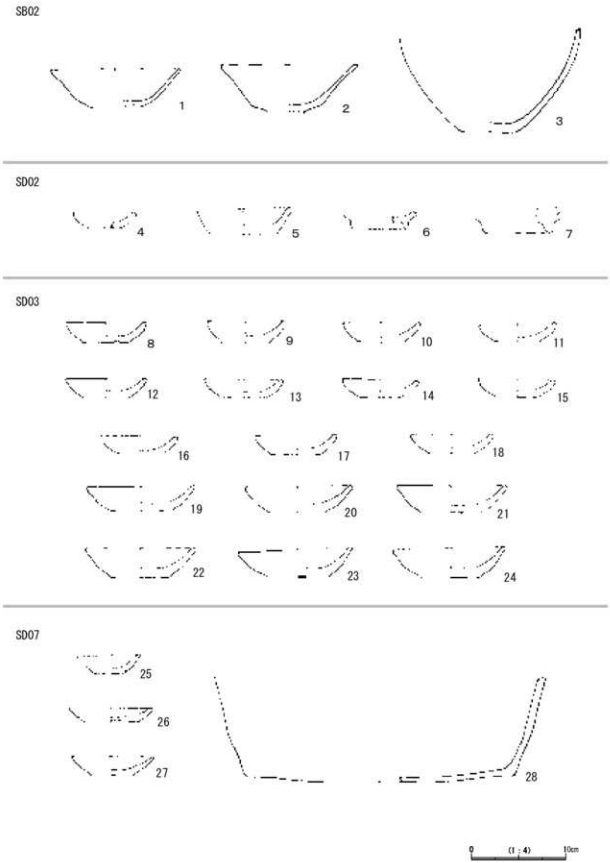
古墳時代の竪穴住居跡
（SB01）

溝跡
(SD07)

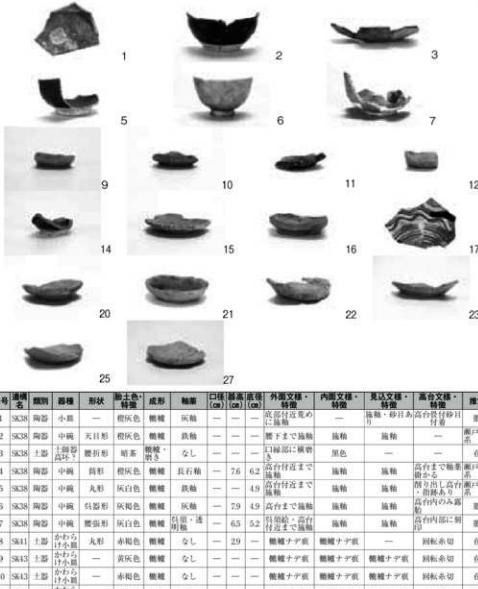
SK41・SK42

SK46

番号	遺構名	類別	器種	形状	胎土色・特徴	成形	釉薬	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面文様・特徴	内面文様・特徴	見込文様・特徴	高台文様・特徴	推定産地	推定年代	整理No.	備考
1	SB2	土器	土師器 高坏	腰折形	赤褐色・極細砂	輪積み・削り	なし	13.8	—	—	横・縦削り調整、撫付痕	横削り調整、撫付痕	磨き調整	—	在地系	6c～7c	210	脚部欠損
2	SB2	土師器	土師器 高坏	腰折端反形	灰褐色・極細砂	輪積み・削り	なし	—	—	—	縦・横磨き・一部黒色焼成	横磨き・黒色焼成	放射状磨き	—	在地系	6c～7c	211	脚部欠損
3	SB2	土器	土師器 鉢	—	灰褐色・極細砂	輪積み・削り	なし	—	—	6.1	斜め削り	縦磨き	削り調整	削り調整・平底	在地系	6c～7c	209	胴部上半欠損
4	SB2	土器	かわらけ小皿	丸形	赤褐色	糸切	なし	—	1.7	—	糸切ナデ痕	糸切ナデ痕	—	回転糸切	在地系	中世？	188	
5	SB2	土器	かわらけ小皿	逆台形底面幅広	橙灰色	糸切	無釉	9.9	2.7	7.1	糸切ナデ痕	糸切ナデ痕	指ナデ跡、煤付着	回転糸切・煤付着	在地系	不明	190	
6	SB2	瓶器	瓶	—	灰	糸切	青磁釉	—	—	—	高台まで施釉	—	施釉	高台張付のみ露船	中国浙江省竜泉窯系	12c～13c	187	南宋時代竜泉窯系輸出
7	SB2	瓶器	鉢？	—	灰	糸切	青磁釉	—	—	—	高台まで施釉	—	施釉	高台内部に露船	中国浙江省竜泉窯系	15c～16c	189	明初代竜泉窯系輸出
8	SB3	土器	かわらけ小皿	丸形	橙灰色	無糸切	なし	8.5	2.1	5.1	糸切ナデ痕	糸切ナデ痕	無糸切ナデ痕	回転糸切	在地系	15c末～16c	191	
9	SB3	土器	かわらけ小皿	丸形	橙灰色	無糸切	なし	—	2	4.9	糸切ナデ痕	糸切ナデ痕	無糸切ナデ痕	回転糸切	在地系	15c末～16c	194	全体に炭状付着物
10	SB3	土器	かわらけ小皿	丸形	橙灰色	無糸切	なし	8.1	2.1	5.2	糸切ナデ痕	糸切ナデ痕	無糸切ナデ痕	回転糸切	在地系	15c末～16c	200	全体に炭状付着物
11	SB3	土器	かわらけ小皿	丸形	橙灰色	無糸切	なし	8	2.1	4.6	糸切ナデ痕	糸切ナデ痕	無糸切ナデ痕	回転糸切	在地系	15c末～16c	192	
12	SB3	土器	かわらけ小皿	丸形	橙灰色	無糸切	なし	8.1	2	4.8	糸切ナデ痕	糸切ナデ痕	無糸切ナデ痕	回転糸切	在地系	15c末～16c	193	全体に炭状付着物
13	SB3	土器	かわらけ小皿	丸形	橙灰色	無糸切	なし	8.4	2.2	5	糸切ナデ痕	糸切ナデ痕	無糸切ナデ痕	回転糸切	在地系	15c末～16c	198	全体に炭状付着物
14	SB3	土器	かわらけ小皿	丸形	橙灰色	無糸切	なし	8.1	1.9	4.3	糸切ナデ痕	糸切ナデ痕	無糸切ナデ痕	回転糸切	在地系	15c末～16c	201	一部に炭状付着物
15	SB3	土器	かわらけ小皿	丸形	橙灰色	無糸切	なし	8.2	2.1	4.7	糸切ナデ痕	糸切ナデ痕	無糸切ナデ痕	回転糸切	在地系	15c末～16c	199	全体に炭状付着物
16	SB3	土器	かわらけ小皿	丸形	橙灰色	無糸切	なし	8.3	2.1	4.9	糸切ナデ痕	糸切ナデ痕	無糸切ナデ痕	回転糸切	在地系	15c末～16c	202	全体に炭状付着物
17	SB3	土器	かわらけ小皿	丸形	橙灰色	無糸切	なし	8.5	2	5.5	糸切ナデ	糸切ナデ痕	無糸切ナデ痕	回転糸切	在地系	15c末～16c	203	全体に炭状付着物
18	SB3	土器	かわらけ小皿	丸形	橙灰色	無糸切	なし	8.6	2.1	4.9	糸切ナデ痕	糸切ナデ痕	無糸切ナデ痕	回転糸切	在地系	15c末～16c	204	一部に炭状付着物
19	SB3	土器	かわらけ小皿	丸形	橙灰色	無糸切	なし	11.3	2.6	5.9	糸切ナデ	糸切ナデ痕	無糸切ナデ痕	回転糸切	在地系	15c末～16c	205	全体に炭状付着物
20	SB3	土器	かわらけ小皿	丸形	橙灰色	無糸切	なし	11.3	2.8	5.8	糸切ナデ痕	糸切ナデ痕	無糸切ナデ痕	回転糸切	在地系	15c末～16c	196	一部に炭状付着物
21	SB3	土器	かわらけ小皿	丸形	橙灰色	無糸切	なし	11.6	2.9	5.9	糸切ナデ	糸切ナデ痕	無糸切ナデ痕	回転糸切	在地系	15c末～16c	206	全体に炭状付着物
22	SB3	土器	かわらけ小皿	丸形	橙灰色	無糸切	なし	11.2	3.1	6	糸切ナデ痕	糸切ナデ痕	無糸切ナデ痕	回転糸切	在地系	15c末～16c	195	全体に炭状付着物
23	SB3	土器	かわらけ小皿	丸形	橙灰色	無糸切	なし	12	3.1	6.3	糸切ナデ	糸切ナデ痕	無糸切ナデ痕	回転糸切	在地系	15c末～16c	207	一部に炭状付着物
24	SB3	土器	かわらけ小皿	丸形	橙灰色	無糸切	なし	12.3	3.1	6.4	糸切ナデ痕	糸切ナデ痕	無糸切ナデ痕	回転糸切	在地系	15c末～16c	197	全体に炭状付着物
25	SD07	土器	かわらけ小皿	逆台形	赤褐色	無糸切	なし	6.6	1.9	3.3	口縁部に横撫ナデ痕	糸切ナデ痕	—	—	在地系	不明	184	全体に炭面溶落
26	SD07	土器	かわらけ小皿	平形	灰褐色・雲母	無糸切	なし	—	1.5	—	糸切ナデ痕	糸切ナデ痕	指ナデ跡	回転糸切	在地系	不明	185	
27	SD07	土器	かわらけ小皿	丸形	赤褐色	無糸切	なし	8.7	2.2	4.8	糸切ナデ痕・煤付着	無糸切ナデ痕・大半に煤付着	無糸切ナデ痕	回転糸切・煤付着	在地系	不明	186	
28	SD07	土器	鍋	平底筒形	赤褐色・極細砂	輪積み・ナデ	なし	—	—	—	横ナデ調整・全面に煤付着	横ナデ調整	煤付着	板底	在地系	不明	182	

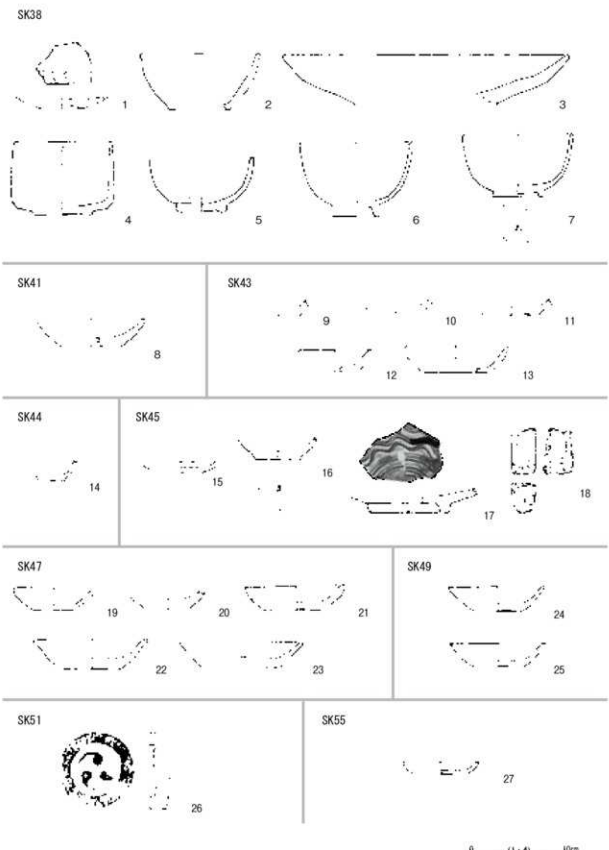


第18図　第３次面遺構出土遺物（SB02・SD02・SD03・SD07）

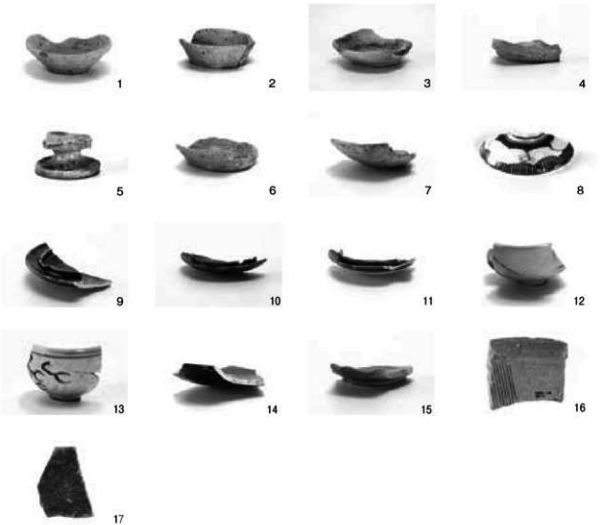


番号	遺構名	類別	器種	形状	胎土色・特徴	成形	釉薬	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面文様・特徴	内面文様・特徴	見込文様・特徴	高台文様・特徴	推定産地	推定年代	整理No.	備考
1	SK38	陶器	小皿	—	橙灰色	轆轤	灰釉	—	—	—	底部付近荒めに施釉	—	施釉・砂目あり	高台畳付砂目付着	肥前系	1610～1650	78	古唐津 口縁部欠損
3	SK38	陶器	小碗	天目形	橙灰色	轆轤	鉄釉	—	—	—	腰下まで施釉	施釉	施釉	—	瀬戸・美濃系	1610～1650	82	底部、高台欠損
3	SK38	土器	土師器高台	腰折形	暗茶	轆轤・回転ヘラ	なし	—	—	—	口縁部に横剥き	黒色	—	—	在地系	6ｃ～7ｃ	84	底部、高台欠損
4	SK38	陶器	小碗	筒形	橙灰色	轆轤	長石釉	—	7.6	6.2	高台付近まで施釉	施釉	施釉	高台まで施釉 掛かる	瀬戸・美濃系	1580～1600	83	
5	SK38	陶器	小碗	丸形	灰白色	轆轤	鉄釉	—	—	4.9	高台付近まで施釉	施釉	施釉	削り出し高台・指跡あり	瀬戸・美濃系	1610～1670	81	口縁部欠損
6	SK38	陶器	小碗	弦張形	灰褐色	轆轤	灰釉	—	7.9	4.9	高台まで施釉	施釉	施釉	高台内の凸部	肥前系	1650～1690	79	
7	SK38	陶器	小碗	腰張形	灰白色	轆轤	呉須絵・透明釉	—	6.5	5.2	呉須絵・高台付近まで施釉	施釉	施釉	高台内部に圏線	肥前系	1650～1690	80	肥前系京焼風陶器
8	SK41	土器	かわらけ小皿	丸形	赤褐色	轆轤	なし	—	2.9	—	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕	—	回転糸切	在地系	不明	88	
9	SK43	土器	かわらけ小皿	—	黄灰色	轆轤	なし	—	—	—	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕	回転糸切	在地系	不明	92	口縁部欠損
10	SK43	土器	かわらけ小皿	—	赤褐色	轆轤	なし	—	—	—	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕	回転糸切	在地系	不明	91	口縁部欠損
11	SK43	土器	かわらけ小皿	—	暗茶	轆轤	なし	—	—	—	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕	回転糸切	在地系	不明	90	口縁部欠損
12	SK43	土器	かわらけ小皿	—	黄灰色	轆轤	なし	—	—	—	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕	回転糸切	在地系	不明	93	口縁部欠損
13	SK43	土器	かわらけ小皿	丸形	赤褐色	轆轤	なし	—	2.8	—	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕	—	回転糸切	在地系	不明	89	
14	SK44	陶器	小碗	丸形	灰褐色	轆轤	鉄釉	—	—	2.8	腰下まで施釉	施釉	施釉	削り出し高台	瀬戸・美濃系	1650～1690	94	口縁部欠損
15	SK45	土器	かわらけ小皿	—	橙灰色	轆轤	なし	—	—	4.5	轆轤ナデ痕	—	轆轤ナデ痕	回転糸切	在地系	不明	97	口縁部欠損
16	SK45	陶器	碗	—	橙灰色	轆轤	灰釉	—	—	4.5	高台付近まで施釉	施釉	施釉	回転糸切・削り出し高台	肥前系	1580～1610	95	口縁部欠損
17	SK45	陶器	皿	—	暗茶	轆轤	白泥・灰釉・鉄釉	—	—	—	高台付近まで施釉	—	白化粧花模様・一部鉄釉	削り出し高台	肥前系	1650～1780	96	口縁部欠損
19	SK47	土器	かわらけ小皿	腰内折形	橙灰色	轆轤糸切	なし	8.5	2.4	4.1	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕	回転糸切	在地系	不明	128	
20	SK47	土器	かわらけ小皿	高台状底部	灰褐色	轆轤糸切	なし	—	2.1	—	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕	回転糸切	在地系	不明	132	
21	SK47	土器	かわらけ小皿	腰内折形	橙色	轆轤糸切	なし	10.6	2.5	6.4	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕	回転糸切	在地系	不明	129	
22	SK47	土器	かわらけ小皿	瓢箪形	灰褐色	轆轤糸切	なし	—	3.1	6.5	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕	回転糸切	在地系	不明	130	
23	SK47	土器	かわらけ小皿	直口形	灰褐色	轆轤糸切	なし	—	2.6	—	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕	回転糸切	在地系	不明	131	
24	SK49	土器	かわらけ小皿	丸形	灰褐色	轆轤糸切	なし	9.8	2.7	4.6	轆轤ナデ痕・二方に墨付書	轆轤ナデ痕・墨粕・中心に墨付書	轆轤ナデ痕	回転糸切	在地系	不明	133	灯明皿か
25	SK49	土器	かわらけ小皿	丸形	灰褐色	轆轤糸切	なし	—	2.5	4.7	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕	回転糸切	在地系	不明	134	
27	SK55	土器	かわらけ小皿	浅丸形	灰褐色	轆轤糸切	なし	7.9	1.3	5.2	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕	削り跡	回転糸切	在地系	不明	135	

番号	遺構名	類別	種類	形状	胎土色・特徴	釉薬	最幅(cm)	残幅(cm)	厚さ(cm)	文様	推定年代	整理No.	備考
18	SK45	石製品	硯石				—	2.6	3.0		不明		
26	SK51	瓦	軒丸瓦		灰		8.0	—	1.2	巴文	不明		

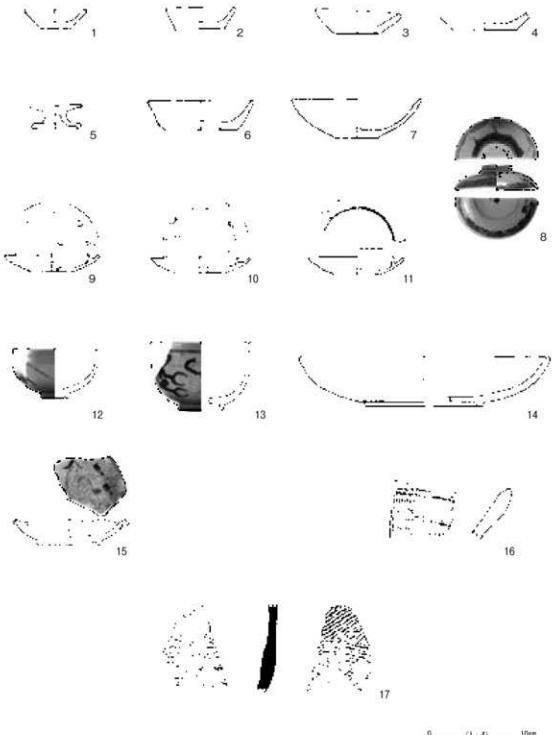


第19図　第３次面遺構出土遺物
（SK38・SK41・SK43・SK44・SK45・SK47・SK49・SK51・SK55）



○出土遺物　観察表

番号	遺構名	類別	器種	形状	胎土色・特徴	成形	釉薬	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面文様・特徴	内面文様・特徴	見込文様・特徴	高台文様・特徴	推定産地	推定年代	整理No.	備考
1	検出面	土器	かわらけ 無小糸	丸形	橙灰色	轆轤水切	なし	6.5	1.9	3.1	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕	回転糸切	在地系	不明	283	
2	検出面	土器	かわらけ 無小糸	楕形	橙色	轆轤水切	なし	7.3	2.2	5.2	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕	回転糸切	在地系	不明	290	
3	検出面	土器	かわらけ 小糸	丸形	橙灰白色	轆轤水切	なし	8.8	2.7	5	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕	ナデ	回転糸切	在地系	不明	289	
4	検出面	陶器	不明	平底形	橙灰白色	轆轤水切	鉄釉	—	—	—	露胎	—	居に鉄釉残る	回転糸切	瀬戸・美濃系	不明	287	底部破片
5	トレンチ	陶器	仏飯器	台付丸形	黄灰色	轆轤	灰釉	—	—	4.7	台付近まで施釉	施釉	施釉	露胎・中央孔	瀬戸・美濃系	1700～1730	309	縁部欠損
6	検出面	土器	かわらけ 糸	楕形	橙灰色	轆轤水切	なし	—	3	7.4	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕	指ナデ跡	回転糸切	在地系	不明	281	
7	検出面	土器	かわらけ 坏	丸形 底狭	橙灰色	轆轤水切	なし	—	4.1	4.3	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕	巴状隆起	回転糸切	在地系	中世	282	
8	検出面	瓶器	中耳瓶	丸形	白	轆轤	石灰・透明釉	—	2.6	—	縦転進に縦形整文	四方襷文	雑綾内に蒔子文？	巻付露胎	瀬戸・美濃系	1840～1870	291	
9	検出面	陶器	灯明受皿	油漏形	灰白色	轆轤	鉄釉	—	2	4.9	口縁に施釉	施釉	施釉	平底	瀬戸・美濃系	1750～1800	275	
10	検出面	陶器	灯明受皿	油漏形	灰	轆轤	鉄釉	—	1.7	—	全面に施釉	施釉	施釉	施釉	瀬戸・美濃系	1800～1860	277	
11	検出面	陶器	灯明受皿	油漏形 器強底	灰白色	轆轤	鉄釉	—	1.9	4.8	口縁に施釉	施釉	施釉	露胎・蕎麦底	瀬戸・美濃系	1800～1860	276	
12	検出面	陶器	小碗	半球形	灰	轆轤	透明釉・上絵	—	5.1	2.8	高台付近まで施釉・色絵	施釉	施釉	露胎・削り出し高台	京・信楽系	1780～1860	279	
13	検出面	半磁器	碗	腰張形	灰白色	轆轤	石灰・透明釉	—	7.1	—	火炎文？	施釉	施釉	高台巻付のみ露胎	波佐見系	1680～1740	288	
14	検出面	陶器	大皿	平丸形	黄灰白色	轆轤	鉄釉	—	5.1	—	全面に施釉	施釉	施釉	高台付近に卜ナ渕線痕	瀬戸・美濃系	1600～1670	285	
15	検出面	陶器	小皿	歪丸形	灰	轆轤・指押し	石灰・灰釉	—	2.6	—	全面に施釉	施釉	施釉	石灰絵地に施釉	瀬戸・美濃系	1700～1770	278	
16	検出面	焼締	摺鉢	—	橙色	輪積み・ナデ	なし	—	—	—	横ナデ調整	間隔を開けて摺目櫛描	—	—	越前系	16c	286	口縁部破片
17	検出面	須恵器	甕？	—	暗灰色	輪積み・叩き	なし	—	—	—	条線状叩き目	同心円状叩き目	—	—	在地系	7c～10c前半	284	胴部破片



第20図　第３次面遺構外　出土遺物

○第４次遺構検出面

遺構の概要

主な遺構と概要　４次面では、近世残存遺構のほかに中世以前に所属する遺構はまばらであり、住居跡や溝跡や小穴などが散見される程度である。竪穴住居跡（SB03）は、３次面で確認されたSB02の下層にあたり、古墳時代前期の住居跡と思われる。床面は平坦であるものの、柱穴等の痕跡は未確認である。調査区中央部には基盤層に伴う巨石が出土しており、巨石を取り囲むような溝跡（SX01）、巨石を掘り出そうとした土坑（SK60）を確認した。溝跡・土坑からは古墳時代の須恵器・土師器が出土しており、溝跡は、巨石を意識した特殊な周溝の可能性もある。近世残存遺構では、SD07最下層において五輪塔（地輪）の列石を確認した。SK47は、五輪塔と板碑などの部材平担部を敷き詰めた状況が看取され、地下室の敷石遺構と想定される。

瓦包含層と瓦集中区　調査区南東隅部へ落ち込む自然地形上には、多量の布目瓦片を包含する土層が確認された。この瓦包含層の南東隅部では、特に瓦片が積み重なる瓦集中区を確認した。調査区の土層断面から、瓦集中区は中世溝跡（SD02）の直下に位置し、壁土と思われる焼土粒を多数混合している暗褐色土に包含されている。ただし、同層の厚さは２㎝程度と薄く、あたかも地表面に敷き詰められたかのような状況をみせる。瓦破片の重なり合いが少ないため、散乱廃棄された状況と推測される。また瓦包含層は、人為的な堆積か自然堆積かは判断つかないが、共伴する遺物から平安末から中世初頭期に堆積した土層と考えられる。

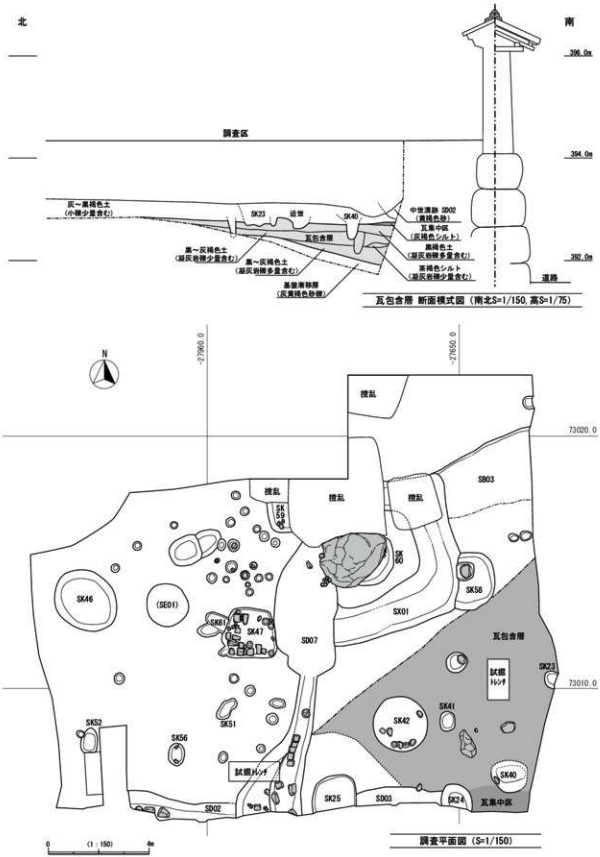
出土遺物の概要

古墳～古代の遺物　SK60からは、古墳時代の土師器高坏の脚部が出土した。SX01からは、古墳時代の須恵器坏蓋が出土している。瓦包含層からは、土師器と須恵器の破片が出土している。いずれも残存率が低く、小破片であるため全体の形状が復元できるものはない。須恵器の甕と思われる胴部破片が数点あり、外面には条線状叩き目痕が、内面には同心円状叩き目が残る。

中世～近世の遺物　SD03からは、かわらけが多量に出土している。大小のサイズがあり、大きいものは口径11㎝前後で、小さいものは口径８㎝前後に集中する。全体的に煤付着などの使用痕は無く、表面に斑状に錆色の付着物が付くものが多い。かわらけの規格性から中世後期の所産と推定される。SK61からは、かわらけ２点が出土している。

古代瓦の概要　瓦包含層および瓦集中区からは、多量の布目瓦片が出土している。瓦包含層からは、軒丸瓦が３点出土しているが、軒平瓦は出土していない。出土した軒丸瓦の瓦当文様は、単弁六弁蓮華文、単弁（素弁）蓮華文であり、１点は瓦当文様不明であった。単弁六弁蓮華文軒丸瓦は、外区に珠文が施されており、瓦当部半分は欠損するものの、直径は16～17㎝と推定される。文様構成は、近江（現滋賀県）の琵琶湖東岸（湖東地域）に集中して出土する「湖東式軒丸瓦（※）」に酷似する。単弁（素弁）蓮華文軒丸瓦は、瓦当部の約８割を欠損しており、文様はさだかではない。また、出土した多数の瓦片には縄目・並行叩き目・格子目の３種類の叩き具痕が残されている（出土瓦の傾向等詳細については「（４）出土瓦の傾向」（P.54～）にて記述）。

※湖東式軒瓦…近江湖東地域で出土する湖東式瓦は、共伴する須恵器等から７世紀後半から８世紀初頭に生産されたと考えられており、湖東地域に渡来系氏族を移住させたといわれていること、文様の系譜が畿内では確認できないことなどから、渡来系氏族の寺院に葺かれた瓦と想定されている。近年、美濃・尾張・越前においても数点の湖東式軒瓦が出土しており、近江から地方に波及したものと考えられている。



第21図　第４次遺構検出面　調査図

第４次遺構検出面

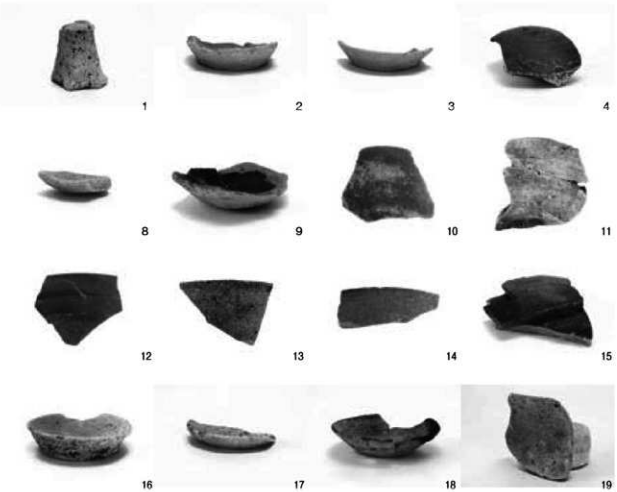
瓦集中区

中世溝跡
(SD02)

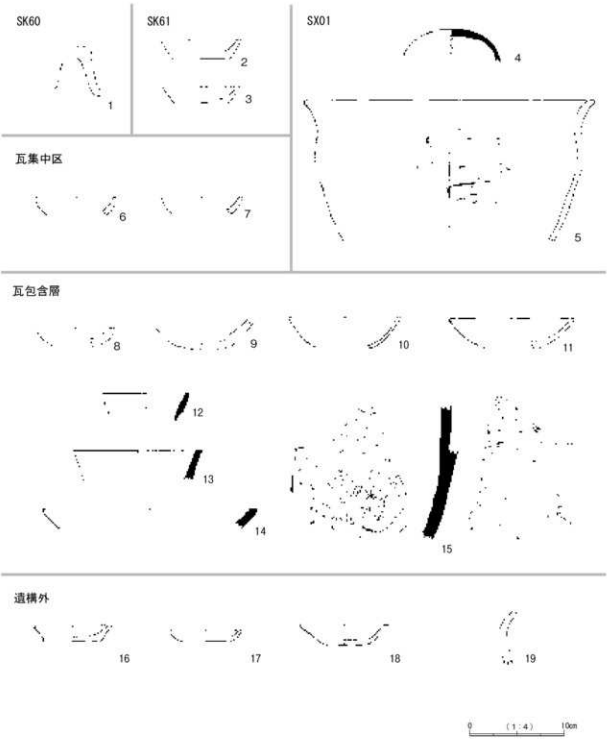
SX01

瓦包含層土層断面

軒丸瓦出土状況



番号	遺構名	類別	器種	形状	胎土色・特徴	成形	輪積	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面文様・特徴	内面文様・特徴	見込文様・特徴	高台文様・特徴	推定産地	推定年代	整理No.	備考
1	SK60	土器	土師器高坏	一	灰褐色・爆石・砂	轆轤	なし	—	—	—	表面剥落	漆状孔	破損	破損	在地系	6c～7c	136	高坏の坏部破片
2	SK61	土器	かわらけ小皿	逆台形	赤褐色	轆轤赤切	なし	—	2.3	6.2	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕	指ナデ跡	回転赤切	在地系	不明	137	
3	SK61	土器	かわらけ小皿	逆台形	灰褐色	轆轤赤切	なし	—	1.9	—	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕	指ナデ跡	回転赤切	在地系	不明	138	
4	SX01	須恵器	坏蓋？	丸底形	暗灰色	轆轤	一部自然釉	—	—	—	破片上部に自然釉	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕	回転削り	在地系	5c～7c	212	口縁部欠損
5	SX01	土器	甕			輪積・ナデ	なし	30.0	—	—	タテハケナデ	ヨコナデ	—	—	在地系	5c～7c		
6	瓦集中区	土器	小皿			ロクロ	なし	8.4	—	—	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕	—	—	在地系	不明		
7	瓦集中区	土器	小皿			ロクロ	なし	8.4	—	—	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕	—	—	在地系	不明		
8	包含層	土器	かわらけ小皿	丸形	橙灰色	轆轤赤切	なし	—	1.9	—	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕	—	回転赤切	在地系	不明	296	
9	包含層	土器	土師器坏	丸底形	灰褐色	手づくり・削り・磨き	なし	—	—	—	横ヘラ削り調整	内黒・磨き	内黒・磨き・内面見込み段差あり	ヘラ削り	在地系	6c～7c	303	
10	包含層	土器	土師器坏	丸形	赤褐色	轆轤	なし	—	—	—	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕	—	—	在地系	8c～10c	302	口縁部破片
11	包含層	土器	かわらけ小皿	丸形　底反	橙灰色	轆轤赤切	なし	—	2.9	—	轆轤ナデ痕	横磨き・一部煤付着	全体に煤付着	回転赤切	在地系	不明	295	
12	包含層	須恵器	不明	—	暗灰色	轆轤	なし	—	—	—	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕	—	—	在地系	5c～10c前半	294	口縁部破片
13	包含層	須恵器	甕？	端反形	暗灰色	輪積み・ナデ	なし	—	—	—	横ナデ調整	横ナデ調整	—	—	在地系	5c～10c前半	297	口縁部破片
14	包含層	須恵器	不明	—	暗灰色	轆轤	なし	—	—	—	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕	—	—	在地系	5c～10c前半	298	口縁部破片
15	包含層	須恵器	甕？	—	暗灰色	輪積み・叩き	なし	—	—	—	格子目状叩き目	同心円状叩き目	—	—	在地系	7c～10c前半	300	胴部破片二次付着
16	検4	土器	かわらけ小皿	逆台形	橙灰色	轆轤赤切	なし	8.2	2	6.1	轆轤ナデ痕	横ナデ調整	ナデ	回転赤切・ヘラ跡あり	在地系	中世？	306	
17	検4	土器	かわらけ小皿	平丸形	橙灰白色	轆轤赤切	なし	—	1.2	5.2	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕	轆轤ナデ痕	回転赤切	在地系	不明	307	
18	検4	土器	かわらけ小皿	逆台形	褐色	轆轤赤切	なし	9.4	2.3	4.5	轆轤ナデ痕・一部煤付着	轆轤ナデ痕・一部に煤付着	ナデ	回転赤切	在地系	不明	308	油壺状の煤付着
19	検4	土器	土師器甕	—	橙灰色	輪積み・ナデ	なし	—	—	—	横ナデ調整	表面剥落	—	—	在地系	7c～10c	305	口縁部破片



第22図　第４次面出土遺物
(SK60・SK61・SX01・瓦包含層・瓦集中区・遺構外)

（4）出土瓦の概要

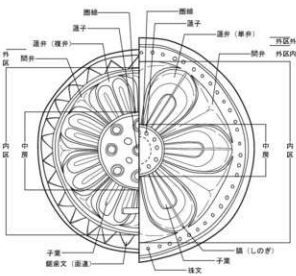
本調査区から出土した古代瓦は、総点数1723点・総重量163.61kgで、４次面の瓦集中区・包含層からは1210点・114.4kgの瓦が出土した。主な種別は、軒丸瓦・道具瓦・文字瓦・丸瓦・平瓦である。なお、小破片のもので分類できなかったものに関しては、全て不明瓦として扱った。凹面凸面の調整・特徴など詳細については観察表を、拓本の配置図は模式図を参照のこと。以下、種別ごとに概要を述べていく。

古代瓦出土量

	総点数	総重量（kg）	丸瓦	重量（kg）	平瓦	重量（kg）	不明瓦	重量（kg）
１～３次面	513	49.21	207	17.91	206	27.5	100	3.8
４次面	1210	114.4	295	32.46	568	76.32	347	5.62
計	1723	163.61	502	50.37	774	103.82	447	9.42
%	100.0%	100.0%	29.1%	30.8%	44.9%	63.5%	25.9%	5.8%

軒丸瓦（第23図１～４）

軒丸瓦は、丸瓦の広端部に文様（古代における基本的な文様は蓮華文）が施された円形の粘土板を接合させたもので、軒先にのみ飾られる。



軒丸瓦文様面各部名称

本調査区からは４点の軒丸瓦が出土している。１は、単弁六弁蓮華文軒丸瓦で、出土した軒丸瓦の中で最も遺存状態が良好である。内区は、中房と蓮弁・間弁が圏線によって区切られ、中房は突出しない。中房内は一部欠損しているが、中央には大きな蓮子が配されていたとみられ、その周囲に小さい蓮子を配している。周囲の蓮子は、蓮弁の中央と間弁の延長線上に規則的に配されているとみられ、中房の蓮子数は１＋12と考えられる。単弁の蓮弁を６枚配していたとみられ、蓮弁内には子葉を持ち、弁の中軸には稜線（鎬）がある。蓮弁の間にある間弁はばち状を呈し、中房にまで達する。蓮弁の断面形状は、子葉は突出し、弁端は丸みを帯びて立ち上がる。

内区と外区の間には境界を作るような圏線は存在せず、外区内縁には小さな珠文を巡らすが、その配置は規則的ではない。また、瓦当の半分が欠損し、残存している文様面にも破損がみられるため珠文の正確な数は不明であるが、50以上は配されていたとみられる。外区の内縁と外縁の間には１条の圏線が巡る。圏線の外側である外縁は、明確な立ち上がりを見せる周縁を持たず、平縁である。瓦当裏面には丸瓦の剥離痕があり、やや厚めに付けられた接合用の粘土が残っている。剥離痕を見る限りでは丸瓦自体はやや薄手であったように思われる。

１は、長野県内では確認されていない新出の文様を持つ軒丸瓦で、その特徴から湖東式軒丸瓦の文様であると判明した。湖東式の詳細・関連性については別章にて記述する。

２は、複弁蓮華文軒丸瓦で、４次面の瓦包含層からではなく３次面SD07下層から出土したものである。瓦当の大半を欠損しているが、文様面の遺存状態は良い。内区は中房を欠損しており、蓮子数や配置などは不明であるが、複弁の蓮弁が２組と間弁が確認できる。間弁はばち状を呈し、複弁と接合している。文様は全体的にシャープさを欠いているように思われ、笵傷とみられる箇所もある。外区には凸（面違）鋸歯文が確認できる。また、

圏線とみられる凸線が存在しているが、断面形状は鋸歯文側からの立ち上がりがそのまま内区の蓮弁に向かって緩やかに傾斜しているため、凸線自体が明瞭であるという印象は受けない。全体的な文様構成は、従来善光寺境内出土と伝えられる軒丸瓦や、牟礼バイパス地点から出土した軒丸瓦（いわゆる善光寺瓦）と酷似している。

3は、単弁（素弁）蓮華文軒丸瓦とみられるが、遺存度は極めて低く、全体的な文様構成を窺い知ることはできない。わずかに残存している文様面からは、子葉を持たない簡素化された蓮弁と、直線的に伸びる間弁が確認でき、外区に装飾的な文様がないことがわかる。これまでにも単弁（素弁）の蓮華文軒丸瓦が確認されているが、それとは異なるもので、1に続く新出の軒丸瓦の可能性がある。

4は、文様面を欠損している軒丸瓦である。しかし、この軒丸瓦の最大の特徴は、明確な段を持つ周縁を有している点である。現在まで確認されていた善光寺境内出土軒丸瓦（複弁・単弁蓮華文）や、本調査区から出土した軒丸瓦には、有段の縁を持つ個体はない。つまり、この有段の縁をもつ軒丸瓦は、今までの軒丸瓦の造りとは異なる系統に属するとみられるのである。また、わずかに残る文様面には、線鋸歯とみられる文様帯も存在しており、裏面には丸瓦の剥離痕もみられる。4も、1・3に続く新出の軒丸瓦の可能性がある。

道具瓦（第23図5）

道具瓦は、屋根の各箇所に合わせて造った瓦を指し、その形状は多岐にわたる（鬼瓦・鴟尾など）。5は用途も形状も不明な道具瓦である。道具瓦であるという根拠として、底面とみられる部分に布目痕が確認できるからである。古代においては、瓦を製作する際に布を使って模骨や成形台からはずしやすいようにしており、道具瓦の製作もそれに順ずる。よって、布目痕を有している5は、何らかの瓦製品であることがわかる。断面形状はやや傾いたL字状を呈しており、調整の粗さから内湾している方が内側であると考えられる。

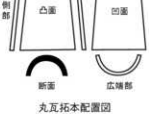
文字瓦（第23図6～8）

文字瓦は、丸瓦・平瓦などの凹・凸面のいずれかにヘラ状の工具で文字（人名・郡名・文章など）や記号を刻みつけたものである。県内の文字瓦資料としては、信濃国分寺跡出土の文字瓦が挙げられのみで、北信地域では初の出土であるとみられる。また、確認された文字類は、3点とも平瓦の凹面に刻まれていた。

6は、接合した結果、最も遺存度が高く文字も大きく確認された。「咸（カン・ことごとく・みな）」という字に似ているが、現時点では判読が難しく確証は得られていない。また、その周囲にも文字らしき刻みが確認でき、文章であった可能性も指摘できる。7は、拓本の配置上、文字が逆さまになっているが、反転すると「七」と刻まれているようにみえる。また、上部に薄く刻みのようなものがあり、元々は一文字の「毛」、もしくは二文字で「十七」とも考えられる。8は、遺存度が低く文字の全体像を掴むことはできないが、順序をもって刻みを入れているのがわかる。

丸瓦（第23図9～第26図24）

出土した丸瓦の総点数は502点・50.37kgで、4次面瓦集中区・包含層から出土したのは295点・32.46kgである。



丸瓦拓本配置図

9は、狭端部と両側部が残存しており、遺存度は良い。凹面には、粘土板を粘土塊から切り離す際の糸切り痕が確認できる。また、凹面から見たときの右側部には、粘土板を模骨に巻きつけた際の、粘土の綴じ目が残っている。

10・12は、凸面に共通の調整が施されている。丸瓦は、凸面を上（外側）にして屋根に葺くため、凸面の叩き具の整形痕が残っていると、その凹凸に雨水が溜まり、そこから破損を起こしやすい。また、整形痕が残っていると見た目上汚く見えてしまうなどの理由から、凸面にはナデやケズリの調整を加え、叩き具の痕跡を消してしまうのであ

る。10・12に戻るが、この２点の凸面には、平行に走る粘土の低い隆起がみられる。他の丸瓦はきれいに調整されていることからすると、この２点に施されている調整は、板状の工具ではなくハケに近いものと考えられる。全体量からすると、この調整を施された丸瓦は少ない。凸面の整形・調整に関してだが、18は縄叩き具による整形痕が全く消されることなく残っており、22にみられるように平行叩き具による整形痕も確認できる。

15・16・17の３点の凹面には、布の綴じ目が残る。20は、小破片でその全体を窺うことはできないが、残存している側面は特徴的である。他の丸瓦は側面が平らに調整されているのに、20はケズリによって平らな面が存在せず、鋭角になってしまっている。出土した丸瓦の中でも、この調整技法は20のみである。

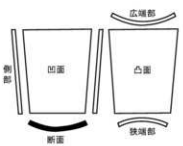
24は縦わずか9.6cmしかない丸瓦である。明らかに通常の丸瓦を加工したものであるが、胎土や焼成具合、全体的にいぶしたような感じを受けることから、古代の瓦というより中世に近い所産、もしくは中世以降と考えられる。

丸瓦分類表

	総点数	縄叩き具	格子目叩き具	平行叩き具	ナデ	不明
1～3次面	207	41	0	8	152	6
4次面	295	81	0	7	202	5
計	502	122	0	15	354	11
%	100.0%	24.3%	0%	3.0%	70.5%	2.2%

平瓦（第26図25～第31図73）

出土した平瓦の総点数は774点・103.82kgで、４次面瓦集中区・包含層から出土したのは568点・76.32kgである。



平瓦拓本配置図

25～49は、凸面の整形痕が縄叩き具によるものである。４次面瓦集中区・包含層から出土した平瓦のうち、縄叩き具によるものは616点で、約80％を占める。また桶巻き造りと一枚造りの割合は５：２で、桶巻き造りによるものが多い。25～42は桶巻き造りで、43～49が一枚造りによるものである。

25は、粘土板を切り離した際の糸切り痕が凹・凸両面に残っている。29・33は、凸面の側部付近にヘラ状の工具で刻まれた直線が確認できる。これは、桶巻き造りの平瓦にみられるもので、円筒形の粘土板を４分割する際の基準分割線であるとみられる。30は、凹面に粘土の切れ目のようなものが端部と平行に走っている。また、破損部分にも同様の粘土の切れ目が確認できることから、この平瓦は粘土板によるものではなく、粘土紐を模骨に積み上げて造ったもので、粘土の切れ目は輪積み痕であるとみられる。32・36は、凹面に布の綴じ目が残っている。37は明瞭な模骨痕が残っている。

40は特殊な平瓦で、広端部を斜めに切り落としている。これは建物の屋根構造が寄棟・入母屋・方形造りのみに存在する平瓦である。これらの屋根構造の場合、傾斜面を四面（入母屋の場合は六面）必要とするため、棟が斜めに下る部分では必然的に葺く瓦も斜めでなければならない。そのため、通常の瓦の隅を切り落として棟の形状に合わせ、隙間なく屋根に瓦を葺けるようにしたものである。これらの瓦を「隅切り瓦」と呼んでいる。

41・42には粘土板の綴じ目が確認でき、42は凹面の合わせ目部分に指ナデを加えている。45・47・49は、凹面の糸切り痕が明瞭で、布目痕がほとんど確認できない。48の凹面は、指ナデによって布目痕が消えている。

50～57は、凸面の整形痕が格子目叩き具によるものである。４次面瓦集中区・包含層から出土した平瓦のうち、格子目叩き具によるものは36点で、約５％を占める。小破片が多く、桶巻き造りと一枚造りとの区別が付きにく

いものが多いが、確認できたものでの割合は４：１で、桶巻き造りによるものが多い。50～55は桶巻き造りで、56・57が一枚造りによるものである。

50は、糸切り痕や指ナデが確認できる。51は凸面の整形痕がナデによって全体的に潰れてしまっている。53は還元焔焼成によるもので、硬質である。また、指の押圧によって整形痕が潰れ、所々に指紋が確認できる。55は、凹面に粘土の貼付が確認でき、指頭圧痕も残っている。破損による補強とみられる。格子目叩き具の整形を受ける平瓦は、凸面に重複して叩きが加えられており、正確な格子の大きさや幅、叩き具自体の大きさなどの判別が非常に困難である。なお、51と54は３次面出土資料である。

58～71は、凸面の整形痕が平行叩き具によるものである。４次面瓦集中区・包含層から出土した平瓦のうち、平行叩き具によるものは76点で、約10％を占める。また、桶巻き造りと一枚造りの割合は３：４で、一枚造りによるものが多いが、ほぼ同数である。58～63は桶巻き造りで、64～71が一枚造りによるものである。

58は、端部や側部の調整が雑で、側部はケズリが斜めに切り込み、側部に凹凸が生じている。60は、２次面出土資料である。全丸瓦・平瓦中最も厚い造りで、異様な印象を受けるが、凹面の模骨痕や凸面の調整などはほかのものと変わらない。61は、凸面の叩き具痕に一つの特徴がみられる。重複して叩かれているが、よく見ると平行の刻みの凸部分に粘土の割れ口（笵傷）が確認できる。67の平行叩き具は、やや細めで小振りな印象を受ける。

68～71までは、一枚造りの大きな特徴を示す瓦で、各々が端部や側部に布目痕を有している。これは、平瓦の作り方の違いによるもので、一枚造りが成形の段階ですでに側部や端部が存在している点がそれにつながる。桶巻き造りでは、凸面の整形・調整を終えた段階で模骨と布を取り外し、円筒を４分割する。そこで、初めて桶巻き造りの平瓦に側部が生まれる。まれに、側部の調整時に布目が付着することがあると思われるが、68～71は全て布目痕が凹面から続く一連のものであるため、その可能性は除去される。よって、これらの平瓦は、成形の段階で端部や側部が存在し、その時点で布目が付着する可能性のある一枚造りであると言える。

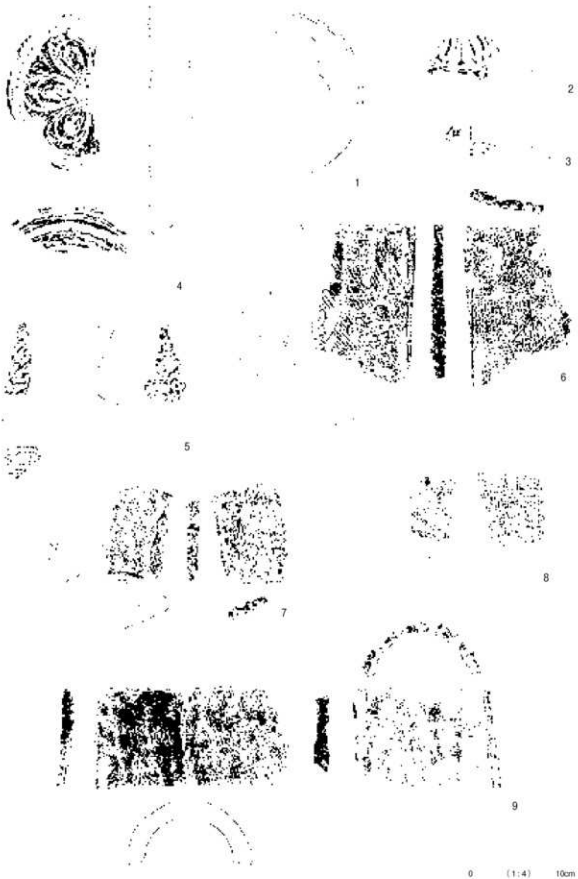
72・73は、凸面の整形痕がナデによって消滅している平瓦である。４次面瓦集中区・包含層から出土した平瓦のうち、凸面の整形痕が消されているものは30点で、約４％を占める。基本的に、平瓦は丸瓦とは反対に、凸面を下（屋根側）に向けて葺くため、整形痕をそのままにしておくものが大半であるが、一部においてはこのような技法も使用されていたようである。72は模骨痕を有するが、73はみられない。

平瓦分類表

	総点数	縄叩き具			格子目叩き具			平行叩き具			ナデ			不明
		桶巻き	一枚	不明	桶巻き	一枚	不明	桶巻き	一枚	不明	桶巻き	一枚	不明	
１～３次面	206	89	45	26	9	0	9	12	5	8	0	0	3	0
４次面	568	228	65	163	7	2	9	13	23	15	12	1	14	16
計	774	317	110	189	16	2	18	25	28	23	12	1	17	16
		616			36			76			30			16
%	100.0%	79.6%			4.7%			9.8%			3.9%			2％

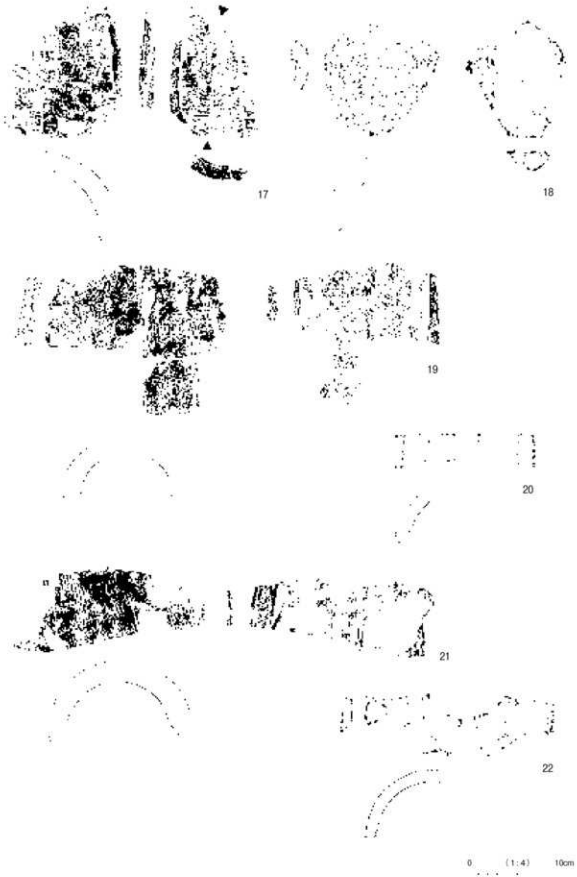
※１　図中の▲は、布の縦じ目がある箇所を示したものである。

※２　掲載した古代瓦のほとんどは、４次面瓦集中区・包含層出土のものである。４次面以外（１～３次面）から出土した古代瓦に関しては、遺物観察表の特徴欄に出土地点を示している。



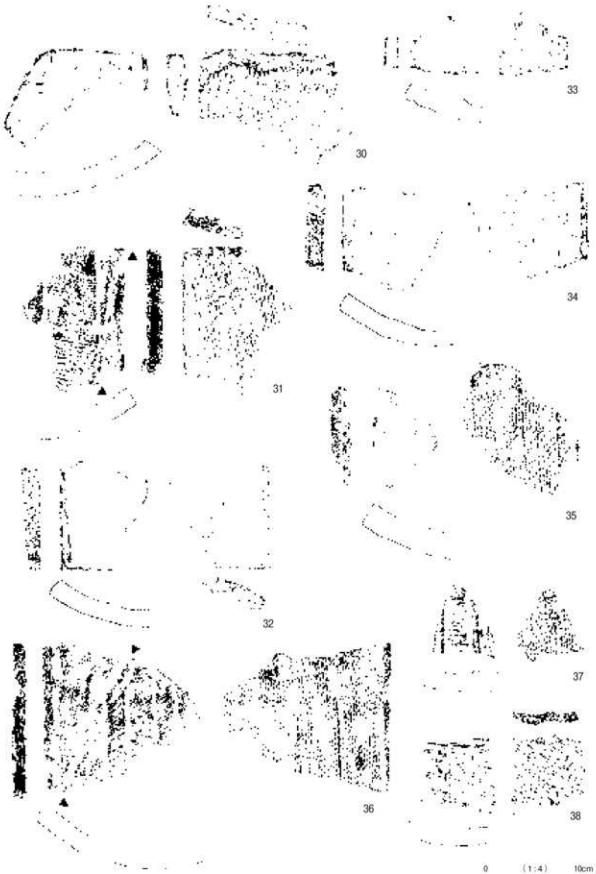
第23図　大本願明照殿地点出土古代瓦（軒丸瓦・道具瓦・文字瓦・丸瓦）

第24図　大本願明照殿地点出土古代瓦（丸瓦）

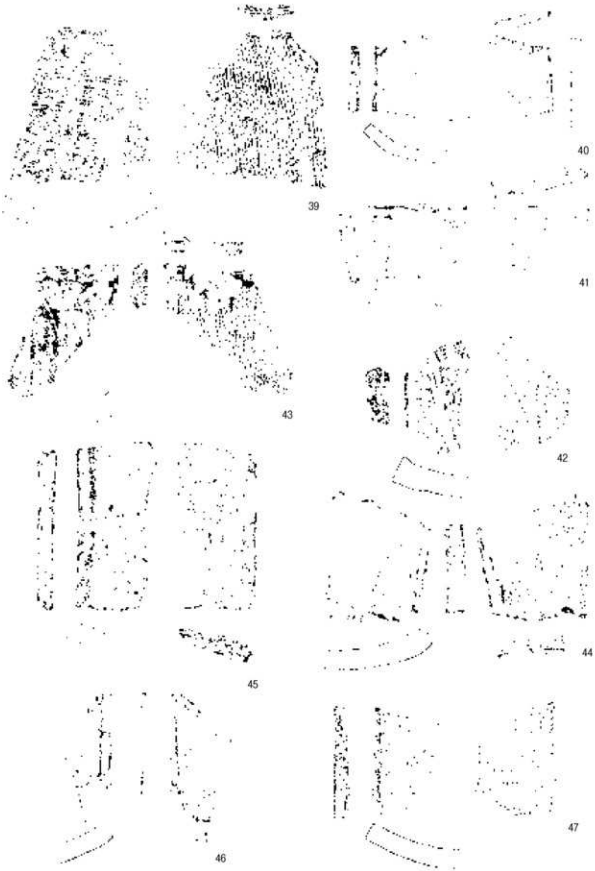


第25図　大本願明照殿地点出土古代瓦（丸瓦）

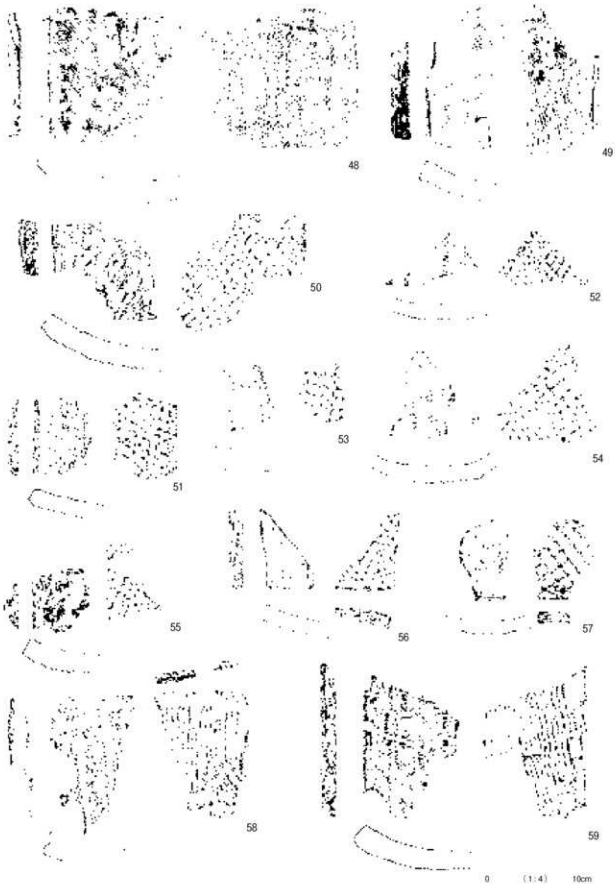
第26図　大本願明照殿地点出土古代瓦（丸瓦・平瓦）



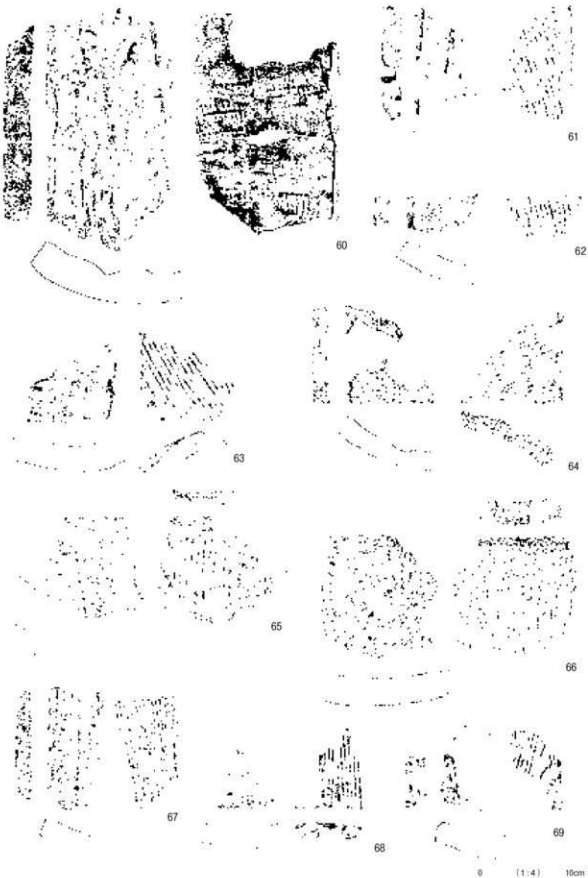
第27図　大本願明照殿地点出土古代瓦（平瓦）



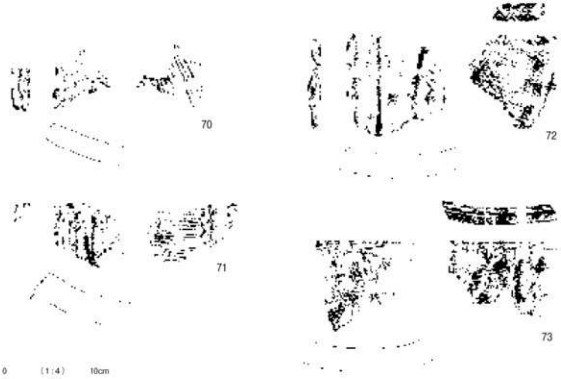
第28図　大本願明照殿地点出土古代瓦（平瓦）



第29図　大本願明照殿地点出土古代瓦（平瓦）



第30図　大本願明照殿地点出土古代瓦（平瓦）



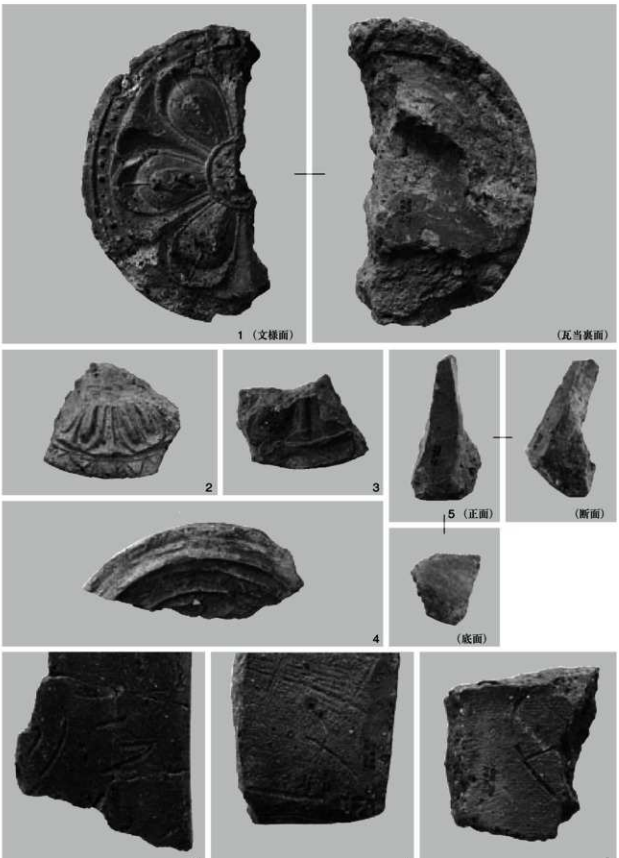
第31図　大本願明照殿地点出土古代瓦（平瓦）

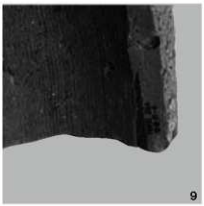
図面No.	種別	法量（cm） 推定径	法量（cm） 厚さ（瓦当部）	色調	焼成	特徴
1	軒丸瓦	17.7	4.0～4.3	2.5Y 6／1 黄灰	良	単弁六弁蓮華文（調東式軒丸瓦）・瀧元塩・側部はケズリ調整・新出の軒丸瓦
2	軒丸瓦	16.2	1.8～2.4	7.5Y R 8／6 浅黄橙	良	複弁蓮華文・笵傷あり？・側部はケズリ調整・瓦当裏面はナデ調整・3次面S D07出土
3	軒丸瓦	17.4	2.2	10Y R 5／4 赤褐	やや良	単弁（素弁）蓮華文？・側部はケズリ調整・瓦当裏面はナデ調整・新出の軒丸瓦？
4	軒丸瓦	20.0	1.5～1.9	10Y R 8／6 黄橙	やや良	文様不明・右段の縁を もつ・側部はケズリ調整・新出の軒丸瓦？

図面No.	種別	法量（cm） 厚さ	法量（cm） 現存高	色調	焼成	特徴
5	道具瓦	1.8～2.1	10.6	7.5Y 4／1 灰	良	用途不明の道具瓦・底面に布目痕・調整はナデ・瀧元塩

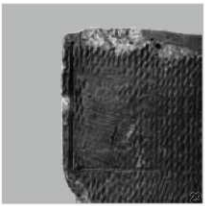
図面No.	種別	厚さ（cm）	色調	焼成	凹面	凸面	側部	端部	特徴
							調整回数（ケズリ）		
6	平瓦	1.9	2.5Y R 5／1 黄灰	やや不良	布目痕・ヘラ描き文字	縄叩き→ヨコナデ	3	3	文字瓦「或（？）」・瀧元塩
7	平瓦	1.8	N 3／暗灰	良	布目痕・糸切痕・ヘラ描き文字	縄叩き・布目痕	3	3	文字瓦「七（十七？・七？）」・瀧元塩
8	平瓦	1.8	10Y R 6／2灰黄褐	良	布目痕・ヘラ描き文字	縄叩き	破損	破損	文字瓦「（不明）」・瀧元塩？
9	丸瓦	1.8	2.5Y R 6／2灰黄	やや良	布目痕・糸切痕・粘土縦じ目	縄叩き→ヨコナデ	3	1	瀧元塩？
10	丸瓦	1.6	7.5Y R 8／6 浅黄橙	やや不良	布目痕	ヨコナデ（ハケ？）	3	1	
11	丸瓦	1.5	N 4／灰	良	布目痕・糸切痕？	縄叩き→ヨコナデ	3	3	瀧元塩・硬質
12	丸瓦	1.9	5 Y R 6／8 橙	良	布目痕・糸切痕	ヨコナデ（ハケ？）	3～4	3～4	
13	丸瓦	2.0	N 3／暗灰	良	布目痕	ヨコナデ	3	2	瀧元塩・硬質
14	丸瓦	1.8	10Y R 3／1 黒褐	良	布目痕	縄叩き→ヨコナデ・指頭痕	3	1	
15	丸瓦	1.6	2.5Y R 6／6 橙	やや良	布目痕・布縦じ目	縄叩き→ヨコナデ	2	破損	
16	丸瓦	1.5	7.5Y R 6／6 橙	良	布目痕・糸切痕・布縦じ目	ヨコナデ	3	2	
17	丸瓦	1.9	N 5／灰	良	布目痕・糸切痕・布縦じ目	縄叩き→ヨコナデ・指紋有	3	1	瀧元塩・硬質
18	丸瓦	2.2	2.5Y 6／2灰黄	良	布目痕	縄叩き	2～3	1	
19	丸瓦	1.9	2.5Y R 4／2灰赤	良	布目痕	縄叩き→ヨコナデ	3	破損	側部に一部布目痕有
20	丸瓦	1.3	5 B 2／1 青黒	良	布目痕・糸切痕	ヨコナデ	2	破損	瀧元塩・硬質

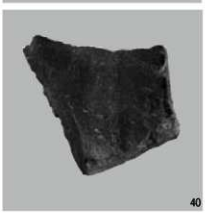
21	丸瓦	2.3	7.5Y R 8／4 浅黄橙	良	布目痕	縄叩き→ヨコナデ	2	破損	
22	丸瓦	1.1	5 Y R 5／8 明赤褐	やや良	布目痕→ナデ？糸切痕	平行叩き	1～2	破損	
23	丸瓦	21～27	5 Y R 7／6 橙	良	布目痕	縄叩き→ヨコナデ	3	破損	
24	丸瓦	1.3	N 4／灰	良	布目痕・圧痕	平行叩き（ハケ？）	4～5	1	瀧元瓦？道具瓦？いぶし？
25	平瓦	2.4	7.5Y R 7／3 にぶい橙	良	布目痕・糸切痕	縄叩き・糸切痕	3	4	
26	平瓦	2.9	N 4／灰	良	布目痕・模骨痕？	縄叩き	2	3	瀧元瓦
27	平瓦	2.7	5 Y R 6／6 橙	良	布目痕・模骨痕・糸切痕	縄叩き	1	3	
28	平瓦	2.3	N 6／灰	良	布目痕・模骨痕？・糸切痕・布縫じ目	縄叩き・糸切痕	1～2	2～3	瀧元瓦
29	平瓦	1.8	2.5Y 6／2 灰黄	良	布目痕・糸切痕	縄叩き・分割線・糸切痕	1～2	2	分割基準線を凸面に割む・瀧元瓦
30	平瓦	2.5	5 Y R 5／8 明赤褐	良	布目痕・輪積痕	縄叩き	3	3	粘土紐巻き作り
31	平瓦	2.1	7.5Y R 7／6 橙	良	布目痕・模骨痕・糸切痕・布縫じ目	縄叩き	3	2	
32	平瓦	1.8	2.5Y R 5／8 明赤褐	良	布目痕・模骨痕・糸切痕・指ナデ？	縄叩き	3	2	
33	平瓦	2.3	10Y R 4／3 にぶい黄褐	良	布目痕・模骨痕	縄叩き・分割線	2～3	破損	分割基準線を凸面に割む
34	平瓦	2.1	N 2／黒	良	布目痕・模骨痕	縄叩き	3	破損	瀧元瓦
35	平瓦	2.7	7.5Y R 8／1 灰白	良	布目痕・模骨痕	縄叩き	1～2	破損	瀧元瓦？
36	平瓦	2.0	10Y R 8／4 浅黄橙	やや良	布目痕・模骨痕・糸切痕・布縫じ目	縄叩き	3	破損	
37	平瓦	2.2	2.5Y R 4／8 赤褐	良	布目痕・模骨痕	縄叩き	破損	破損	二次被熱？
38	平瓦	1.8	10B G 3／1 暗青灰	良	布目痕・模骨痕・糸切痕	縄叩き	破損	3	瀧元瓦
39	平瓦	1.8～2.0	10Y R 6／1 褐灰	やや良	布目痕・模骨痕・糸切痕	縄叩き・指紋？	破損	2	瀧元瓦？
40	平瓦	1.3	N 3／暗灰	良	布目痕・模骨痕・糸切痕	縄叩き	2～3	1	隅切瓦・瀧元瓦
41	平瓦	2.2	N 4／灰	良	布目痕・模骨痕・粘土縫じ目	縄叩き	3	3	瀧元瓦
42	平瓦	2.9	2.5G Y 6／1 オリーブ灰	良	布目痕・糸切痕・指ナデ	縄叩き・押圧痕	1～2	破損	瀧元瓦？破損面に粘土の縫じ目
43	平瓦	2.2	5 Y 5／1 灰	良	布目痕・糸切痕・指頭痕	縄叩き	3	3	瀧元瓦
44	平瓦	2.2	10Y R 5／2 灰黄褐	やや良	布目痕・糸切痕	縄叩き	3	1～2	
45	平瓦	2.2	2.5Y R 6／8 橙	良	布目痕・糸切痕・指頭痕	縄叩き・糸切痕	3	2	
46	平瓦	1.9	2.5Y R 5／8 明赤褐	良	布目痕・糸切痕	縄叩き	3	2？	
47	平瓦	2.0	10Y R 6／1 褐灰	やや良	布目痕・糸切痕	縄叩き	3	破損	瀧元瓦？
48	平瓦	2.4	10Y R 6／4 にぶい橙	やや良	布目痕・糸切痕・指ナデ	縄叩き	3～4	破損	
49	平瓦	1.9	N 4／灰	良	布目痕・糸切痕	縄叩き	3	破損	瀧元瓦
50	平瓦	2.4	7.5Y R 6／6 橙	やや良	布目痕・模骨痕？・糸切痕	格子目叩き	3	破損	
51	平瓦	1.7	10Y R 6／2 灰黄褐	良	布目痕・模骨痕	格子目叩き→ナデ	3	破損	3次被出面出土・瀧元瓦？
52	平瓦	1.7	7.5Y R 5／6 明褐	やや良	布目痕・模骨痕	格子目叩き	2	破損	
53	平瓦	2.3	N 4／灰	良	布目痕・模骨痕	格子目叩き→指ナデ？指紋有	破損	破損	瀧元瓦
54	平瓦	1.9	7.5Y R 7／3 にぶい橙	やや良	布目痕・模骨痕	格子目叩き	破損	破損	3次被出面出土
55	平瓦	2.2	7.5Y R 7／4 にぶい橙	良	布目痕・粘土貼り付け	格子目叩き	2～3	2～3	破損被熱？
56	平瓦	1.6	7.5Y R 6／6 橙	やや不良	布目痕・糸切痕？	格子目叩き	2	1	
57	平瓦	1.5	7.5Y R 6／6 橙	良	布目痕	格子目叩き	破損	3	
58	平瓦	2.5	10Y R 7／3 にぶい黄橙	やや不良	布目痕・模骨痕	平行叩き	3	3	側部に切れ込み状のケズリ
59	平瓦	2.1	7.5Y R 7／6 橙	やや不良	布目痕・模骨痕・糸切痕	平行叩き	3～4	破損	
60	平瓦	3.6	7.5Y R 6／2 灰褐	良	布目痕・模骨痕	平行叩き→ヨコナデ（ハケ？）	3	破損	分厚い・瀧元瓦？2次被出面出土
61	平瓦	2.5	5 Y R 7／8 橙	良	布目痕・模骨痕	平行叩き	3	破損	焼瓦？
62	平瓦	2.3	10Y R 6／2 灰黄褐	良	布目痕・模骨痕	平行叩き	2	破損	瀧元瓦？
63	平瓦	2.8	10Y R 7／4 にぶい黄橙	良	布目痕・模骨痕？	平行叩き	破損	2	
64	平瓦	2.0	7.5Y R 8／4 浅黄橙	良	布目痕・糸切痕	平行叩き→ナデ（？）	3	1	
65	平瓦	2.2	10Y R 7／3 にぶい黄橙	良	布目痕・糸切痕	平行叩き	破損	2	
66	平瓦	3.0	10Y R 4／1 褐灰	不良	布目痕・糸切痕・ハケナデ？	平行叩き	破損	3	二次被熱？
67	平瓦	2.4	7.5Y R 7／6 橙	良	布目痕	平行叩き	3	破損	細い平行刻みの叩き具
68	平瓦	2.3	5 Y 7／1 灰白	やや不良	布目痕	平行叩き	破損	1～2	端部に布目痕
69	平瓦	2.3	2.5Y R 3 淡黄	不良	布目痕	平行叩き・指頭痕	1～2	破損	側部に布目痕
70	平瓦	2.0	2.5Y R 8／3 淡黄	やや良	布目痕	平行叩き	1	破損	側部に布目痕
71	平瓦	2.8	N 4／灰	良	布目痕・ナデ	平行叩き・布目痕	破損	破損	側部と凸面に布目痕・瀧元瓦
72	平瓦	2.3	10Y R 7／4 にぶい橙	やや良	布目痕・模骨痕	ヨコナデ	2～3	2～3	叩き不明
73	平瓦	2.4	5 Y 4／1 灰	やや良	布目痕	ヨコナデ	破損	3	叩き不明

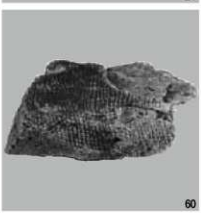

1（文様面）
（瓦当裏面）
2
3
5（正面）
（断面）
4
（底面）
6
7
8

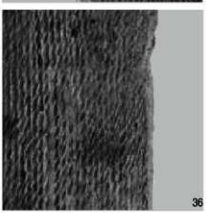

9

24

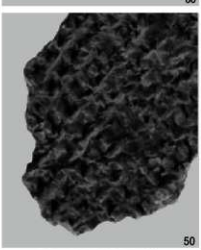


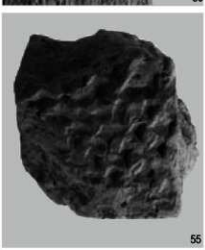

40


60


36

38


50


55

58

67

（5）　金属製品

金属製品の概要　大本願明照殿地点からは、271点の金属製品が出土している。出土金属製品は、銭貨が最も多く124点、続いて鉄釘101点、キセルが13点となっているが、銭貨は遺存状態が悪く、判別不能の製品が多数を占める。ここでは比較的遺存状態の良好な金属製品を抽出して報告する。金属製品の多数は江戸期の土坑および第１・２次の遺構検出面にて出土しており、大多数が江戸期所産のものと想定される。土坑では SK33および SK46から鉄釘・煙管・鉄製接合具など多数の金属製品が出土しているが、これらの土坑では陶磁器も多量に出土しており、江戸時代後期に多量の製品を廃棄した遺構と想定される。

鉄製品の概要　鉄製品としては、多数の釘のほか、鉄鑁や短刀・包丁・接合具などが出土している。釘は全長3.6～15.3cmの様々な長さのものが出土している。釘や接合具などの製品は、本製品に付随するものと推測されるが、廃棄・埋没後に本部が腐食し、金属製品のみ残存したものと考えられる。

銅製品の概要　銅製品は、煙管・銅碗・手鏡・飾り金具などを確認している。煙管は雁首・吸口が各数点出土しているが、本部は残存しない。雁首部に「本大佛」や花文の線刻が施される製品が出土している（第33図－43,44）。エックス線透過撮影により、手鏡に五弁の花文が装飾されていることを確認できた（第33図－54）。

出土銭貨の概要　銭名が判明できた銭貨57枚のうち、約４割が江戸時代の寛永通寶であった。中世の古銭は北宋銭の景徳元寶・祥符元寶・天禧通寶・皇宋通寶・元豊通寶・紹聖元寶、明銭の洪武通寶・永楽通寶が出土している。また、煙管の雁首を潰した雁首銭２枚も出土している。

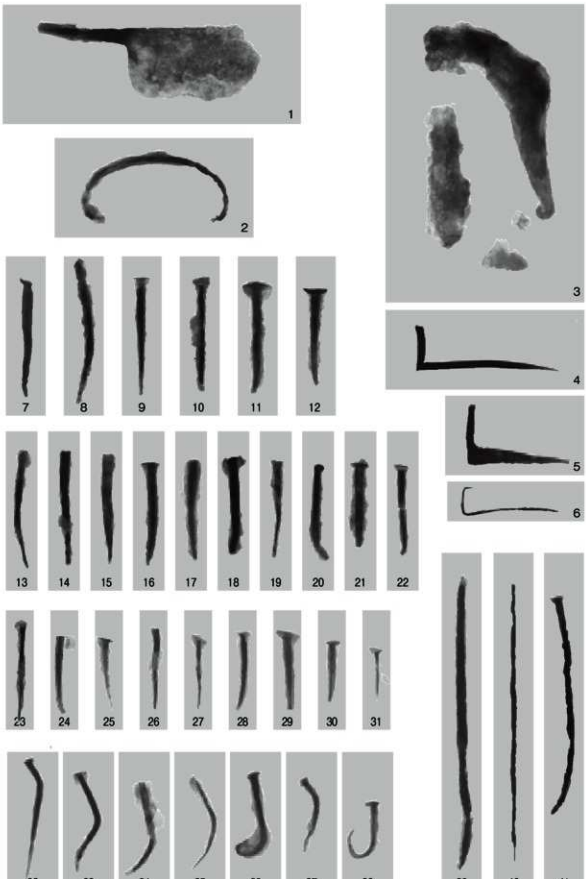
◎大本願明照殿地点　出土金属製品（第32図）

No.	遺物名	出土遺構	材質	法量（mm） 全長	最大厚	最大幅	重量（g）	整理No.	備考
1	包丁	SK40	鉄	147.0	5.0	46.0	46.04	47	
2	鑁手	SK40	鉄	94.0	7.0	40.0	22.14	257	
3	鉄鑁片	SD01	鉄	145.0	7.0	30.0	105.70	103	
4	接合具	1次検出面	鉄	90.0	9.0	28.0	16.26	3	
5	接合具	SK46	鉄	70.0	3.0	40.0	16.65	254	
6	接合具	SK46	鉄	55.0	3.0	5.0	3.25	250	
7	鉄釘	3次検出面	鉄	85.0	18.0		22.07	39	
8	鉄釘	SK35	鉄	93.0	8.0		11.19	227	
9	鉄釘	SK33	鉄	85.0	10.0	15.0	10.40	179	
10	鉄釘	SK40	鉄	75.0	7.0	8.0	10.00	50	
11	鉄釘	2次検出面	鉄	70.0	12.0	21.0	16.96	217	
12	鉄釘	SK46	鉄	60.0	7.0	16.0	8.69	243	
13	鉄釘	SK46	鉄	76.0	1.0		7.15	241	
14	鉄釘	SK46	鉄	72.0	4.0	8.5	9.39	91	
15	鉄釘	SK40	鉄	70.0	8.0		6.83	52	
16	鉄釘	SK33	鉄	66.0	14.0		8.96	32	
17	鉄釘	3次検出面	鉄	65.0	12.0		11.20	209	
18	鉄釘	SK46	鉄	63.0	15.0		15.44	90	
19	鉄釘	SK45	鉄	61.0	8.0		8.19	238	
20	鉄釘	SK46	鉄	60.0	14.0		9.04	78	
21	鉄釘	SK33	鉄	55.0	13.0		10.61	30	
22	鉄釘	2次検出面	鉄	58.0	10.0		5.41	28	
23	鉄釘	SK33	鉄	65.0	5.0		4.83	182	
24	鉄釘	SD01	鉄	50.0	6.0		5.31	39	
25	鉄釘	SD01	鉄	48.0	14.0		3.19	24	
26	鉄釘	SK46	鉄	50.0	6.0		4.3	82	
27	鉄釘	SK46	鉄	50.0	14.0		2.98	85	
28	鉄釘	SK47	鉄	53.0	8.0		6.00	87	
29	鉄釘	SK33	鉄	52.0	7.0	11.0	8.58	184	
30	鉄釘	2次検出面	鉄	39.0	6.0	10.0	4.03	218	
31	鉄釘	SK46	鉄	36.0	1.0		1.32	244	
32	鉄釘	SK40	鉄	90.0	7.0		9.42	51	
33	鉄釘	SK46	鉄	65.0	5.0	14.0	7.78	240	
34	鉄釘	3次検出面	鉄	62.0	15.0		9.46	208	
35	鉄釘	SK46	鉄	60.0	12.0		4.52	81	
36	鉄釘	2次検出面	鉄	55.0	9.0	25.0	15.52	222	
37	鉄釘	SK33	鉄	50.0	11.0		4.21	35	
38	鉄釘	SK02	鉄	40.0	11.0		4.06	167	
39	鉄釘	SK31	鉄	148.0	6.0		19.92	214	
40	鉄釘	2次検出面	鉄	153.0	16.0		20.64	220	
41	鉄釘	2次検出面	鉄	1.2	11.0		16.45	127	

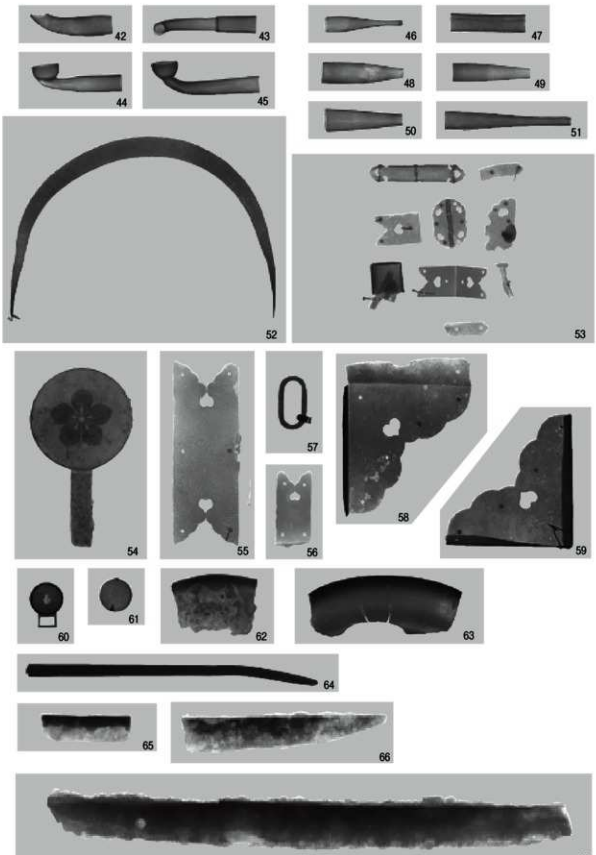
◎大本願明照殿地点　出土金属製品（第33図）

No.	遺物名	出土遺構	材質	法量（mm） 全長	最大厚	最大幅	重量（g）	整理No.	備考
42	煙管　雁首	SN02	銅	43.0	0.5	10.5	5.69	100	
43	煙管　雁首	SK46	銅	60.0	7.0	11.0	8.71	75	「本大佛」線刻あり
44	煙管　雁首	SK46	銅	50.0	0.7	13.5	5.63	146	花文の線刻あり
45	煙管　雁首	SK46	銅	65.0	10.0	10.0	10.48	246	
46	煙管　吸口	SD01	銅	41.5	6.5	9.0	2.72	104	
47	銅管	2次検出面	銅	40.0	1.5	10.0	10.58	125	(煙管一部か)
48	煙管　吸口	SK33	銅	43.0	11.5		3.76	189	
49	煙管　吸口	SK33	銅	45.0	10.0		4.21	188	
50	煙管　吸口	SK46	銅	41.0	6.5	12.0	5.29	145	
51	煙管　吸口	SK46	銅	66.0	0.5	10.0	7.00	74	
52	鉄鑁　鑁手	SD05	鉄	140.0	2.0	11.0	33.66	135	
53	飾り金具11片	SK25	銅	41.0	0.5	18.0	29.82	144	
54	手鏡	SK45	銅	95.0	3.0	55.0	32.68	236	
55	飾り金具	3次検出面	銅	97.0	6.5	35.0	16.73	204	
56	飾り金具	3次検出面	銅	44.0	0.5	21.0	4.86	205	
57	飾り金具	3次検出面	銅	28.5	1.5	3.0	2.79	206	
58	飾り金具	3次検出面	銅	70.0	6.5	15.0	27.13	203	
59	飾り金具	3次検出面	銅	70.0	0.5	16.0	26.19	202	
60	飾り金具	SK40	銅	28.5	5.0	13.0	3.76	60	
61	飾り金具か	SK33	銅	13.0	1.0		1.83	191	
62	銅梔片	4次検出面	銅	47.0	1.5	30.0	10.67	270	
63	銅梔　片	SK23	銅	82.0	3.0	35.0	18.25	61	
64	不明銅製品	SK40	銅	155.0	3.0	7.0	19.17	57	
65	不明品小刀か	SK46	鉄	50.0	4.0	15.0	9.68	253	
66	鉄鑁　刀物片	SK22	鉄	121.0	5.0	21.0	26.99	114	
67	短刀	2次検出面	鉄	275.0	1.0	27.0	216.73	115	

※第32・33・34図はエックス線透過写真

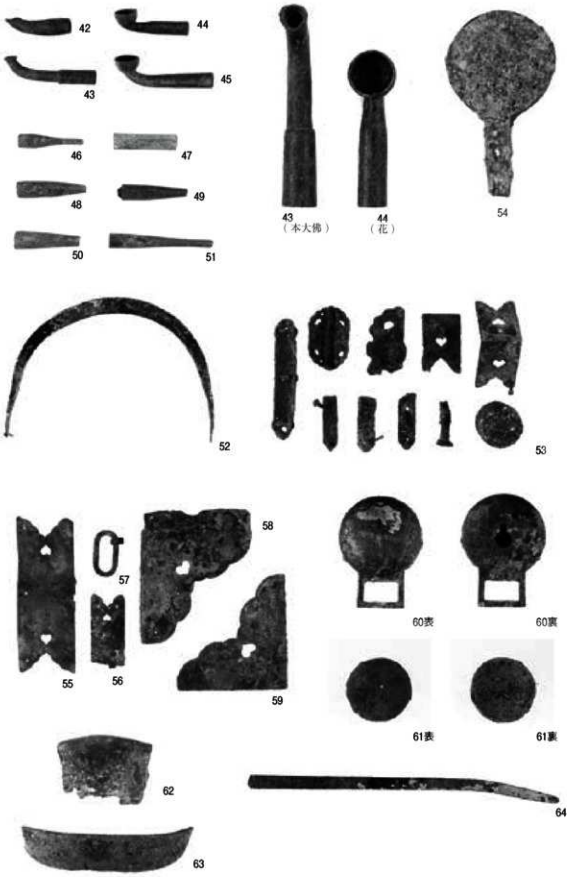


第32図　大本願明照殿地点出土金属製品（S ≒1/2）

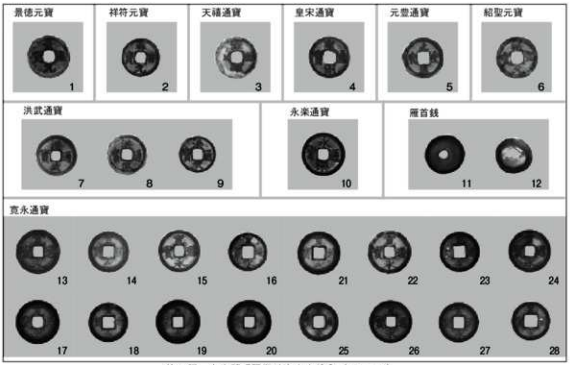


第33図　大本願明照殿地点出土金属製品（S ≒1/2）

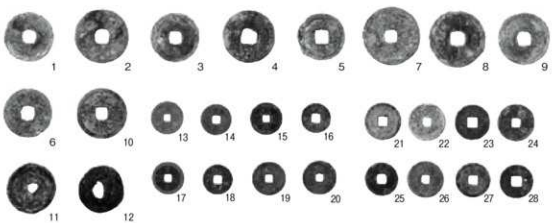
大本願明照殿地点　出土金属製品



大本願明照殿地点　出土金属製品



第34図　大本顔明照殿地点出土銭貨（S ≒1/2）



◎大本顔明照殿地点　出土銭貨

遺物No.	遺物名	材質	出土位置	法量（mm） 直径	厚	大厚	重量（g）	鋳造 国	年	西暦	備考
1	銅銭「景德元寶」	銅	S004	24.0	1.0		2.92	北宋	景德元年	1004	
2	銅銭「祥符元宝」	銅	SE01	22.0	1.3		2.51	北宋	大中祥符元年	1008	
3	銅銭「天禧二寶」	銅	S004	24.0	1.0		2.30	北宋	天禧年間	1017～	
4	銅銭「皇宋通寶」（真）	銅	3次検出面	24.0	7.0		3.10	北宋	至元2年	1039	
5	銅銭「元豊通寶」（真）	銅	S004	23.0	0.5		2.88	北宋	元豊元年	1078	
6	銅銭「紹聖元寶」（真）	銅	SK21	24.0	1.0		3.22	北宋	紹聖元年	1094	
7	銅銭「洪武通寶」	銅	3次検出面	23.5	1.0		3.86	明	洪武元年	1368	
8	銅銭「洪武通寶」	銅	S004	23.0	1.5		3.05	明	洪武元年	1368	
9	銅銭「洪武通寶」	銅	S004	21.0	0.5		1.94	明	洪武元年	1368	
10	銅銭「永樂通寶」	銅？	3次検出面	25.0	1.0		2.83	日本	天正15年頃	1587	
11	雁首銭	銅	2次検出面	22.5	2.5		4.55				
12	雁首銭	銅	S005	21.0	1.5		2.43				
13	銅銭「寛永通寶」	銅	2次検出面	25.0	1.5		3.59	日本	明暦2年	1656	香谷銭
14	銅銭「寛永通寶」	銅	2次検出面	23.0	1.0		3.09	日本	元禄13年	1700	萩原銭（草点水龍水）
15	銅銭「寛永通寶」	銅	S004	24.0	1.0		2.81	日本	寛永12年	1635	水戸銭
16	銅銭「寛永通寶」	銅	SK46	22.0	0.7		1.78	日本	寛保元年	1741	低寛無背（一之瀬）
17	銅銭「寛永通寶」	銅	SK46	25.0	1.3		4.09	日本	享保13年	1728	大阪難波銭
18	銅銭「寛永通寶」	銅	SE01	22.0	1.0		1.95	日本	元文4年	1739	男永（吉田島）
19	銅銭「寛永通寶」	銅	2次検出面	25.0	1.0		3.05	日本	寛文8年	1668	島屋文
20	銅銭「寛永通寶」	銅	2次検出面	25.0	1.0		3.72	日本	寛文8年	1668	島屋文
21	銅銭「寛永通寶」	銅	SP13	25.0	1.0		2.13	日本			
22	銅銭「寛永通寶」	銅	2次検出面	25.0	1.5		2.81	日本			
23	銅銭「寛永通寶」	銅	SD05	23.0	1.0		2.54	日本			
24	銅銭「寛永通寶」	銅	SK46	24.0	1.0		3.31	日本			
25	銅銭「寛永通寶」	銅	SK23	22.0	1.0		1.77	日本			
26	銅銭「寛永通寶」	銅	1次検出面	24.0	1.5		3.35	日本			
27	銅銭「寛永通寶」	銅	SK45	22.5	1.0		2.81	日本			
28	銅銭「寛永通寶」	銅	SK40	22.0	0.5		1.92	日本			

（6） 石製品

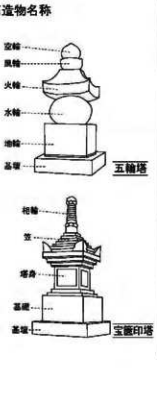
出土石製品の概要　大本願明照殿地点からは、五輪塔、宝篋印塔、板碑など373点の石製品が出土している。そのうち８割以上の318点は五輪塔であり、宝篋印塔25点、石臼13点、板碑11点、不明６点となっている。五輪塔は仏教のいう宇宙を構成する要素として空・風・火・水・地の五輪を現した石造物であり、古代末から中世まで供養塔として造立された。宝篋印塔は相輪・笠・塔身・基礎・基壇からなる石造物であり、五輪塔に比べ直線的な塔形である。石製品の多数は中世の信仰対象物であるが、本調査区では全て江戸期の土坑や溝跡などから出土しており、廃棄もしくは建築資材として転用されたものと考えられる。五輪塔・宝篋印塔の刻銘は地輪および基礎に造塔趣旨、造立年月日を記すものが数点出土している。

種別	部位	石材 安山岩（青目）	安山岩（赤目）	凝灰岩	計
五輪塔（318）	空風輪	32	10	2	44
	火輪	63	24	3	90
	水輪	56	19	5	80
	地輪	71	27	5	103
	火水輪	1			1
宝篋印塔（25）	相輪	7	1		8
	笠	4			4
	塔身	8			8
	基礎	5			5
板碑		10	1		11
石臼		10	3		13
不明		5	1		6
総計		272	86	15	373

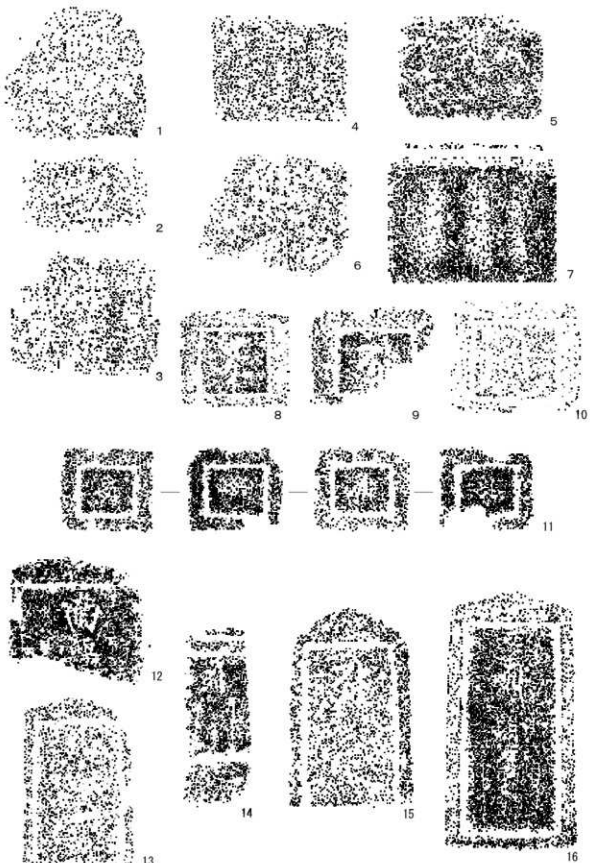
石製品の石材　出土した石製品の石材は95％以上が安山岩である。僅かに裾花凝灰岩製の石製品も15点程確認されたが、全て五輪塔である。宝篋印塔は、製造において細かい加工や記銘を行うため、同じ安山岩でも比較的良質のものを選定している傾向がある。安山岩は現在でも西長野郷路山、若槻砦山などに露頭しているが、中世段階での石材産出地は不明である。

板碑の概要　板碑は、頂部を三角形に成形した板状の一枚石の正面に、信仰対象や造塔趣旨、造立年月日などを刻んだ石塔である。形状は側面・背面を平らに成形し、正面を長方形に一段彫り窪める在地現のものが多数だが、１点のみ頭部に二条線を刻み、基部にホゾを有する板碑が出土している（図34－14）。造立年が解読不能であるが、在地型の初期形状の可能性もあり、今後の課題としたい。また石造物の造立趣旨としては、「逆修」（生前に自分の死後のための供養をしておくこと）や、同忌供養の「十三年忌」と記されたものが確認されている。

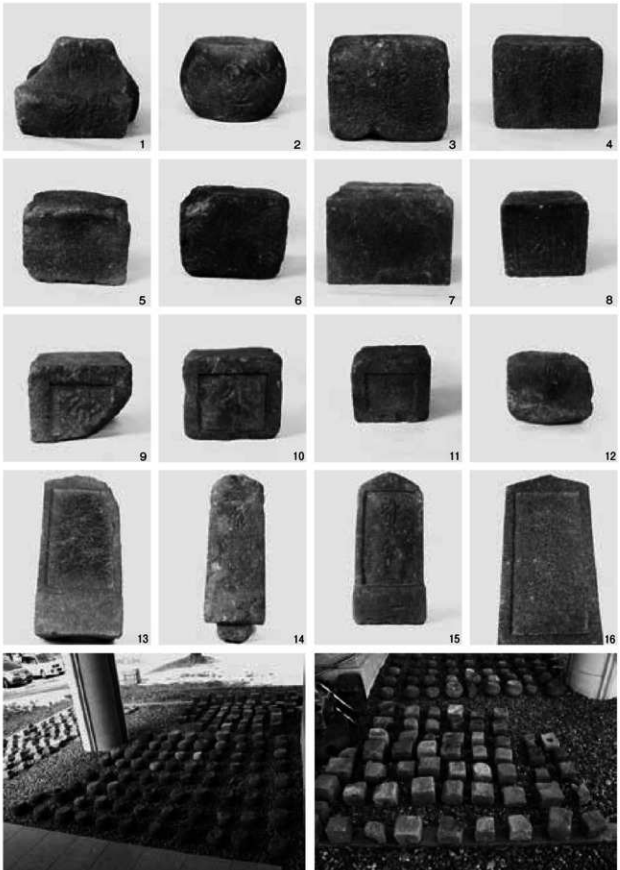
●石造物名称



番号	石製品内容 種別	部位・形状	造立年	石材	寸法（cm） タテ	ヨコ1	ヨコ2	備考
1	五輪塔	火輪		安山岩（青目）	18.5	12.0	26.5	記銘「阿弥」
2	五輪塔	水輪		安山岩（青目）	21.5	20.5	29.2	記銘「梵」
3	五輪塔	地輪	永正13年（1516）	安山岩（青目）	19.0	24.0	24.0	記銘「永正十三天 [illegible] 逆修 [illegible]」
4	五輪塔	地輪	永正5年（1508）	安山岩（青目）	17.0	22.0	22.0	記銘「永正五天 [illegible] 十二月十八日」
5	五輪塔	地輪		安山岩（青目）	17.0	23.0	23.0	種子（南方梵行門）
6	五輪塔	地輪		安山岩（青目）	20.5	25.0	25.0	記銘「[illegible] 門 [illegible] □」
7	宝篋印塔	基礎	永享5年（1433）	安山岩（青目）	19.0	27.0	27.0	記銘「永享五年 [illegible] 門 [illegible] 廿月十二日」
8	宝篋印塔	塔身		安山岩（青目）	15.5	17.5	17.0	四面に種子（金剛界四方仏）
9	宝篋印塔	塔身		安山岩（青目）	15.7	20.0	19.5	一面に種子（阿弥陀如来）
10	宝篋印塔	塔身		安山岩（青目）	18.0	21.0	20.5	一面に種子（阿弥陀如来）
11	宝篋印塔	塔身		安山岩（青目）	13.0	14.5	15.0	四面に種子（金剛界四方仏）
12	板碑			安山岩（青目）	(20.0)	22.5	8.0	記銘「種種一 [illegible] 子供大俱」
13	板碑			安山岩（赤目）	37.0	17.5	9.0	記銘「（阿弥陀三尊種字） 天文二年 [illegible] 道 [illegible] 門 九月十八日」
14	板碑			安山岩（青目）	35.5	12.0	10.5	記銘「（阿弥陀三尊種字） 永 [illegible] 天 [illegible] 門 [illegible] 十月 □ 日」
15	板碑		文明16年（1484）	安山岩（青目）	42.0	20.5	15.0	記銘「（阿弥陀一尊種字） 文明十六天 [illegible] 一 [illegible] 月廿三日」
16	板碑		永正3年（1506）	安山岩（青目）	54.0	21.0	14.0	記銘「（阿弥陀一尊種字） 永三年 [illegible] 貴心 [illegible]（[illegible]） 永正三天十月一日」



第34図　大本顕明照殿地点　出土石製品（S≒1/6）



出土した五輪塔（水輪）

出土した五輪塔（地輪）・宝篋印塔（塔身・基礎）

○出土石製品　観察表

番号	石製品内容		石材	寸法（cm）			備考
	種別	部位・形状		タテ	ヨコ1	ヨコ2	
1	五輪塔	空風輪	安山岩（青目）	15.0	15.0	12.5	
2	五輪塔	空風輪	安山岩（青目）	16.0	13.0	12.0	
3	五輪塔	空風輪	安山岩（青目）	16.0	14.0	13.0	
4	五輪塔	空風輪	安山岩（赤目）	16.5	(13.0)	(13.0)	一部欠損
5	五輪塔	空風輪	安山岩（青目）	17.0	13.5	12.0	
6	五輪塔	空風輪	安山岩（青目）	17.0	14.0	12.0	
7	五輪塔	空風輪	安山岩（青目）	17.0	12.5	11.0	
8	五輪塔	空風輪	安山岩（青目）	17.0	13.5	12.0	
9	五輪塔	空風輪	安山岩（青目）	17.5	13.5	13.5	
10	五輪塔	空風輪	安山岩（赤目）	17.5	(14.5)	(13.0)	一部欠損
11	五輪塔	空風輪	安山岩（青目）	17.5	15.0	14.5	
12	五輪塔	空風輪	安山岩（赤目）	17.5	14.5	12.0	
13	五輪塔	空風輪	安山岩（青目）	18.0	16.0	14.0	
14	五輪塔	空風輪	安山岩（青目）	18.0	16.0	15.0	
15	五輪塔	空風輪	安山岩（赤目）	18.5	(15.0)	(14.0)	一部欠損
16	五輪塔	空風輪	安山岩（青目）	18.5	13.5	12.0	
17	五輪塔	空風輪	安山岩（赤目）	19.0	16.0	14.0	
18	五輪塔	空風輪	安山岩（青目）	19.0	18.5	17.0	
19	五輪塔	空風輪	安山岩（赤目）	19.5	15.5	13.0	
20	五輪塔	空風輪	安山岩（青目）	19.5	16.0	15.5	
21	五輪塔	空風輪	安山岩（青目）	19.5	17.5	16.0	
22	五輪塔	空風輪	安山岩（青目）	20.0	17.5	15.5	
23	五輪塔	空風輪	安山岩（青目）	20.0	15.5	13.5	
24	五輪塔	空風輪	安山岩（青目）	20.0	16.5	14.5	
25	五輪塔	空風輪	安山岩（青目）	21.0	16.0	13.5	
26	五輪塔	空風輪	安山岩（赤目）	21.0	17.0	15.0	
27	五輪塔	空風輪	安山岩（青目）	21.0	17.0	16.0	
28	五輪塔	空風輪	安山岩（青目）	21.0	14.5	(13.5)	一部欠損
29	五輪塔	空風輪	安山岩（青目）	21.0	15.0	(13.5)	一部欠損
30	五輪塔	空風輪	安山岩（赤目）	21.0	(12.0)	(13.0)	一部欠損
31	五輪塔	空風輪	安山岩（青目）	22.0	17.5	16.5	
32	五輪塔	空風輪	安山岩（青目）	22.0	(16.5)	(15.0)	一部欠損
33	五輪塔	空風輪	安山岩（青目）	22.5	16.5	15.5	
34	五輪塔	空風輪	安山岩（青目）	23.5	(18.5)	(14.5)	一部欠損
35	五輪塔	空風輪	安山岩（青目）	23.5	17.5	17.0	
36	五輪塔	空風輪	安山岩（赤目）	25.5	(22.5)	20.0	一部欠損
37	五輪塔	空風輪	安山岩（青目）	(15.5)	(12.0)	(13.0)	一部欠損
38	五輪塔	空風輪	安山岩（青目）	(16.0)	(15.0)	15.5	一部欠損
39	五輪塔	空風輪	郡花凝灰岩系	(16.5)	(14.0)	(10.5)	一部欠損
40	五輪塔	空風輪	郡花凝灰岩系	(16.5)	(14.5)	(13.0)	一部欠損
41	五輪塔	空風輪	安山岩（赤目）	(17.0)	(16.0)	(14.0)	一部欠損
42	五輪塔	空風輪	安山岩（青目）	(18.5)	(15.0)	(14.0)	一部欠損
43	五輪塔	空風輪	安山岩（青目）	(18.5)	14.0	13.0	一部欠損
44	五輪塔	空風輪	安山岩（青目）	(20.5)	(15.5)	(14.5)	一部欠損
45	五輪塔	火輪	安山岩（青目）	9.0	8.0	18.5	
46	五輪塔	火輪	安山岩（赤目）	9.2	7.6	17.0	
47	五輪塔	火輪	安山岩（青目）	9.5	9.0	17.5	
48	五輪塔	火輪	安山岩（青目）	9.7	9.5	22.0	窪み有り
49	五輪塔	火輪	安山岩（青目）	10.0	7.5	17.2	窪み有り
50	五輪塔	火輪	安山岩（赤目）	10.2	8.0	19.8	
51	五輪塔	火輪	安山岩（青目）	10.5	9.5	22.0	
52	五輪塔	火輪	安山岩（青目）	10.5	8.5	20.0	
53	五輪塔	火輪	安山岩（赤目）	10.5	11.5	21.0	
54	五輪塔	火輪	安山岩（青目）	10.7	8.8	21.0	
55	五輪塔	火輪	安山岩（青目）	11.0	(7.0)	19.0	一部欠損
56	五輪塔	火輪	安山岩（赤目）	11.0	9.0	20.5	
57	五輪塔	火輪	安山岩（青目）	11.0	(5.0)	17.7	一部欠損
58	五輪塔	火輪	安山岩（青目）	11.2	(8.5)	19.5	一部欠損
59	五輪塔	火輪	安山岩（青目）	11.2	9.2	21.0	
60	五輪塔	火輪	安山岩（青目）	11.2	9.5	23.0	
61	五輪塔	火輪	安山岩（青目）	11.3	10.0	21.8	
62	五輪塔	火輪	郡花凝灰岩系	11.5	9.5	22.3	
63	五輪塔	火輪	安山岩（青目）	11.7	9.5	23.0	
64	五輪塔	火輪	安山岩（赤目）	11.7	8.0	19.0	
65	五輪塔	火輪	安山岩（青目）	11.7	9.5	19.0	
66	五輪塔	火輪	安山岩（青目）	11.8	11.5	12.5	
67	五輪塔	火輪	安山岩（赤目）	11.8	10.0	20.0	窪み有り
68	五輪塔	火輪	安山岩（青目）	11.8	10.5	21.3	
69	五輪塔	火輪	安山岩（青目）	11.8	(10.5)	23.5	一部欠損
70	五輪塔	火輪	安山岩（青目）	11.8	9.7	19.5	
71	五輪塔	火輪	安山岩（青目）	12.0	9.2	22.5	
72	五輪塔	火輪	安山岩（青目）	12.0	7.8	18.5	
73	五輪塔	火輪	安山岩（赤目）	12.2	10.0	22.8	
74	五輪塔	火輪	安山岩（赤目）	12.2	8.5	20.0	
75	五輪塔	火輪	安山岩（青目）	12.2	12.0	24.7	
76	五輪塔	火輪	安山岩（青目）	12.3	9.3	20.5	
77	五輪塔	火輪	安山岩（赤目）	12.3	10.2	22.8	
78	五輪塔	火輪	安山岩（青目）	12.5	11.3	22.5	
79	五輪塔	火輪	安山岩（赤目）	12.5	8.8	20.5	
80	五輪塔	火輪	安山岩（赤目）	12.5	11.0	22.5	
81	五輪塔	火輪	安山岩（青目）	12.5	10.0	22.0	
82	五輪塔	火輪	安山岩（赤目）	12.5	10.5	25.0	
83	五輪塔	火輪	安山岩（青目）	12.5	10.0	22.5	
84	五輪塔	火輪	安山岩（赤目）	12.5	11.0	22.5	
85	五輪塔	火輪	安山岩（青目）	12.8	11.3	21.8	
86	五輪塔	火輪	安山岩（青目）	13.0	11.5	24.5	
87	五輪塔	火輪	安山岩（青目）	13.0	(15.0)	25.0	一部欠損
88	五輪塔	火輪	安山岩（青目）	13.2	(8.0)	20.5	一部欠損
89	五輪塔	火輪	安山岩（青目）	13.3	10.0	21.0	
90	五輪塔	火輪	安山岩（青目）	13.3	10.5	26.0	
91	五輪塔	火輪	安山岩（青目）	13.5	10.0	22.0	
92	五輪塔	火輪	安山岩（青目）	13.5	9.8	25.0	
93	五輪塔	火輪	安山岩（青目）	13.5	8.8	22.5	
94	五輪塔	火輪	安山岩（赤目）	13.5	9.5	21.5	
95	五輪塔	火輪	安山岩（青目）	13.7	10.5	25.0	
96	五輪塔	火輪	安山岩（青目）	13.7	10.5	21.8	
97	五輪塔	火輪	安山岩（青目）	13.7	10.3	26.0	
98	五輪塔	火輪	安山岩（青目）	13.8	10.0	22.5	
99	五輪塔	火輪	安山岩（青目）	14.0	(9.0)	23.0	一部欠損
100	五輪塔	火輪	安山岩（赤目）	14.0	11.0	23.5	
101	五輪塔	火輪	安山岩（青目）	14.0	7.8	23.3	
102	五輪塔	火輪	安山岩（青目）	14.2	9.8	25.8	
103	五輪塔	火輪	安山岩（青目）	14.5	10.8	24.5	
104	五輪塔	火輪	郡花凝灰岩系	14.5	(8.5)	26.0	一部欠損
105	五輪塔	火輪	安山岩（青目）	14.5	10.0	23.2	
106	五輪塔	火輪	安山岩（青目）	14.5	10.5	(15.0)	一部欠損
107	五輪塔	火輪	安山岩（青目）	14.5	12.0	28.0	
108	五輪塔	火輪	安山岩（赤目）	14.8	10.5	21.0	
109	五輪塔	火輪	安山岩（青目）	14.8	11.0	26.0	
110	五輪塔	火輪	安山岩（青目）	15.0	10.0	24.5	
111	五輪塔	火輪	安山岩（赤目）	15.0	10.5	22.5	
112	五輪塔	火輪	安山岩（青目）	15.3	11.5	22.5	
113	五輪塔	火輪	郡花凝灰岩系	15.3	9.5	21.5	
114	五輪塔	火輪	安山岩（青目）	15.5	11.0	24.0	
115	五輪塔	火輪	安山岩（青目）	15.5	11.0	25.5	
116	五輪塔	火輪	安山岩（赤目）	15.5	10.0	26.5	
117	五輪塔	火輪	安山岩（青目）	15.5	8.5	23.0	
118	五輪塔	火輪	安山岩（青目）	16.0	11.0	26.0	風化
119	五輪塔	火輪	安山岩（赤目）	16.3	12.5	25.5	
120	五輪塔	火輪	安山岩（赤目）	16.5	11.0	25.5	
121	五輪塔	火輪	安山岩（青目）	16.5	11.5	24.2	
122	五輪塔	火輪	安山岩（赤目）	16.5	10.0	24.5	

番号	石製品内容		石材	寸法（cm）			備考
	種別	部位・形状		タテ	ヨコ1	ヨコ2	
123	五輪塔	火輪	安山岩（青目）	16.6	11.5	27.5	
124	五輪塔	火輪	安山岩（青目）	16.8	11.5	26.5	
125	五輪塔	火輪	安山岩（青目）	17.0	12.5	28.0	窪み有り
126	五輪塔	火輪	安山岩（青目）	17.5	11.0	25.8	
127	五輪塔	火輪	安山岩（赤目）	17.8	11.0	21.5	
128	五輪塔	火輪	安山岩（青目）	18.5	10.0	25.0	墨書「阿」
129	五輪塔	火輪	安山岩（青目）	19.3	12.5	28.0	
130	五輪塔	火輪	安山岩（青目）	20.0	11.0	30.0	
131	五輪塔	火輪	安山岩（青目）	20.3	13.0	28.2	
132	五輪塔	火輪	安山岩（赤目）	22.0	10.0	23.0	
133	五輪塔	火輪	安山岩（赤目）	24.0	13.2	30.5	
134 135	五輪塔	火水輪	安山岩（青目）	火 10.0 水 10.0	8.0 13.5	(18.0) 14.0	火水輪同一個体
136	五輪塔	水輪	安山岩（青目）	10.5	14.6	22.0	
137	五輪塔	水輪	安山岩（赤目）	10.5	13.6	16.9	
138	五輪塔	水輪	輝花凝灰岩系	11.0	9.6	19.5	
139	五輪塔	水輪	安山岩（赤目）	11.3	11.5	18.6	
140	五輪塔	水輪	安山岩（赤目）	11.4	12.5	22.3	
141	五輪塔	水輪	安山岩（青目）	11.8	15.5	21.7	
142	五輪塔	水輪	安山岩（青目）	11.8	12.0	19.4	被熱有り
143	五輪塔	水輪	安山岩（青目）	12.0	12.5	16.3	
144	五輪塔	水輪	安山岩（赤目）	12.0	12.5	19.4	
145	五輪塔	水輪	安山岩（青目）	12.0	14.0	19.5	
146	五輪塔	水輪	安山岩（赤目）	12.1	14.7	22.6	窪み有り
147	五輪塔	水輪	安山岩（赤目）	12.1	14.4	18.8	
148	五輪塔	水輪	安山岩（青目）	12.3	15.9	19.0	
149	五輪塔	水輪	安山岩（赤目）	12.3	16.5	21.5	
150	五輪塔	水輪	安山岩（青目）	12.3	11.0	19.5	
151	五輪塔	水輪	安山岩（青目）	12.4	11.5	21.0	
152	五輪塔	水輪	輝花凝灰岩系	12.5	14.0	19.8	
153	五輪塔	水輪	安山岩（青目）	12.5	15.0	21.0	
154	五輪塔	水輪	安山岩（青目）	12.6	9.5	20.3	
155	五輪塔	水輪	安山岩（青目）	12.8	13.5	19.5	
156	五輪塔	水輪	安山岩（青目）	12.8	11.0	19.0	
157	五輪塔	水輪	安山岩（青目）	13.0	14.8	21.0	
158	五輪塔	水輪	安山岩（青目）	13.2	14.8	20.0	
159	五輪塔	水輪	安山岩（赤目）	13.4	18.0	21.2	
160	五輪塔	水輪	輝花凝灰岩系	13.4	13.5	19.0	
161	五輪塔	水輪	安山岩（赤目）	13.4	15.0	20.0	窪み有り
162	五輪塔	水輪	輝花凝灰岩系	13.6	12.0	19.5	
163	五輪塔	水輪	安山岩（青目）	13.6	15.5	22.6	
164	五輪塔	水輪	安山岩（青目）	13.6	12.3	18.0	
165	五輪塔	水輪	安山岩（青目）	13.6	17.0	20.8	
166	五輪塔	水輪	安山岩（青目）	14.0	12.4	19.8	
167	五輪塔	水輪	安山岩（青目）	14.2	14.5	21.2	
168	五輪塔	水輪	安山岩（青目）	14.2	10.0	20.5	窪み有り
169	五輪塔	水輪	安山岩（赤目）	14.2	16.5	21.0	
170	五輪塔	水輪	安山岩（青目）	14.2	13.6	23.0	
171	五輪塔	水輪	安山岩（青目）	14.4	17.0	23.5	窪み有り
172	五輪塔	水輪	安山岩（青目）	14.5	18.0	23.2	
173	五輪塔	水輪	安山岩（赤目）	14.5	14.0	16.4	
174	五輪塔	水輪	安山岩（青目）	14.6	14.0	22.8	
175	五輪塔	水輪	安山岩（青目）	14.6	18.4	24.0	
176	五輪塔	水輪	安山岩（青目）	14.8	12.6	22.5	
177	五輪塔	水輪	安山岩（赤目）	14.8	14.5	23.7	
178	五輪塔	水輪	安山岩（青目）	14.8	18.3	22.8	
179	五輪塔	水輪	安山岩（青目）	15.0	15.3	23.8	
180	五輪塔	水輪	安山岩（青目）	15.0	13.7	22.7	
181	五輪塔	水輪	安山岩（青目）	15.6	14.0	22.2	
182	五輪塔	水輪	安山岩（赤目）	15.6	14.6	18.1	
183	五輪塔	水輪	安山岩（青目）	15.7	13.6	23.0	

番号	石製品内容		石材	寸法（cm）			備考
	種別	部位・形状		タテ	ヨコ1	ヨコ2	
184	五輪塔	水輪	安山岩（青目）	15.8	14.5	22.5	
185	五輪塔	水輪	安山岩（青目）	15.8	16.3	21.8	
186	五輪塔	水輪	安山岩（青目）	16.0	15.5	22.5	
187	五輪塔	水輪	安山岩（青目）	16.0	15.8	22.0	窪み有り
188	五輪塔	水輪	安山岩（青目）	16.2	15.7	25.1	
189	五輪塔	水輪	安山岩（青目）	16.3	15.8	23.7	
190	五輪塔	水輪	安山岩（青目）	16.5	13.0	24.8	
191	五輪塔	水輪	安山岩（赤目）	16.5	16.0	23.6	
192	五輪塔	水輪	安山岩（青目）	16.5	24.5	17.3	
193	五輪塔	水輪	安山岩（青目）	16.6	12.4	21.5	窪み有り
194	五輪塔	水輪	安山岩（青目）	16.6	14.0	22.5	
195	五輪塔	水輪	安山岩（青目）	16.7	19.0	24.9	
196	五輪塔	水輪	安山岩（赤目）	16.7	17.0	24.5	
197	五輪塔	水輪	輝花凝灰岩系	16.8	13.0	21.0	
198	五輪塔	水輪	安山岩（青目）	16.8	15.0	24.8	
199	五輪塔	水輪	安山岩（赤目）	16.8	19.0	26.5	窪み有り
200	五輪塔	水輪	安山岩（青目）	17.2	15.5	21.3	
201	五輪塔	水輪	安山岩（青目）	17.3	15.5	23.0	
202	五輪塔	水輪	安山岩（青目）	17.3	15.0	22.5	
203	五輪塔	水輪	安山岩（青目）	17.6	14.0	21.5	
204	五輪塔	水輪	安山岩（青目）	18.1	13.0	23.2	
205	五輪塔	水輪	安山岩（青目）	18.2	14.5	21.8	
206	五輪塔	水輪	安山岩（青目）	18.2	12.8	19.5	
207	五輪塔	水輪	安山岩（青目）	18.2	19.0	26.0	窪み有り
208	五輪塔	水輪	安山岩（赤目）	18.5	(18.3)	(30.0)	一部欠損
209	五輪塔	水輪	安山岩（赤目）	19.2	16.5	26.2	
210	五輪塔	水輪	安山岩（赤目）	19.6	18.9	30.0	窪み有り
211	五輪塔	水輪	安山岩（赤目）	19.8	22.0	28.3	
212	五輪塔	水輪	安山岩（赤目）	20.3	17.7	26.8	
213	五輪塔	水輪	安山岩（青目）	21.5	21.4	30.0	
214	五輪塔	水輪	安山岩（青目）	16.5	16.0	(11.8)	窪み有り
215	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	8.0	23.5	23.0	
216	五輪塔	地輪	輝花凝灰岩系	9.0	30.0	31.0	基壇？
217	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	9.5	21.5	19.0	
218	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	10.0	27.5	26.5	
219	五輪塔	地輪	安山岩（赤目）	10.5	14.0	14.0	
220	五輪塔	地輪	安山岩（赤目）	10.5	21.0	21.0	
221	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	10.5	15.0	(17.0)	一部欠損
222	五輪塔	地輪	安山岩（赤目）	11.0	14.0	13.0	
223	五輪塔	地輪	安山岩（赤目）	11.0	16.0	16.5	被熱？
224	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	11.0	29.5	29.0	基壇？
225	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	11.0	30.5	30.5	窪み有り
226	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	11.5	26.0	25.5	
227	五輪塔	地輪	安山岩（赤目）	12.0	17.5	17.0	
228	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	12.3	18.5	19.5	
229	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	12.5	19.5	20.5	
230	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	12.5	32.5	32.5	基壇？
231	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	13.0	15.5	14.0	
232	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	13.0	17.5	17.5	
233	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	13.0	22.0	(13.0)	孔有り 298と接合
234	五輪塔	地輪	安山岩（赤目）	13.0	19.0	20.0	
235	五輪塔	地輪	安山岩（赤目）	13.0	15.0	17.0	
236	五輪塔	地輪	安山岩（赤目）	13.5	19.0	19.0	
237	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	13.5	18.0	18.0	墨書有り
238	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	13.5	20.0	19.0	
239	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	14.0	20.0	20.0	
240	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	14.0	19.0	18.5	
241	五輪塔	地輪	安山岩（赤目）	14.0	18.0	16.5	
242	五輪塔	地輪	安山岩（赤目）	14.0	17.5	15.0	
243	五輪塔	地輪	安山岩（赤目）	14.0	25.5	21.0	
244	五輪塔	地輪	安山岩（赤目）	14.0	19.5	18.5	

番号	石製品内容		石材	寸法（cm）			備考
	種別	部位・形状		タテ	ヨコ1	ヨコ2	
245	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	14.0	19.0	17.0	
246	五輪塔	地輪	安山岩（赤目）	14.0	23.0	22.5	
247	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	14.0	19.0	19.0	
248	五輪塔	地輪	安山岩（赤目）	14.5	21.0	20.0	
249	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	14.5	18.5	18.0	
250	五輪塔	地輪	粗花凝灰岩系	14.5	18.5	19.5	
251	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	14.5	22.0	21.0	
252	五輪塔	地輪	安山岩（赤目）	15.0	19.0	19.0	
253	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	15.0	16.5	16.0	
254	五輪塔	地輪	粗花凝灰岩系	15.0	20.0	20.0	
255	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	15.0	20.5	20.0	墨書有り
256	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	15.0	19.0	18.0	
257	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	15.0	20.5	20.5	
258	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	15.0	19.0	19.0	
259	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	15.0	17.0	17.5	
260	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	15.0	16.0	18.5	
261	五輪塔	地輪	安山岩（赤目）	15.0	19.3	20.0	
262	五輪塔	地輪	安山岩（赤目）	15.0	24.0	23.5	被熱
263	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	15.0	20.5	20.5	
264	五輪塔	地輪	安山岩（赤目）	15.0	19.0	19.0	
265	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	15.0	21.0	23.0	
266	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	15.0	21.0	20.0	
267	五輪塔	地輪	粗花凝灰岩系	15.2	24.0	24.7	被熱・歪み有り
268	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	15.5	19.0	19.0	
269	五輪塔	地輪	安山岩（赤目）	15.5	19.3	19.5	
270	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	15.5	22.0	21.5	
271	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	15.5	21.0	21.0	被熱
272	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	16.0	16.5	16.0	
273	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	16.0	24.0	24.0	
274	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	16.0	22.0	21.5	記銘有り
275	五輪塔	地輪	安山岩（赤目）	16.0	20.5	21.0	
276	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	16.0	34.5	25.5	
277	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	16.0	20.5	21.0	
278	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	16.0	20.0	19.5	被熱？
279	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	16.0	20.0	21.0	
280	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	16.5	18.5	19.5	
281	五輪塔	地輪	安山岩（赤目）	16.5	20.0	21.0	
282	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	16.5	21.0	20.5	
283	五輪塔	地輪	安山岩（赤目）	16.5	20.0	20.5	
284	五輪塔	地輪	粗花凝灰岩系	16.5	19.5	17.0	
285	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	17.0	23.0	23.0	被熱
286	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	17.0	20.5	20.5	墨書有り
287	五輪塔	地輪	安山岩（赤目）	17.0	21.0	21.5	
288	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	17.0	22.0	22.0	墨書有り
289	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	17.0	21.0	20.5	
290	五輪塔	地輪	安山岩（赤目）	17.0	23.5	(21.5)	一部欠損
291	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	17.0	26.5	25.5	
292	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	18.0	20.5	20.5	
293	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	18.0	23.0	23.0	
294	五輪塔	地輪	安山岩（赤目）	18.5	22.0	20.0	
295	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	18.5	22.0	21.5	
296	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	19.0	23.0	23.0	
297	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	19.0	21.0	20.5	
298	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	19.0	26.5	27.0	
299	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	19.0	24.0	24.0	記銘有り
300	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	19.0	25.0	25.0	
301	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	19.0	21.0	22.5	
302	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	19.0	22.5	21.0	
303	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	20.5	24.0	24.0	
304	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	21.0	25.0	24.0	
305	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	21.0	27.0	27.0	

番号	石製品内容		石材	寸法（cm）			備考
	種別	部位・形状		タテ	ヨコ1	ヨコ2	
306	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	23.0	20.7	21.3	
307	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	(13.0)	(17.0)	(15.0)	一部欠損
308	五輪塔	地輪	安山岩（赤目）	(13.0)	17.0	16.0	被熱　一部欠損
309	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	(13.0)	(15.0)	(17.0)	一部欠損
310	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	(14.5)	(19.5)	(13.5)	一部欠損
311	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	(14.5)	(14.5)	21.5	240と接合
312	五輪塔	地輪	安山岩（赤目）	(14.5)	19.0	20.0	一部欠損
313	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	(16.3)	21.5	21.0	一部欠損
314	宝篋印塔	相輪	安山岩（青目）	(9.5)	10.0		一部欠損
315	宝篋印塔	相輪	安山岩（青目）	(11.5)	(9.0)		一部欠損
316	宝篋印塔	相輪	安山岩（青目）	(13.0)	(14.0)		一部欠損
317	宝篋印塔	相輪	安山岩（青目）	(13.5)	9.0		一部欠損
318	宝篋印塔	相輪	安山岩（青目）	(15.5)	10.5		一部欠損
319	宝篋印塔	相輪	安山岩（青目）	(18.0)	(16.5)		歪み　一部欠損
320	宝篋印塔	相輪	安山岩（青目）	(29.0)	15.0		一部欠損
321	宝篋印塔	相輪	安山岩（赤目）	24.5	11.0		
322	宝篋印塔	傘	安山岩（青目）	19.2	12.8	25.5	孔有り
323	宝篋印塔	傘	安山岩（青目）	19.5	12.0	27.0	孔有り
324	宝篋印塔	傘	安山岩（青目）	20.5	(9.5)	27.0	孔有り
325	宝篋印塔	傘	安山岩（青目）	22.3	10.3	26.3	孔有り
326	宝篋印塔	塔身	安山岩（青目）	13.5	15.0	15.0	
327	宝篋印塔	塔身	安山岩（青目）	15.0	16.0	16.0	
328	宝篋印塔	塔身	安山岩（青目）	15.0	16.0	16.0	梵字
329	宝篋印塔	塔身	安山岩（青目）	18.0	20.5	20.0	梵字
330	宝篋印塔	基礎	安山岩（青目）	15.0	20.5	20.0	
331	宝篋印塔	基礎	安山岩（青目）	19.0	26.0	(23.5)	孔あり　一部欠損
332	宝篋印塔	基礎	安山岩（青目）	19.0	25.0	25.0	
333	宝篋印塔	基礎	安山岩（青目）	19.0	27.0	27.0	記銘有り
334	宝篋印塔	基礎	安山岩（青目）	25.0	23.0	23.0	
335	石臼		安山岩（青目）	7.0	(11.0)		一部欠損
336	石臼		安山岩（青目）	8.0	(12.0)		一部欠損
337	石臼		安山岩（青目）	9.0	29.0		
338	石臼		安山岩（青目）	10.0	(13.0)		一部欠損
339	石臼		安山岩（青目）	10.0	(12.0)		一部欠損
340	石臼		安山岩（青目）	10.5	(16.0)		一部欠損
341	石臼		安山岩（赤目）	11.0	34.0		
342	石臼		安山岩（青目）	11.0	31.0		
343	石臼		安山岩（青目）	11.0	32.0		
344	石臼		安山岩（赤目）	12.0	35.0		
345	石臼		安山岩（青目）	13.0	34.0		
346	石臼		安山岩（赤目）	15.0	(16.0)		一部欠損
347	石臼		安山岩（青目）	16.0	34.0		
348	板碑		安山岩（青目）	(25.0)	20.0	18.0	記銘有り　一部欠損
349	板碑		安山岩（青目）	(24.5)	23.0	14.0	記銘有り　一部欠損
350	板碑		安山岩（青目）	21.0	15.5	7.0	記銘有り
351	板碑		安山岩（青目）	38.5	18.5	10.5	記銘有り
352	板碑		安山岩（青目）	39.0	18.0	9.0	記銘有り
353	板碑		安山岩（青目）	43.0	22.0	17.0	記銘有り
354	不明		安山岩（赤目）	9.0	27.0	18.5	孔有り（基礎？）
355	不明		安山岩（青目）	15.0	(15.0)		一部欠損
356	不明		安山岩（青目）				不明
357	不明		安山岩（青目）				不明
358	不明		安山岩（青目）				不明
359	不明		安山岩（青目）				不明

※1　寸法の（　）は現存部分のみの長さを示す
※2　寸法の「タテ」は製品の高さを示し、「ヨコ1」・「ヨコ2」は部位ごとに異なる。以下「各部位（ヨコ1：ヨコ2）」。
・五輪塔　空風輪（空輪最大径：風輪最大径）、火輪（上部辺：下部辺）、水輪（上部径：最大径）、地輪（前部辺：側部辺）
・宝篋印塔　相輪（中央部径：底部径）、笠（上部辺：下部辺）、塔身（前部辺：側武辺）、基礎（前部辺：側部辺）
・板碑　（前部辺：側部辺）

第２節　仁王門東地点の調査概要

（１）調査の方法

調査は、個人住宅建設に伴う地階建設部分約60㎡を対象として、記録保存のための遺構確認を行った。発掘調査においては、重層的に埋没する各時代の遺構をそれぞれ検出するため、近代造成土層を除去した後に、堆積土層に応じて検出面を設定し、２次にわたる掘り下げと遺構確認を実施した。また、適宜調査坑（トレンチ）を設定し、土層の堆積状況や石積状況の確認につとめた。

（２）基本層序

現地表下60～100㎝は、近現代の造成によって改変されているが、それより下層は江戸期以前の堆積土層を確認することができる。堆積土層からは大きく３段階の盛土を確認できる（第35図）。盛土１上からは、江戸期の土坑が複数検出されており、中世末から近世の造成と想定される。なお、調査区東部の石積１は、現在も露出しており裏盛土包含の出土遺物から明治期以降の築造と判断される。盛土２は、調査区南部にて検出された石積２に伴う盛土造成であり、盛土上面にて礎石状遺構や土坑などを確認しており、出土遺物から中世の造成と想定される。盛土３は、多量の炭化物・焼土を含む土層であり、石積３にて土留がなされている。盛土３に包含される遺物は、盛土２の包含遺物とほぼ同時期に比定されるため、一連の造成と想定される。盛土３および石積３の下部は固く締まった粘性土（盛土４）で整地されており、その下層には植物遺存体を含む自然堆積土が検出された。

（３）調査概要

調査地は現仁王門東にあたり、古代から近世にかけての造成跡を確認することができた。中でも、調査区南部にて検出された石積および礎石上遺構は、中世善光寺に関連する遺構であり、当時をうかがい知る貴重な資料となった。以下にその概要を示す。

第１次遺構検出面は、近現代造成土層を除去し、盛土１上面にて遺構検出を行った。ＳＮ01は幅50㎝内外の石列であり、Ｌ字状を呈する。南東部に径２ｍ程の集石部があり、一連の遺構と想定される。遺構北部は五輪塔を転用して敷き詰めている状況が確認されるが、南部は小礫が集中しているのみであり判然としない。土蔵等の建物基礎と推定される。ＳＤ01はＳＮ01の西側に並行して走る溝跡であり、雨落ち等建物に関連する遺構と想定される。その他数箇所の土坑を検出したが、用途は不明である。

第２次遺構検出面では、２石の礎石状遺構と焼土集中区、その他複数の土坑、小穴を確認した。２石の礎石状遺構は東西に並んでおり南に面を有するが、柱跡等は確認できない。その他の土坑や小穴からは礎石状遺構や石積みとの関連性は伺えず、具体的な建物跡等を推測することは難しい。調査区北側で検出された焼土集中区は、多量の焼土･炭化物を含む火災後の整地層であり、南に傾斜して堆積している。調査区中央部のトレンチにより、石積３まで連続して堆積している状況が確認された。

調査区南西部で検出された石積２は、幅50～80㎝の石材を並べたものであり、造成に伴う盛土の土留めの役割を果たしたものと想定される。盛土に包含される遺物が10～14世紀の所産と想定されることから、ほぼ同様の時期の造成跡と推定される。調査区外の西側には延長するものと考えられるが、東側については近代石積の影響により不明である。石積の並びは、調査区東側の現在の敷地割とほぼ一致しており、中世段階での造成が現在に踏襲されている可能性もある。また、３トレンチ・４トレンチにて確認した石積３も、焼土・炭化物を多量に含む土層（盛土３）の土留めの役割を想定されるが、盛土２により埋没していること、また盛土２と盛土３の出土遺

物において明確な時期差が見られないことなどから石積２とほぼ同時期に造成されたものと推測される。ただし、中世期に度重なる火災によって幾度の造成・改変が行われた可能性もあり、短期間のうちに実施された別の造成の可能性も推察される。

（4）出土遺物概要

本調査区では、２次に渡って遺構検出を行ったが、土器・陶磁器の多くは１次検出面および江戸期の土坑から出土したものであり、18世紀末以降の江戸後期から明治初期の所産である。ただし、多量の焼土・炭化物を含む盛土３からは多量の瓦・壁土・土製品とあわせて古代から中世所産の土器・陶磁器が数点出土している。出土遺物は小片であるが、遺存状態の比較的良好なものを可能な限り図化することとした。

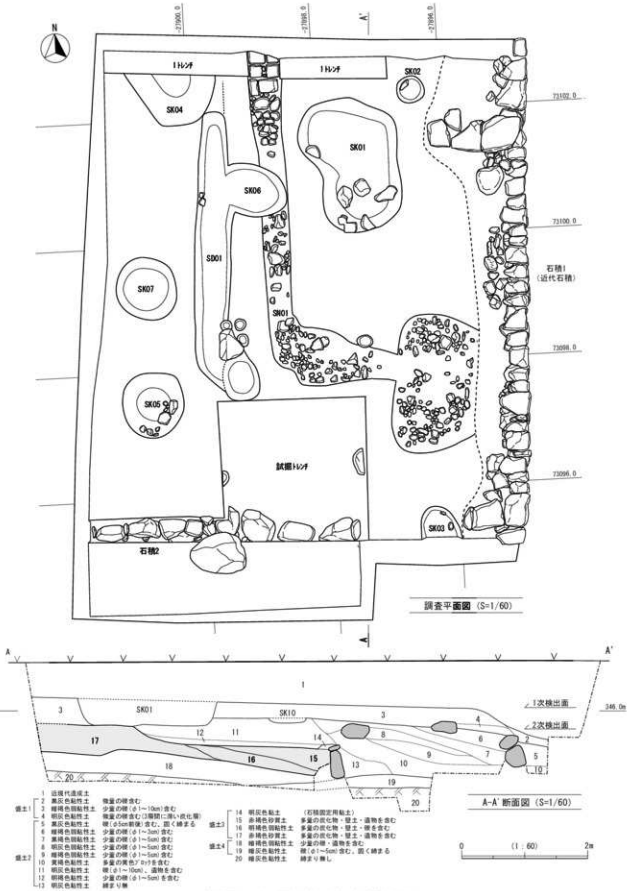
第１次遺構検出面および土坑から出土した陶磁器は、肥前系染付が多数を占める。器種は小皿・小碗・猪口などが出土しており、蛇の目凹型高台の小皿や、広東形碗、外面青磁内面染付の小碗が数点含まれる。出土した肥前系磁器の多数は18世紀後半以降の所産と想定される。

盛土２・３・４は、一部古墳時代の高坏や須恵器蓋坏が混入しているものの、10～14世紀の所産と想定される土器質の坏・碗、灰釉陶器が複数出土している。盛土２・３・４内において中世後期以降の遺物が確認されないことから、中世前期での盛土造成と推察される。また、盛土３からは表面を赤色塗布された多量の土製品破片が出土している。土製品胎土には多量のスサが混入しており、塑像の可能性もあるが、外面の文様からはかなり大型の製品と想定されるが、全体像は不確かである。同層に含まれる多量の瓦や壁土などは、被災した建物跡と想定されるため、同建物に関連する製品と考えられるが、現時点ではいつの時期のどの建物にあたるかを特定することは困難である。今後の課題としたい。

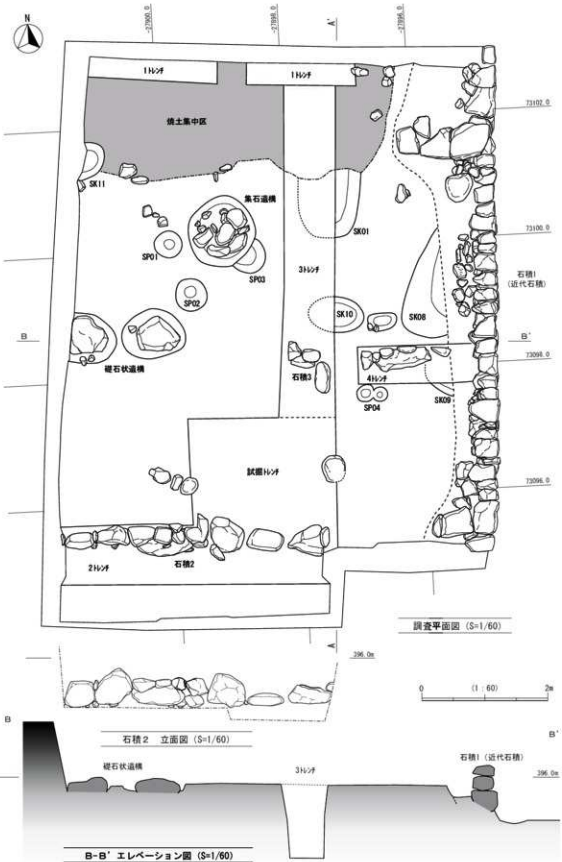
（5）調査成果

本調査地点では、中世初期に造成されたと考えられる盛土と石積、礎石状遺構が確認された。盛土内からは、多量の炭化物や瓦、壁土、土製品などが出土している。出土した炭化物は、自然科学分析によりヒノキ科ヒノキ属のサワラであることが判明した。サワラは、栩葺の板材として江戸期までの北信地方で一般的に利用されていたことが知られており、現在桧皮葺きの善光寺本堂も江戸期は栩葺であったとされる（三門は平成の修理により栩葺となる）。また針葉樹は、建物の構造材としても広く利用されることから、これらの多量の炭化材は、検出された造成以前に、調査地周辺に存在した建物の構造材であり、火災によって焼失したことがうかがえる。また、炭化材の放射性炭素年代測定では、出土遺物の推定年代とほぼ同時期の11～12世紀という結果が示されている（自然科学分析の詳細については「第Ⅳ章自然科学分析」（P.120～）にて記載）。このことから、古代末から中世前期において、火災後に整地・造成を行い、また新たな建物基礎を据え直した様子が浮かび上がる。

古代末から中世前期の善光寺では、治承３年（1179）、および文永５年（1268）に焼失したと記載される。火災後の再建に関する詳細は不明であるため、今回の火災層がこの両者のどちらにあたるのかは特定できないが、鎌倉期の善光寺再建に伴う貴重な遺構であることは間違いがない。検出された造成の時期や範囲、また建物の規模や配置など、課題は山積しているが、中世善光寺における一つの手掛かりととらえたい。



第35図　仁王門東地点　第１次遺構検出面



第36図　仁王門東地点　第２次遺構検出面

第１次遺構検出面全景

第２次遺構検出面全景

石積２検出状況

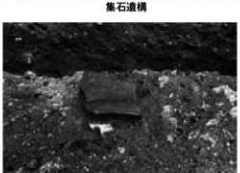
礎石状遺構

3トレンチ

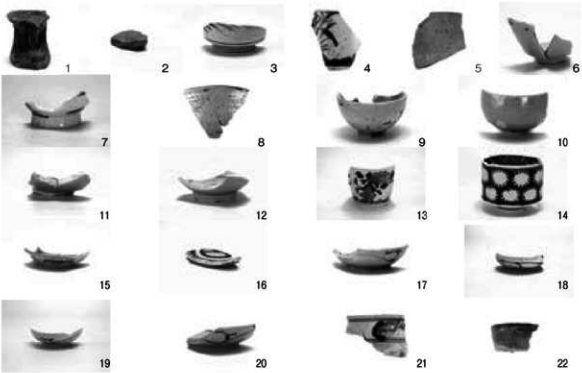
4トレンチ

集石遺構

石積前巨石

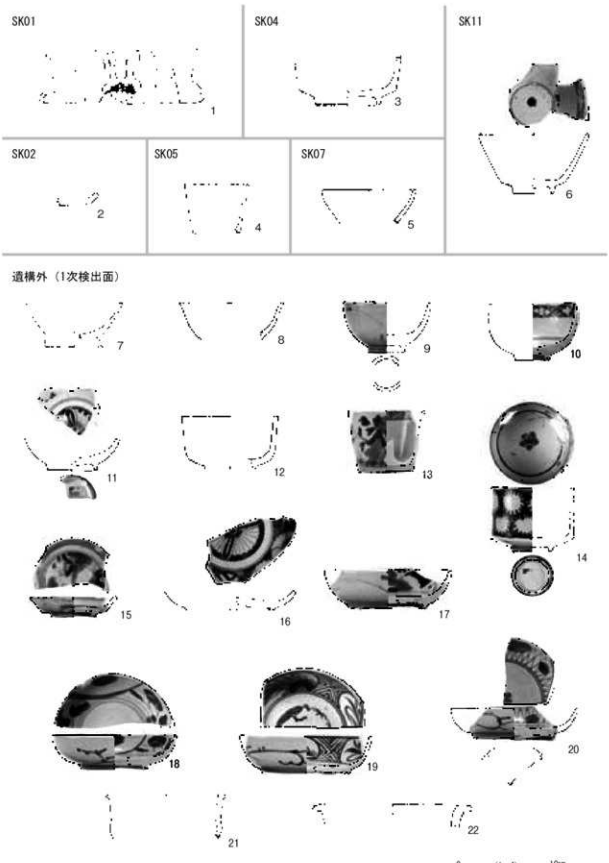


軒平瓦出土状況

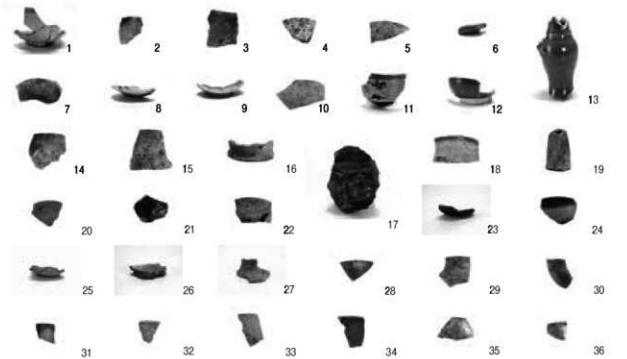


番号	遺構名	種別	器種	形状	胎土色・特徴	成形	釉薬	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面文様・特徴	内面文様・特徴	見込文様・特徴	高台文様・特徴	推定産地	推定年代	備考
2	SK02	土器	小皿	平丸形	橙灰色	—	なし	—	—	—	ナデ	ナデ	—	—	在地系	不明	
3	SK04	磁器	丸入	筒形	灰白色	轆轤	鉄釉・透明釉	—	—	6.9	草文	—	—	畳付露胎	肥前系	1780～1860	
4	SK05	磁器	碗口	筒形	灰白色	轆轤	鉄釉・透明釉	6.6	—	—	草文	四方襷	—	—	肥前系	1780～1860	
5	SK07	土器	鉢	—	赤褐色	轆轤	なし	9.8	—	—	轆轤ナデ	轆轤ナデ	—	—	不明	不明	
6	SK11	磁器	中鉢	杯形	灰色	轆轤	鉄釉・透明釉・青磁	11.5	6.3	4.4	青磁釉	四方襷	丸文	畳付露胎	肥前系	1780～1860	
7	1次検出面	磁器	中鉢	広東形	灰白色	轆轤	鉄釉・透明釉	—	—	6.2	山水文？	—	—	畳付露胎	肥前系	1780～1820	
8	1次検出面	陶器	小鉢	湯呑形	灰白色	轆轤	長石釉	11.0	—	—	施釉	施釉	—	—	瀬戸・美濃系	1780～1820	口縁部片
9	1次検出面	磁器	小鉢	丸形	灰色	轆轤	鉄釉・透明釉	9.4	5.4	3.8	草花文	—	—	畳付露胎・記号	肥前系	1780～1860	
10	1次検出面	磁器	小鉢	丸形	明灰色	轆轤	鉄釉・透明釉・青磁	9.0	5.9	3.7	青磁釉	四方襷	—	畳付釉付着	肥前系	1780～1860	
11	1次検出面	磁器	小鉢	丸形	明灰色	轆轤	鉄釉・透明釉・青磁	—	—	5.2	青磁釉	—	三方銀杏文	畳付露胎	肥前系	1780～1860	
12	1次検出面	磁器	小鉢	丸形	灰白色	轆轤	鉄釉・透明釉・青磁	—	—	4.4	青磁釉	—	五弁花	畳付露胎・記銘	肥前系	1780～1860	
13	1次検出面	磁器	碗口	筒形	灰白色	轆轤	鉄釉・透明釉	8.0	6.5	5.8	草花文	四方襷	五弁花	蛇の目高台	肥前系	1780～1860	
14	1次検出面	磁器	小鉢	筒形	灰白色	轆轤	鉄釉・透明釉	8.8	6.9	4.2	雪輪文	四方襷	五弁花	—	肥前系	1690～1780	
15	1次検出面	磁器	小鉢	鋼鉢形	灰白色	轆轤	鉄釉・透明釉	9.4	2.1	4.7	虫文？	山水文	—	—	肥前系	不明	転熱
16	1次検出面	磁器	鮮鉢	丸形	灰白色	轆轤	鉄釉・透明釉	—	—	9.2	—	—	三方銀杏文	蛇の目高台・蛇籠	肥前系	1780～1860	
17	1次検出面	磁器	鮮鉢	丸形	明灰色	轆轤	鉄釉・透明釉	13.6	4.0	8.0	唐草文	花文	—	畳付釉付着	肥前系	1780～1860	
18	1次検出面	磁器	鮮鉢	丸形	灰色	轆轤	鉄釉・透明釉	13.0	3.5	7.0	唐草文	梅花文	—	畳付露胎	肥前系	1780～1860	
19	1次検出面	磁器	鮮鉢	丸形	灰白色	轆轤	鉄釉・透明釉	13.7	3.9	9.0	唐草文	草文	梅花文	蛇の目高台	肥前系	1780～1860	
20	1次検出面	磁器	鮮鉢	丸形	明灰色	轆轤	鉄釉・透明釉	13.4	3.2	8.4	唐草文	朝日文・梅文	五弁花	畳付露胎	肥前系	1780～1860	
21	1次検出面	磁器	香炉	折返口縁	灰白色	轆轤	鉄釉・透明釉・上絵付	12.6	—	—	上絵付花文	格子文	—	—	肥前系	1780～1860	
22	1次検出面	土器	香炉	折返口縁	褐色	轆轤	なし（瓦質）	16.8	—	—	蓮帯文	—	—	—	不明	不明	

番号	遺構名	種別	形状	胎土色・特徴	釉薬	幅(cm)	残幅(cm)	厚さ(cm)	文様	推定年代	備考
1	SK01	土製品	土錘脚部	黒褐色	なし	—	4.8	4.8	面取脚部中央に2条の沈線、押圧痕目、孔有	不明	

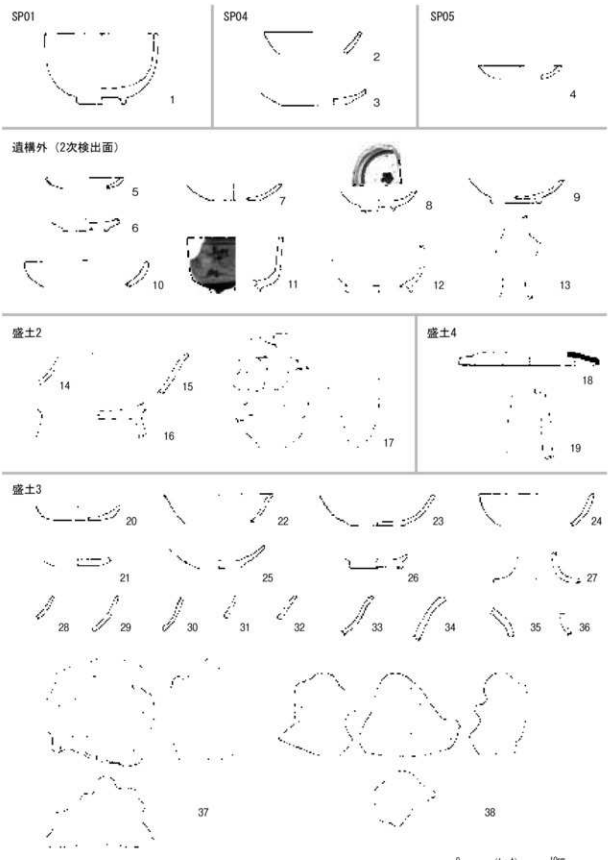


第37図　仁王門東地点　1次検出面出土遺物
（SK01・SK02・SK04・SK05・SK07・SK11・遺構外）



番号	遺構名	層別	器種	形状	胎土色・特徴	成形	釉薬	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面文様・特徴	内面文様・特徴	見込文様・特徴	高台文様・特徴	推定産地	推定年代	備考
1	S P01	撹乱	中碗	丸形	須恵色	無轆	鉄釉・透明釉	12.0	7.4	5.0	草文	—	—	型付撹拌	渡世見系	17C末～18C	
2	S P04	土器	小皿	—	橙色	無轆	なし	5.0	—	—		黒色処理	—	—	在地系	6 C～10C	口縁部片
3	S P04	土器	小皿	—	灰黄色	無轆糸切	なし	—	—	6.8	無轆ナデ	黒色処理	—	回転糸切	在地系	8 C～10C	底部片
4	S P05	土器	小皿	端反形	灰褐色		なし	8.4	—	—	ナデ	ナデ	—	—	在地系	不明	口縁部片
5	2次検出面	土器	小皿		橙色	無轆	なし	8.2	—	—	無轆ナデ	無轆ナデ	—	—	在地系	不明	口縁部片
6	2次検出面	土器	—	—	褐色	無轆	なし	—	—	4.4	無轆ナデ	—	—	回転ヘラ削り	在地系	不明	底部片
7	2次検出面	土器	—	—	灰白色	無轆	なし	—	—	5.4	無轆ナデ	—	—	回転ヘラ削り	在地系	不明	底部片
8	2次検出面	撹乱	小碗	丸形	灰白色	無轆	鉄釉・透明釉	—	—	3.6	草花文	—	五弁花	—	肥前系	17C末～18C	底部片
9	2次検出面	撹乱	中碗	丸形	灰色	無轆	灰釉？	—	—	5.4	胴部まで施釉	施釉	トチン2点付着	—	肥前系	17C末～18C	底部片
10	2次検出面	土器	中皿	丸形	橙色	無轆	なし	13.0	—	—	無轆ナデ	無轆ナデ	—	—	在地系	不明	口縁部片
11	2次検出面	撹乱	中碗	筒形	灰褐色	無轆	鉄釉・透明釉	10.0	—	—	胴部まで施釉	口縁のみ施釉	—	—	肥前系	17C末～18C	底部破片
12	2次検出面	陶器	中瓶		淡黄色	無轆	環境釉	—	—	7.2	施釉	無釉	—	—	瀬戸美濃系	19C中葉	底部片
13	2次検出面	陶器	広口瓶	瓶子形	灰白色	無轆	環境釉	—	—	—	施釉	無釉	—	—	瀬戸美濃系	19C中葉	胴部片
14	遺土2	土器	坏		淡黄色	無轆	なし	—	—	—	無轆ナデ	無轆ナデ	—	—	在地系	不明	口縁部片
15	遺土2	土器	高坏	端反形	灰黄色	無轆	なし	—	—	—	無轆ナデ	無轆ナデ	—	—	在地系	不明	口縁部片
16	遺土2	土器	高坏	脚部	灰黄色	無轆	なし	—	—	—	無轆ナデ	無轆ナデ	—	—	在地系	10C～13C	15之刊一緑係か？
18	遺土4	須恵器	坏蓋		灰白色	無轆	なし	—	—	14.8	無轆ナデ	無轆ナデ	—	—	在地系	9 C～10C	
19	遺土4	土器	高坏	脚部	黄橙色		なし	—	—	—	縦ヘラミガキ	ナデ	—	—	在地系	4 C～5 C	脚部高坏
20	遺土3	土器	小皿	端反形	灰黄色	無轆	なし	8.6	1.5	4.4	無轆ナデ	無轆ナデ	—	ナデ	在地系	12C～14C	
21	遺土3	土器	坏	—	灰褐色	無轆	なし	—	—	4.8	無轆ナデ	無轆ナデ	—	糸切	在地系	10C～13C	2次被熱
22	遺土3	土器	鍋？	端反形	灰黄色	無轆	なし	11.4	—	—	無轆ナデ	無轆ナデ	—	—	在地系	10C～13C	口縁部片
23	遺土3	土器	坏		須恵色	無轆	なし	12.2	3.2	5.7	無轆ナデ	無轆ナデ	—	糸切	在地系	10C～13C	
24	遺土3	土器	鍋	丸形	黒褐色	無轆	なし	12.0	—	—	無轆ナデ	ヘラミガキ	—	—	在地系	11C～13C	口縁部片
25	遺土3	土器	坏		橙色	無轆	なし	—	—	4.6	無轆ナデ	無轆ナデ	—	糸切	在地系	10C～13C	底部片
26	遺土3	土器			灰黄色	無轆	なし	—	—	5.7	無轆ナデ	ヘラミガキ	—	回転ナデ	在地系	11C～12C	底部片
27	遺土3	土器	高坏	脚部	橙色	無轆	なし	—	—	—	縦ヘラミガキ	無轆ナデ	—	—	在地系	3 C～7 C	
28	遺土3	土器	鍋？	丸形	赤褐色	無轆	なし	—	—	—	無轆ナデ	無轆ナデ	—	—	在地系	不明	
29	遺土3	土器	鍋？	端反形	橙色	無轆	なし	—	—	—	無轆ナデ	無轆ナデ	—	—	在地系	不明	
30	遺土3	土器	鍋？	端反形	橙色	無轆	なし	—	—	—	無轆ナデ	無轆ナデ	—	—	在地系	不明	
31	遺土3	土器	鍋？	端反形	灰黄色	無轆	なし	—	—	—	無轆ナデ	無轆ナデ	—	—	在地系	不明	
32	遺土3	土器	鍋？	？	橙色	無轆	なし	—	—	—	無轆ナデ	無轆ナデ	—	—	在地系	不明	
33	遺土3	土器	鍋？	端反形	橙色	無轆	なし	—	—	—	無轆ナデ	無轆ナデ	—	—	在地系	不明	
34	遺土3	土器	？	端反形	褐色	無轆	なし	—	—	—	無轆ナデ	無轆ナデ	—	—	在地系	不明	
35	遺土3	陶器	壺	経部		無轆	灰釉	—	—	—	経灰釉	無釉	—	—	瀬戸美濃系	12C～14C	
36	遺土3	陶器	壺（瓶）	首下部		無轆	灰釉	—	—	—	経灰釉	経灰釉	—	—	瀬戸美濃系	12C～14C	

番号	遺構名	層別	種類	形状	胎土色・特徴	釉薬等	縦幅(cm)	横幅(cm)	厚さ(cm)	文様・特徴	推定年代	備考
17	遺土1	土製品	整像？	不明	黒褐色	一部赤色塗布	—	—	—	文様不明	不明	
37	遺土3	土製品	整像？	不明	橙色・スサ	赤色塗布	—	—	—	花弁文様？	不明	
38	遺土3	土製品	整像？	不明	橙色・スサ	赤色塗布	—	—	—	渦巻状文様	不明	



第38図　仁王門東地点　2次検出面・盛土　出土遺物
（SP01・SP04・SP05・遺構外・盛土2・盛土3・盛土4）

（6）出土瓦の概要

本調査区から出土した古代瓦は、総点数501点・総重量67.56kgで、２次面もしくは２次面造成盛土内からは452点・57.78kgの瓦が出土した。主な種別は、軒丸瓦・軒平瓦・文字瓦・丸瓦・平瓦である。なお、小破片のもので分類できなかったものに関しては、全て不明瓦として扱うこととする。また、凹面凸面の調整・特徴など詳細については観察表を参考にしていただきたい。以下、種別ごとに概要を述べていく。（軒丸瓦の各部名称、丸瓦・平瓦の拓本配置はP.54～57を参照。）

古代瓦出土量

	総点数	総重量（kg）	丸瓦	重量（kg）	平瓦	重量（kg）
１次面	49	9.78	18	1.72	31	8.06
２次面	452	57.78	195	21.78	257	36
計	501	67.56	213	23.5	288	44.06
%	100.0%	100.0%	42.5%	34.8%	57.5%	65.2%

軒丸瓦（第39図１～４）

本調査区は、大本願明照殿地点に比べると調査面積は小さいが、出土した文様瓦は軒丸・軒平共に多岐にわたる。

１は、単弁もしくは複弁の蓮華文である。瓦当部の大半が欠損しており、蓮弁の遺存度も低いことから単弁か複弁かははっきりしない。蓮弁には子葉がなく、簡素な造りである。また、蓮弁の弁先は丸みを帯びず、ヘラのような形状になっている。外区には線鋸歯文とみられる文様帯が存在し、さらに外側には凹線と素文の周縁も存在している。外区と内区の間に圏線はなく、蓮弁と線鋸歯文が繋がっている。現在まで確認されている善光寺境内出土とされる軒丸瓦の中には、線鋸歯文の縁を持つ軒丸瓦は存在しているが、１とは文様構成が異なり、新出の軒丸瓦の可能性がある。

２・３は、巴文軒丸瓦である。２は、文様が起伏に富み、力強い印象を受ける。巴の断面形状は台形で、瓦当の直径は18cmを超える大きさである。巴は右巴で、中心が繋がっている。尾部は伸びず、隣の巴の中頃で終息している。外区の珠文は直径1.5cmと大きく、突出している。裏面には丸瓦との接合痕が残る。３は、小降りな軒丸瓦で、巴は左巴である。文様は全体的に潰れていて迫力に欠ける。巴の尾部は長く伸び、圏線を描くようになっているが、隣の巴の尾部には接続しない。また、裏面には丸瓦との接合痕が残っており、丸瓦自体も小振りなものを使用していたことが分かる。

現在までにも善光寺、あるいは近隣から巴文軒丸瓦が出土したという報告はあるが、その出土地点が不鮮明であり、正確な発掘調査によって巴文軒丸瓦が出土したのは初めてである。

４は、軒丸瓦であるが、文様のほとんどが欠損し、丸瓦との接合面がむき出しになっている。しかし、この剥離のおかげで、瓦当部と丸瓦との接合方法として、丸瓦の端部に刻みを入れていることが判明した。また、残存しているわずかな文様面には、凸（面違）鋸歯文と低い周縁が確認でき、善光寺境内出土と伝えられる軒丸瓦や、牟礼バイパス地点から出土した軒丸瓦の複弁蓮華文に酷似していることが判明した。

軒平瓦（第39図５～７）

出土した軒平瓦は、３点共に別の文様である。

５は、三重弧文軒平瓦である。非常に簡素な造りで、平瓦の狭端部に顎を取り付けず、端部にそのまま工具で

弧文を押し曳いている。顎を取り付けていないため、凸面の格子目叩き具痕が全面的に残り、弧文の下端に若干の凹凸がみられる。

類例として、仁王門を下った大門町に所在する、同じ長野遺跡群西町遺跡からも三重弧文軒平瓦が出土している。西町遺跡出土の重弧文軒平瓦も顎を持たない簡素なもので、５と同様の造りであることから、同時期に製作されたものの可能性が考えられる。この他に、北信地域では、千曲市屋代遺跡群雨宮廃寺・須坂市左願寺廃寺からも重弧文軒平瓦が出土している。

６は、連珠文軒平瓦で、１次面表土除去中に出土したものである。平瓦と瓦当部の半分は欠損している。文様は一段盛り上がった内区の中に、直径1.4cmの珠文を配しており、全部で８つ存在していたものと思われる。また、裏面には平瓦と文様面を接合・調整した際の工具痕もみられる。

７は、均整唐草文軒平瓦である。平瓦が一部欠損しているが、瓦当部は遺存しており、全体的にやや小振りな造りである。文様は、中心に５・６枚の花弁を持った花頭形の飾りを置き、その左右に唐草を展開している。唐草はつながり、上下に子葉を持つ。その先には中心飾りと同様の花頭形の文様が付き、その後唐草は上方向に巻き込みながら終息する。平瓦にみられる凹面の布目痕、凸面の縄叩き具による整形痕など、製作技術は古代瓦の技術を有している点がみられる。

文字瓦（第40図８）

出土した文字瓦は１点のみである。文字は、平瓦の凹面に刻まれており、「十」もしくは記号とも考えられるが、周囲に別の文字が存在していないため、断定はできない。本調査地点から出土した文字瓦は、大本願明照殿地点出土の文字瓦に続いて、新たに確認された資料となった。

丸瓦（第40図９～第41図19）

出土した丸瓦の総点数は213点・23.5kgで、２次面もしくは２次面造成盛土内からは195点・21.78kgが出土している。

９・10は、有段式（玉縁式）丸瓦の破片である。９は玉縁部と丸瓦の一部が残存し、10は玉縁部のみである。出土した丸瓦の中でも明確に有段式であるといえるのは、この２点のみである。通常、古代の丸瓦には２つの種類が存在している。１つは９・10で挙げた有段式、もう１つは丸瓦の狭端部に玉縁を持たない無段式（行基式）である。11は、完形の丸瓦（無段式）で、出土は１次面調査区北壁石敷き遺構の直下である。凸面は釉がかかったように光沢があり、凹面には布の縦じ目が斜めに入っているのが確認できる。12の凹面にも布のとじ目がみられる。14は11と同様に、凸面にやや光沢がある。15は、凹面に糸切り痕が確認できる。17は、凸面の調整が細かく、縦方向のヘラナデが残っている。

丸瓦分類表

	総点数	縄叩き具	格子目叩き具	平行叩き具	ナデ	不明
１次面	18	0	0	0	18	0
２次面	195	7	0	4	180	4
計	213	7	0	4	198	4
%	100.0%	3.3%	0 %	1.9%	93.0%	1.9%

平瓦（第42図20～第44図38）

出土した平瓦の総点数は288点・44.06kgで、２次面もしくは２次面造成盛土内からは257点・36kgが出土して

いる。

20～30は、凸面の整形痕が縄叩き具によるものである。総点数288点のうち、縄叩き具によるものは223点で、約77％を占める。20～23・26は桶巻き造りによるもので、24・25・27～30は一枚造りによるものである。

20・21は、凹面に明瞭な模骨痕が確認できる。23は、凹面に布の縦じ目が確認でき、狭端部と縦じ目の交点には強い指頭圧痕が残る。24の凹面には突起物がみられるが、炭などを含んでいる点から、土が癒着してしまったものと思われる。26は一番遺存度が高い平瓦であるが、１次面出土である。28は、凹面の布目痕が側部付近を除いて横方向のナデによって消されている。29・30は特徴的で、凹面にハケのような工具で調整を加えているのである。前述したように、ナデによって布目痕を消す例はあったが、ハケによって凹面に調整を加える例は今回初めて確認された。31は、凹面に布の端のラインが横に走っており、ラインの上部では布目痕が確認できない。

32・33は凸面の整形痕が格子目叩き具によるもの、34・35は整形痕をナデ消している平瓦である。総点数288点のうち、格子目叩き具によるものは47点・約16％、ナデによるものは13点・約５％を占める。大本願明照殿地点では二番目に多く確認されていた平行叩き具によるものは、わずか４点・約１％余りとその数を減らしている。

36～38は古代の瓦ではなく、中世以降の瓦であると思われる。凹面に布目痕はなく、みな偏平である。ただ、凸面には整形痕が残っており、36は「×（菱形？）」字状叩き具、37・38は「米」字状の叩き具によるものである。

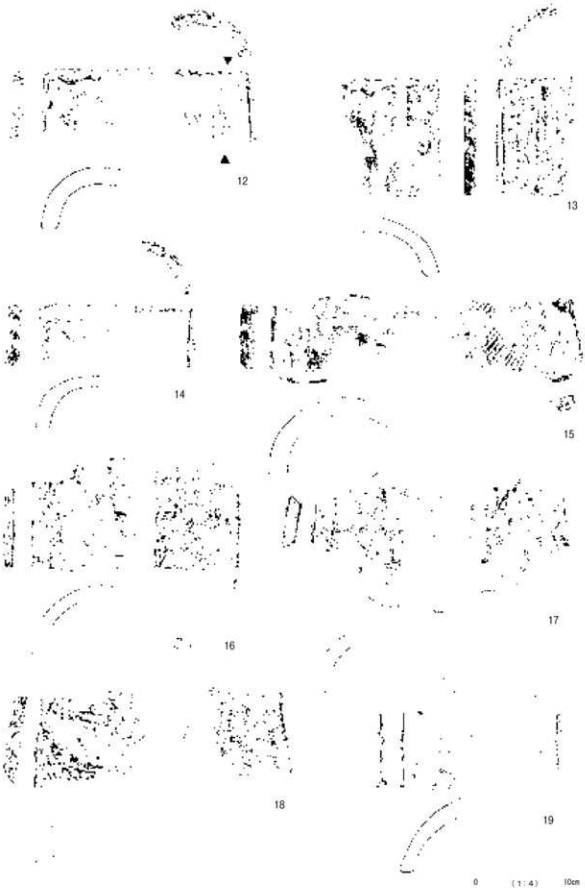
平瓦分類表

	総点数	縄叩き具			格子目叩き具			平行叩き具			ナデ			不明
		桶巻き	一枚	不明	桶巻き	一枚	不明	桶巻き	一枚	不明	桶巻き	一枚	不明	
１次面	31	7	5	11	0	2	2	0	0	0	0	0	3	1
２次面	257	34	64	102	14	8	21	1	0	3	2	3	5	0
計	288	41	69	113	14	10	23	1	0	3	2	3	8	1
		223			47			4			13			1
%	100.0%	77.4%			16.3%			1.4%			4.5%			0.3%

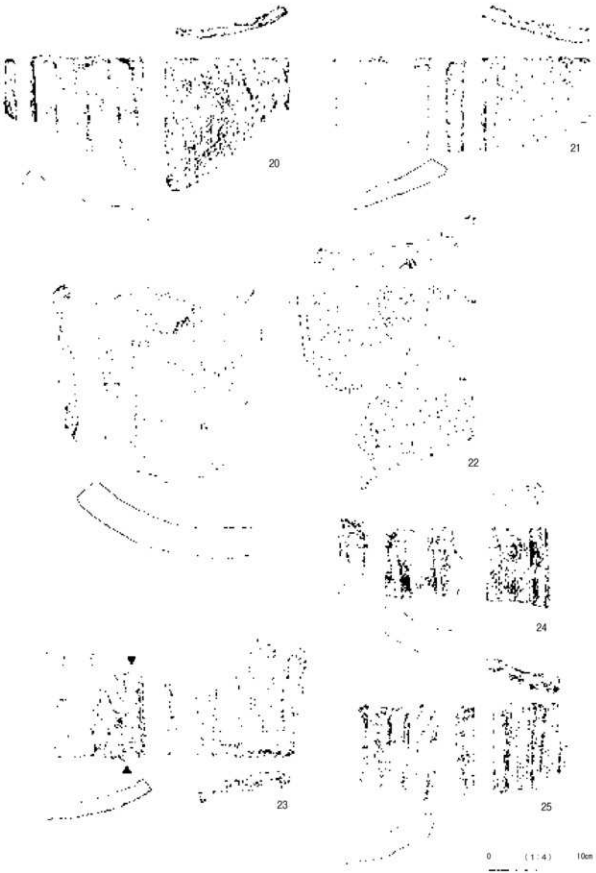
※１　掲載した古代瓦のほとんどは、２次面・２次面造成盛土内から出土したものである。１次面から出土した古代瓦に関しては、遺物観察表の特徴欄に出土地点を示している。

第39図　仁王門東地点出土古代瓦（軒丸瓦・軒平瓦）

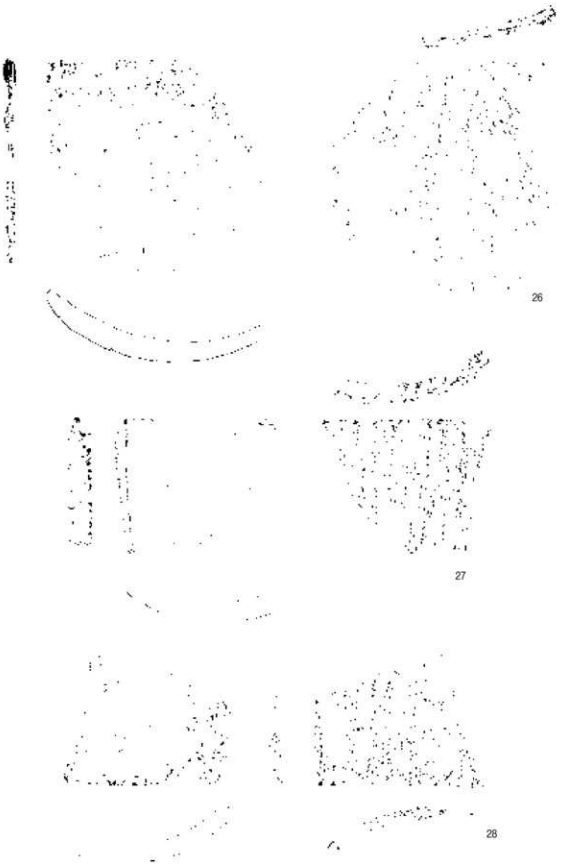
第40図　仁王門東地点出土古代瓦（文字瓦・丸瓦）



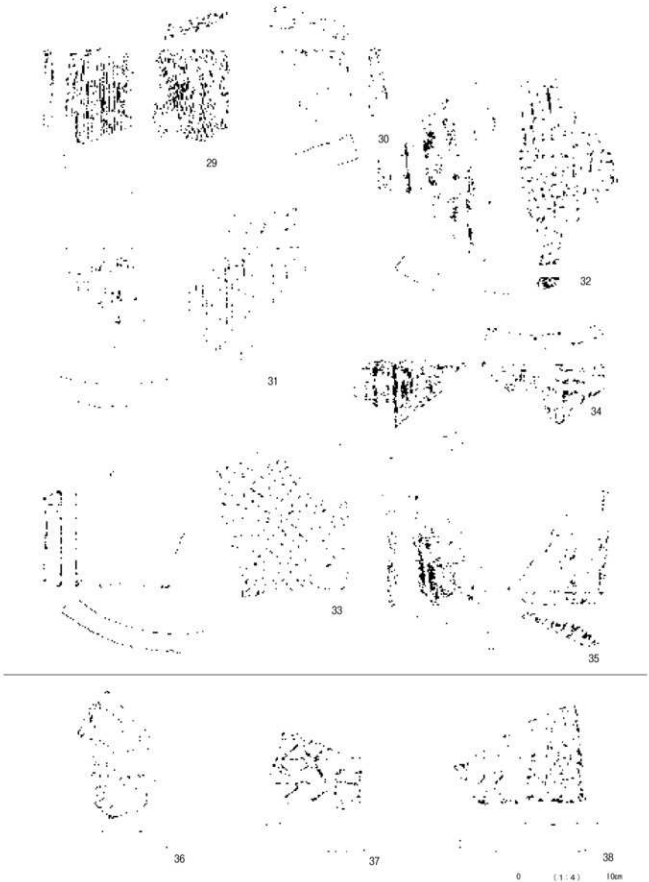
第41図　仁王門東地点出土古代瓦（丸瓦）



第42図　仁王門東地点出土古代瓦（平瓦）



第43図　仁王門東地点出土古代瓦（平瓦）



第44図　仁王門東地点出土古代・中世瓦（平瓦）

出土瓦観察表

図面No.	種別	法量（cm） 推定径	法量（cm） 厚さ（瓦当部）	色調	焼成	特徴
1	軒丸瓦	16.0	2.2～	5ＹＲ６／６橙	良	半弁 or 複弁蓮華文・瓦当裏面調整・二次被熱？
2	軒丸瓦	18.9	2.7	10ＹＲ７／３にぶい黄橙	やや不良	巴文（右巴）・中心部がつながる・文様面は究出する・瓦当裏面はナデ調整
3	軒丸瓦	11.0～11.5	1.7～2.0	10ＹＲ６／１褐灰	やや不良	巴文（左巴）・文様の究出は低い・瓦当裏面は板（ヘラ？）ナデ調整
4	軒丸瓦	16.0前後	破損	7.5ＹＲ６／６橙	やや良	凸面面文がわずかに残る・丸瓦の端部に刻み

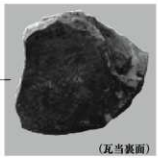
図面No.	種別	法量（cm） 瓦当面幅	法量（cm） 厚さ（平瓦）	色調	焼成	特徴
5	軒平瓦	2.0	2.0	2.5Ｙ６／２灰黄	良	三重弧文・平瓦凸面：格子目叩き・平瓦凹面：布目痕と赤切痕あり
6	軒平瓦	5.3	2.5	Ｎ３／暗灰	良	連珠文・段顔・平瓦部凹面にタテナデ・１次被出面出土
7	軒平瓦	3.3	3.5	Ｎ４／灰	やや不良	均整唐草文・平瓦部が一部欠損・低い段顔・側部はケズリ調整

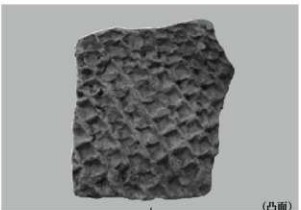
図面No.	種別	厚さ（cm）	色調	焼成	凹面	凸面	側部 調整回数（ケズリ）	端部 調整回数（ケズリ）	特徴
8	平瓦	2.0	5ＹＲ５／１灰	やや不良	布目痕・ヘラ描き文字	縄叩き・指紋	破損	1	文字瓦「十（もしくは記号）」
9	丸瓦	1.6	7.5ＹＲ５／４にぶい褐	やや良	布目痕	ヨコナデ	1	1	有段式
10	丸瓦	1.6	Ｎ６／灰	良	布目痕	ヨコナデ	1	1	有段式（玉縁部のみ）
11	丸瓦	1.3～2.0	7.5Ｒ２／１赤黒	良	布目痕・赤切痕・布縄七目	ヨコナデ・指紋	3	狭１：広３	完形（無段式：行基式）・瓦元焔
12	丸瓦	1.8	Ｎ３／暗灰	良	布目痕・布縄七目	ヨコナデ	3	3	瓦元焔？
13	丸瓦	1.5	7.5Ｙ Ｒ７／８黄橙	良	布目痕	ヨコナデ	3	2	
14	丸瓦	1.6	Ｎ４／灰	良	布目痕	ヨコナデ	2	2	瓦元焔
15	丸瓦	1.9	５ＹＲ５／１褐灰	やや良	布目痕・赤切痕	ヨコナデ	3	2	
16	丸瓦	1.3	５ＹＲ７／６橙	やや良	布目痕	ヨコナデ	2	1	
17	丸瓦	1.4	10ＹＲ５／１褐灰	やや不良	布目痕	タテハケ？	2	破損	
18	丸瓦	1.2	Ｎ６／灰	良	布目痕	ヨコナデ	3	破損	瓦元焔
19	丸瓦	1.3	10ＹＲ７／１灰白	良	布目痕	ヨコナデ→タテナデ	4	破損	瓦元焔？
20	平瓦	1.7	10ＹＲ６／１灰白	やや良	布目痕・横骨痕	縄叩き	3	2	
21	平瓦	2.0	7.5ＹＲ４／１褐灰	良	布目痕・横骨痕	縄叩き	3	3	
22	平瓦	3.2	10ＹＲ７／２にぶい黄橙	やや不良	布目痕	縄叩き	3	2	凹面に土瘤着？
23	平瓦	1.5	2.5Ｙ Ｒ４／１赤灰	やや良	布目痕・赤縄七目・指頭痕	縄叩き	3	2	二次被熱？
24	平瓦	2.8	５ＹＲ６／６橙	良	布目痕	縄叩き	2	1	側部にシャープさに欠ける
25	平瓦	2.7	５Ｂ３／１暗青灰	良	布目痕	縄叩き	2	2	瓦元焔
26	平瓦	2.3	10ＹＲ５／１褐灰	良	布目痕	縄叩き・指紋・布目痕	2	1	１次面SK05出土
27	平瓦	2.3	2.5Ｙ Ｒ４／３にぶい赤褐	やや良	布目痕・赤切痕	縄叩き・指紋・布目痕	2	2	
28	平瓦	1.9	５ＹＲ４／６明褐	やや不良	布目痕→ヨコナデ	縄叩き・赤切痕	2	1	凹面の布目痕をナデ消す・二次被熱？
29	平瓦	1.6	Ｎ４／灰	良	布目痕→タテハケ？	縄叩き	3	1	瓦元焔？
30	平瓦	2.5	2.5Ｙ Ｒ４／６赤褐	やや不良	布目痕→タテハケ？	調離（一部縄叩き残る）	2？	1	
31	平瓦	2.5	Ｎ３／暗灰	やや不良	布目痕	縄叩き	破損	1	瓦元焔？二次被熱？
32	平瓦	1.6	10ＹＲ６／２灰黄褐	やや良	布目痕	格子目叩き	3	1？	
33	平瓦	2.1	10ＹＲ７／３にぶい黄橙	やや良	布目痕	格子目叩き	3	破損	
34	平瓦	1.6	10ＹＲ８／３浅黄橙	良	布目痕・横骨痕	ヨコナデ	破損	3	叩き不明
35	平瓦	1.8	7.5Ｙ Ｒ８／４浅黄橙	良	布目痕	ヨコナデ	3	3	叩き不明
36	平瓦	2.3	10ＹＲ７／３にぶい黄橙	良	布目痕？タテナデ	「×（菱形？）」字状叩き	破損	破損	中世瓦・１次面石積１出土
37	平瓦	2.6	7.5Ｙ Ｒ５／１褐灰	良	ナデ	「米」字状叩き	1	破損	中世瓦・１次被出面
38	平瓦	2.9	５ＹＲ５／２灰褐	不良	不明	「米」字状叩き	1	2	中世瓦・二次被熱？・１次面石積１出土

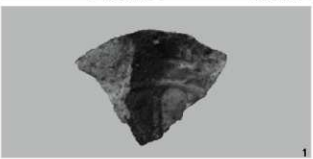
2（文様面）

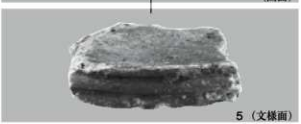
（瓦当裏面）

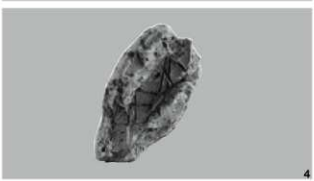
3（文様面）

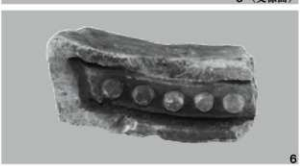

（瓦当裏面）

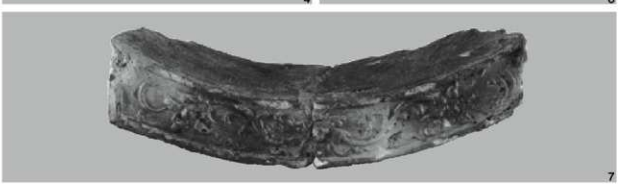

（凸面）

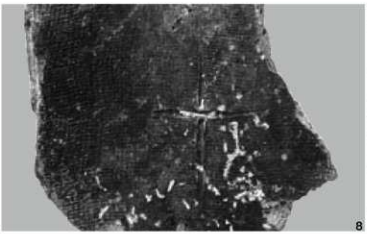

1

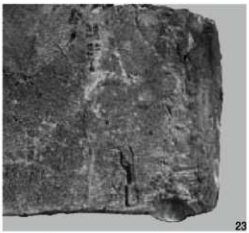

5（文様面）


4

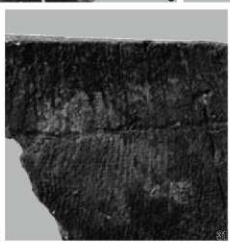

6


7


8


23

29


33

37

11（凸面）

（凹面）

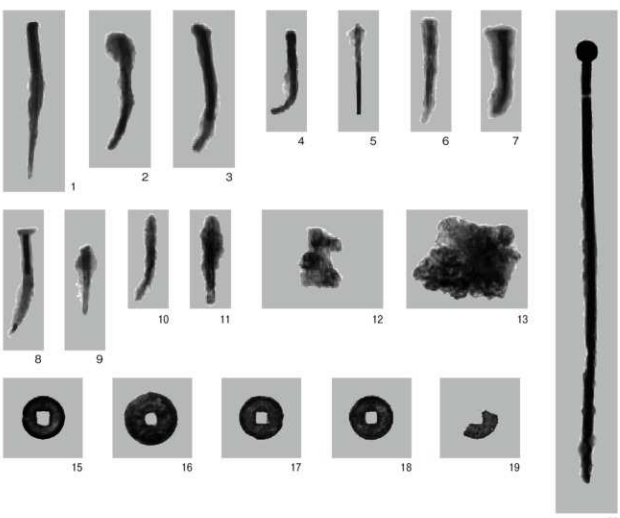
（加撚痕）

（7）その他遺物

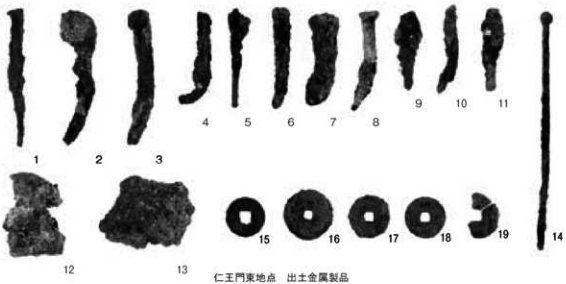
金属製品　本調査地点では、19点の金属製品を確認している。多数は石積１内部および１次検出面から出土したものであり、江戸期以降の製品と考えられる。内容は鉄釘が最も多く11点、銅銭が５点、火箸が１点、不明金属製品が２点である。鉄釘は全長４～8.5cmのものが出土しており、火箸の全長は235cmを測る。２点の不明金属製品は、焼土・炭化物を多量に含む盛土３より出土しており、被熱により溶解しているため、本来の形状は定かではない。

壁土・土製品　炭化物を多量に含む盛土３からは、漆喰を伴う壁土片が多数出土している。漆喰は土壁表面に２～５mmの厚さで残存しており、表面には硬化・無数のヒビ割れが生じていることから、被熱の影響を受けたものと想定される。同層からは、表面に赤色塗布された大型の造形物と思われる土製品が出土している。土壁と土製品の胎土には、藁スサが多量に含まれており、判別が困難である。土製品は塑像の可能性もあるが、形状が不明であるため、ここでは不明土製品とする。

石製品　本調査地点からは五輪塔の空風輪３点、火輪２点、水輪２点、地輪１点と宝篋印塔の相輪１点の計９点の石製品が出土している。石製品は、全て第１次遺構検出面上の近代造成土から出土しており、江戸期以降に廃棄もしくは転用された石材と思われる。記銘・墨書等の記載は確認されないため、ここでは観察表のみの報告とする。



第45図　仁王門東地点　出土金属製品（S≒1/2）



仁王門東地点　出土金属製品

仁王門東地点　出土漆喰壁片

仁王門東地点　出土土製品

◎仁王門東地点　出土金属製品

遺物No.	遺物名	材質	出土位置	法量（mm）			重量（g）	整理No.	備考
				全長（直径）	最大厚	最大幅			
1	鉄釘	鉄	石積１	85.0	10.0	10.0	11.10	16	
2	鉄釘	鉄	石積１	65.0	10.0	15.0	12.56	17	
3	鉄釘	鉄	石積１	70.0	13.0		13.22	4	
4	鉄釘	鉄	石積１	50.0	7.0	7.0	5.93	18	
5	鉄釘	鉄	２次検出面	49.0	11.0		2.91	15	
6	鉄釘	鉄	ＳＫ01	55.0	8.0		6.00	2	
7	鉄釘	鉄	２次検出面	50.0	12.0		16.08	14	
8	鉄釘	鉄	Ｔｒ１	64.0	7.0	6.0	7.07	8	
9	鉄釘	鉄	石積１	40.0	8.0		3.92	5	
10	鉄釘	鉄	石積１	48.0	6.0	7.0	4.56	19	
11	鉄釘	鉄	ＳＫ01	50.0	7.0		6.95	3	
12	不明金属	銅	盛土３（下層）	60.0	37.0	50.0	11.29	20	鉱滓か
13	不明金属	鉄	Ｔｒ１	5.0	5.0	5.0	51.44	6	鉱滓か
14	火箸	鉄	１次検出面	235.0	14.0		97.96	1	
15	銅銭『寛□□寶』	銅	石積１	23.0	1.0		2.86	9	
16	銅銭（不明）	銅	１次検出面	28.0	0.7		5.60	10	
17	銅銭（不明）	銅	１次検出面	24.0	1.5		3.02	11	
18	銅銭（不明）	銅	１次検出面	23.0	1.5		2.31	12	
19	銅銭片	銅	１次検出面	22.0	2.5		3.35	13	

◎石製品観察表

番号	石製品内容		石材	寸法（cm）			備考
	種別	部位・形状		タテ	ヨコ１	ヨコ２	
1	五輪塔	空風輪	安山岩（青目）	18.0	14.5	13.5	
2	五輪塔	空風輪	安山岩（赤目）	22.0	17.0	16.0	
3	五輪塔	空風輪	安山岩（青目）	21.0	18.0	15.5	
4	五輪塔	火輪	安山岩（青目）	17.5	10.5	22.5	
5	五輪塔	火輪	安山岩（青目）	11.5	9.0	21.0	
6	五輪塔	水輪	安山岩（青目）	11.0	23.0	18.5	
7	五輪塔	水輪	安山岩（青目）	11.0	19.5	15.5	
8	五輪塔	地輪	安山岩（青目）	16.0	21.0	21.0	
9	宝篋印塔	相輪	安山岩（青目）	(23.5)	10.0		一部欠損

※１　寸法の（　）は現存部分のみの長さを示す
※２　寸法の「タテ」は製品の高さを示し、「ヨコ１」・「ヨコ２」は部位ごとに異なる。
以下「各部位（ヨコ１：ヨコ２）」。
・五輪塔　空風輪（空輪最大径：風輪最大径）、火輪（上部辺：下部辺）、水輪（上部径：最大径）、地輪（前部辺：側部辺）
・宝篋印塔　相輪（中央部径：底部径）

第３節　八幡屋礒五郎大門町店地点の調査概要

（１）調査の方法

調査は、八幡屋礒五郎大門町店建設に伴う増築部分約30㎡を対象として、記録保存のための遺構確認を行った。発掘調査では、重層的に埋没する各時代の遺構をそれぞれ検出するため、近代造成土層を除去した後に、堆積土層に応じて検出面を設定し、２次にわたる掘り下げと遺構確認を実施した。また、調査区南壁沿いに堆積土層確認のためのトレンチ（１トレンチ）および石積確認のためのトレンチ（２トレンチ）を設定した。

（２）基本層序

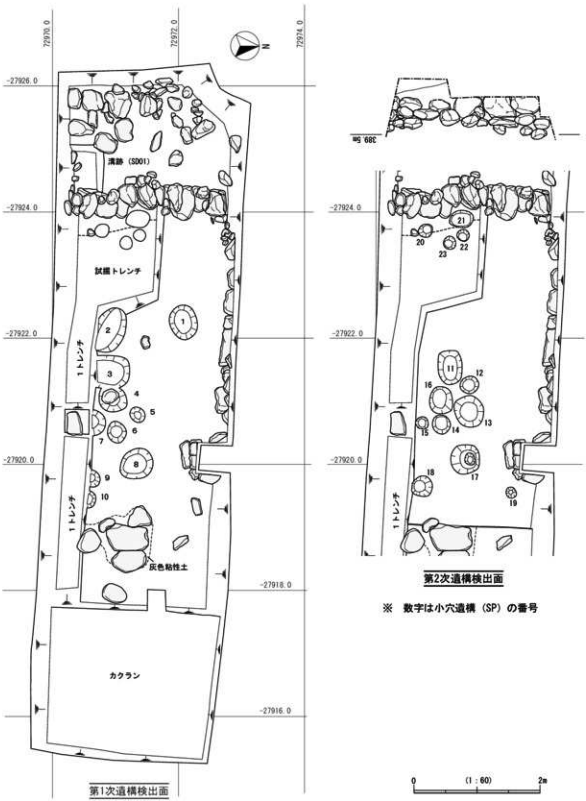
試掘調査結果および表土除去状況から、調査区東側は近代造成によって改変されていることが判明した。よって、善光寺参道に面する西側を中心に調査することとした。調査区の表土直下は、近代造成によって30～60㎝ほど改変されているものの、その下層からは比較的良好に遺構が遺存している。１トレンチで確認された土層は、近代造成を除く堆積土層を大きく６段階に区分して考えることができる（第47図）。

第Ⅰ段階は、遺物を含まない砂礫層であり、自然堆積と考えられる。第Ⅱ段階は、砂礫層を人為的に掘り込んで、石積みを形成している。第Ⅲ段階は石積み西側の溝堆積土であり、泥炭や砂層の堆積状況から水路跡と推定される。第Ⅳ段階は第Ⅱ段階上に人為的に造成されており、多量の炭化物を包含する土層上に整地層を有する。第Ⅴ段階は、溝が埋没した後の掘り込み及び造成と考えられる。第Ⅵ段階は、第Ⅴ段階後の掘り込みである。第Ⅲ段階・第Ⅳ段階は時期が前後する可能性もある。調査では、第Ⅳ段階上を１次検出面、第Ⅱ段階上を２次検出面としている。遺物は、炭化物を含む整地層及び溝跡より古代から中世末の遺物が出土しているが、大多数は中世後期の製品と考えられる。

（３）調査概要

本調査区では、調査区西際の溝跡（SD01）と、複数の小穴（SP）を確認した。溝跡の東法面には石積みが築かれているが、西法面は後の改変により定かではない。幅２ｍ以上の溝であった可能性がある。検出された石積みは径20～40㎝の石材にて２～４段程積み上げられている。上部に比較的小振りの石材を用いており、第Ⅳ段階の整地時に積み直しを行った可能性もある。小穴は第１次検出面で10箇所、第２次検出面で９箇所、試掘トレンチ内に４箇所の計23箇所を確認した。ただし、小穴は比較的近接した区域に集中しており、平面形を推測するのは困難である。また、SP１上に土器集中区（SR01）が確認された。

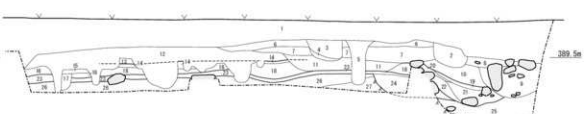
出土遺物のうち多数が土器小皿（かわらけ）である。比較的遺存状況が良好であり、完形品が多数出土している。土器小皿は全て轆轤（ろくろ）成形であり、比較的小さな口径８㎝前後の製品とやや大きめな11㎝前後の製品、15㎝を超える製品の３種類の傾向が認められる。溝跡（SD01）からは、土器小皿以外に灰釉陶器や珠洲焼のすり鉢が出土しているが、いずれも小片である。調査区全体では２次に渡って遺構検出を行っており、検出面にて出土した遺物も溝跡出土遺物とほぼ同時期の傾向を示す。１次遺構検出面にて出土した灰釉小皿は、大窯後期の様相を示しており、16世紀後半の所産と想定される。また中国龍泉窯系の青磁は、蓮弁文が崩れており、14世紀から15世紀に比定される。本調査区では、肥前系染付など江戸期所産の遺物が出土しておらず、時期を想定できる陶磁器は中世後半の様相を示していることから、中世末に埋没し、近世以降改変がなされなかった場所と考えられる。調査区西端で確認された南北に延びる溝跡も同様に中世後期の比較的短期間に形成され埋没した遺構と想定される。出土した多量の土器小皿の意味は不明だが、調査区西側の溝跡および溝跡周辺に集中する傾向を示す。



第46図　八幡屋磯五郎大門町店地点　遺構全体図（S=1/60）

調査区全景（１次面）

調査区全景（２次面）



Ⅵ
1 近代盛土
2 赤褐色粘性土　φ2～10mの橙色ブロック多量に含む
3 赤褐色粘性土　φ2～5mmの橙色ブロック多量に含む（12層と類似）
4 黄褐色砂質土

Ⅴ
5 褐褐色粘性土　角礫少量含む
6 黄褐色砂質土　面下側に厚さ1cm前後の炭化物層あり（火災後整地層か）
7 褐色弱粘性土　少量の礫・橙色ブロック含む
8 褐色弱粘性土　少量の炭化物含む
9 褐色粘性土　多量の礫含む
10 黄褐色粘性土　少量の遺物・礫含む
11 暗褐色粘性土　多量の遺物包む
12 褐色弱粘性土　少量の炭化物・橙色ブロック含む
13 赤褐色粘性土　焼土を含む

Ⅳ
14 黄褐色砂質土　層中に厚さ1cm前後の炭化物層あり　⇒第1次遺構検出面
15 灰色粘性土　（平石固定用か）
16 褐色弱粘性土　12層・23層の混層
17 黄褐色砂質土

Ⅲ
18 暗褐色粘性土　多量の炭化物含む
19 暗黄褐色砂質土
20 黄褐色砂質土
21 黒色粘性土　多量の遺物包む（泥炭層）
22 暗褐色粘性土　多量の遺物含む，砂礫混入

Ⅱ
23 黄褐色砂質土　層中に厚さ2cm前後の炭化物層あり　⇒第2次遺構検出面
24 茶褐色砂礫

Ⅰ
25 暗褐色砂礫
26 茶褐色砂礫
27 明黄褐色砂礫

第47図　調査区南壁　土層断面図（S=1/60）

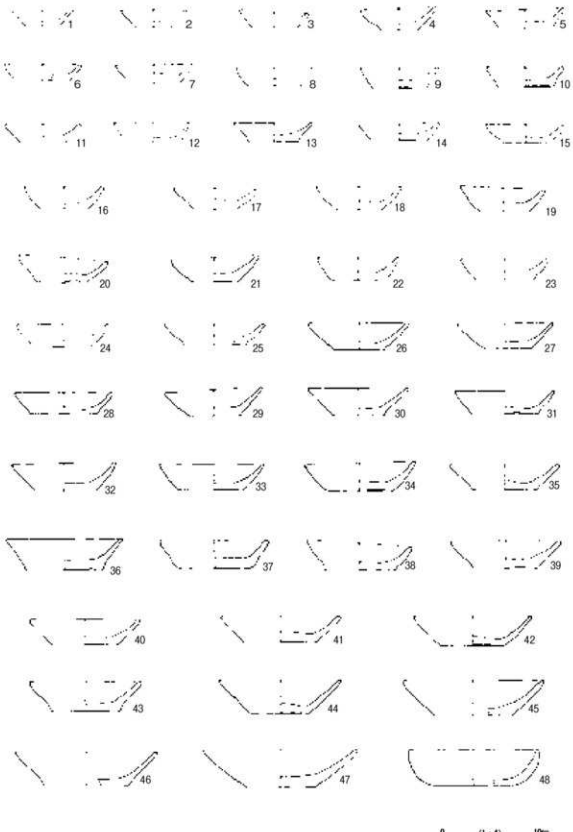
石積

溝跡土層断面

土器集中区
(SR01)

番号	遺構名	類別	器種	形状	胎土色・特徴	成形	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	高台文様・特徴	備考(推定産地・年代)
1	SD01	土器	小皿	逆台形	橙色	精緻ナデ	6.4	1.7	3.6	回転糸切	
2	SD01	土器	小皿	逆台形	橙色	精緻ナデ	7.0	1.8	3.8	回転糸切	
3	SD01	土器	小皿	逆台形	暗橙色	精緻ナデ	7.3	1.7	4.8	回転糸切	
4	SD01	土器	小皿	丸形	暗橙色	精緻ナデ	8.0	2.3	4.1	回転糸切	
5	SD01	土器	小皿	逆台形	暗橙色	精緻ナデ	8.2	1.9	5.8	回転糸切	
6	SD01	土器	小皿	逆台形	暗橙色	精緻ナデ	8.1	1.7	5.9	回転糸切	
7	SD01	土器	小皿	逆台形	暗橙色	精緻ナデ	8.1	1.9	5.6	回転糸切	
8	SD01	土器	小皿	丸形	暗橙色	精緻ナデ	8.1	2.0	5.5	回転糸切	
9	SD01	土器	小皿	逆台形	暗橙色	精緻ナデ	8.1	2.1	5.7	回転糸切	口縁に煤付着
10	SD01	土器	小皿	逆台形	暗橙色	精緻ナデ	8.1	2.1	6.0	回転糸切	
11	SD01	土器	小皿	逆台形	暗橙色	精緻ナデ	8.0	1.9	4.6	回転糸切	
12	SD01	土器	小皿	逆台形	黄灰色	精緻ナデ	8.0	2.1	5.8	回転糸切	
13	SD01	土器	小皿	逆台形	暗橙色	精緻ナデ	8.3	2.0	5.4	回転糸切	
14	SD01	土器	小皿	丸形	黄橙色	精緻ナデ	8.5	1.9	5.5	回転糸切	
15	SD01	土器	小皿	丸形	暗橙色	精緻ナデ	8.2	2.0	5.0	回転糸切	
16	SD01	土器	小皿	丸形	暗橙色	精緻ナデ	8.3	2.4	5.1	回転糸切	底部風熱
17	SD01	土器	小皿	逆台形	暗橙色	精緻ナデ	8.6	2.4	5.9	回転糸切	
18	SD01	土器	小皿	丸形	橙色	精緻ナデ	9.0	2.4	4.9	回転糸切	
19	SD01	土器	小皿	逆台形	暗橙色	精緻ナデ	8.9	2.5	5.2	回転糸切	
20	SD01	土器	小皿	丸形	暗橙色	精緻ナデ	9.4	2.6	5.5	回転糸切	
21	SD01	土器	小皿	丸形	暗橙色	精緻ナデ	9.3	2.6	4.8	回転糸切	口縁部風熱
22	SD01	土器	小皿	逆台形	暗橙色	精緻ナデ	8.6	2.4	5.9	回転糸切	
23	SD01	土器	小皿	逆台形	暗橙色	精緻ナデ	9.2	2.2	6.2	回転糸切・ヘラ	
24	SD01	土器	小皿	丸形	暗橙色	精緻ナデ	9.6	2.4	5.9	回転糸切	

番号	遺構名	類別	器種	形状	胎土色・特徴	成形	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	底部特徴	備考(推定産地・年代)
25	SD01	土器	小皿	丸形	暗橙色	精緻ナデ	10.5	2.2	6.6	回転糸切	
26	SD01	土器	小皿	逆台形	暗橙色	精緻ナデ	10.6	2.8	5.3	回転糸切	
27	SD01	土器	小皿	逆台形	黄橙色	精緻ナデ	10.2	2.6	5.1	回転糸切	
28	SD01	土器	小皿	逆台形	暗橙色	精緻ナデ	10.3	2.3	7.2	回転糸切	
29	SD01	土器	小皿	逆台形	暗橙色	精緻ナデ	10.3	2.8	5.3	回転糸切	
30	SD01	土器	小皿	逆台形	黄橙色	精緻ナデ	10.5	2.9	5.4	回転糸切	
31	SD01	土器	小皿	逆台形	暗橙色	精緻ナデ	10.6	2.5	7.2	回転糸切	
32	SD01	土器	小皿	逆台形	黄橙色	精緻ナデ	10.9	2.9	6.4	回転糸切	
33	SD01	土器	小皿	逆台形	黄橙色	精緻ナデ	11.0	2.7	6.8	回転糸切	
34	SD01	土器	小皿	丸形	橙色	精緻ナデ	11.7	2.9	7.0	回転糸切	
35	SD01	土器	小皿	逆台形	橙色	精緻ナデ	11.5	2.7	6.7	回転糸切	
36	SD01	土器	小皿	逆台形	暗橙色	精緻ナデ	12.2	3.4	8.1	回転糸切	
37	SD01	土器	小皿	逆台形	黄橙色	精緻ナデ	11.5	3.0	7.5	回転糸切	一部風熱
38	SD01	土器	小皿	丸形	暗橙色	精緻ナデ	11.1	2.8	7.5	回転糸切	
39	SD01	土器	小皿	逆台形	黄橙色	精緻ナデ	11.6	2.9	6.8	回転糸切	
40	SD01	土器	小皿	逆台形	黄橙色	精緻ナデ	11.6	2.7	7.0	回転糸切	
41	SD01	土器	小皿	逆台形	暗橙色	精緻ナデ	12.6	2.8	7.5	回転糸切	
42	SD01	土器	小皿	丸形	暗橙色	精緻ナデ	12.5	3.1	6.6	回転糸切	一部風熱
43	SD01	土器	小皿	逆台形	黄橙色	精緻ナデ	11.8	3.1	7.2	回転糸切	
44	SD01	土器	小皿	逆台形	黄橙色	精緻ナデ	12.8	3.5	6.0	回転糸切	
45	SD01	土器	中皿	逆台形	黄橙色	精緻ナデ	15.0	3.7	8.1	回転糸切	
46	SD01	土器	中皿	逆台形	暗橙色	精緻ナデ	15.9	3.5	8.9	回転糸切	
47	SD01	土器	中皿	逆台形	黄橙色	精緻ナデ	16.4	4.0	7.3	回転糸切	
48	SD01	土器	小皿	丸形	黄橙色	精緻ナデ	13.7	3.8	8.0	回転糸切	

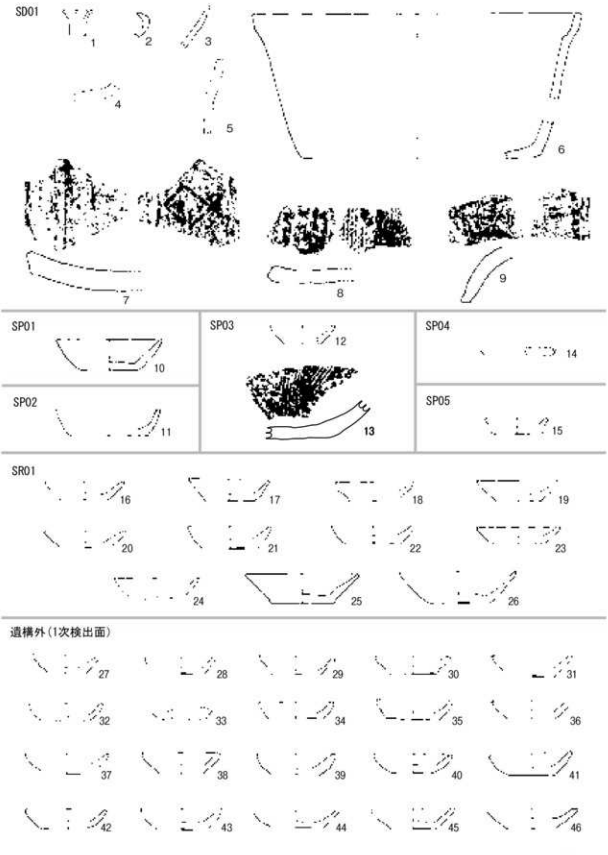


第48図　八幡屋磯五郎大門町店地点　遺構出土遺物（SD01）

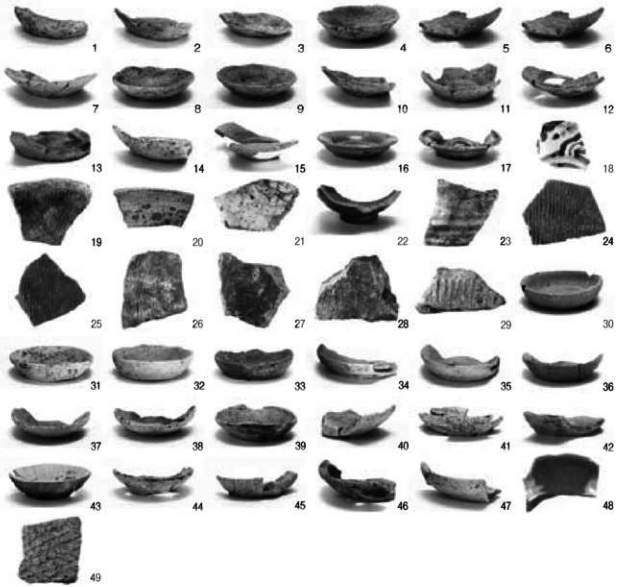
番号	遺構名	類別	器種	形状	胎土色調・品質	成形	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	底部特徴	備考（推定産地・年代）
1	SD01	陶器	碗？	—	灰黄色	施釉	3.2	—	—		瀬戸美濃系
2	SD01	陶器	壺	—	灰色	無釉・施釉	—	—	—		瀬戸美濃系
3	SD01	陶器	鉢	端反形	灰色	無釉・施釉	—	—	—		瀬戸美濃系
4	SD01	土器	鍋		褐色	粗雑ナデ	—	—	—		
5	SD01	土器	鍋		黒褐色	粗雑ナデ	—	—	—		
6	SD01	土器	鍋		黒色	粗雑ナデ	34.9	—	25.4		
10	SP01	土器	小皿	直行形	赤褐色	粗雑ナデ	11.1	3.2	6.2	回転糸切	
11	SP02	土器	—	—	黄橙色	粗雑ナデ	—	—	8.2	回転糸切	
12	SP03	土器	小皿	直行形	暗橙色	粗雑ナデ	6.8	2.0	3.8	回転糸切	
13	SP03	陶器	平皿	—	明灰色	粗雑ナデ	—	—	—		珠洲系(13～15C)
14	SP04	土器	小皿	—	明褐色	粗雑ナデ	—	—	7.2	回転糸切	一部被熱
15	SP05	土器	小皿	直行形	黄橙色	粗雑ナデ	6.6	5.2	1.7	回転糸切	
16	SR01	土器	小皿	直行形	明褐色	粗雑ナデ	8.4	2.0	5.0	回転糸切	
17	SR01	土器	小皿	直行形	黄橙色	粗雑ナデ	8.5	2.3	5.2	回転糸切	
18	SR01	土器	小皿	丸形	黄橙色	粗雑ナデ	8.3	2.1	5.5	回転糸切	
19	SR01	土器	小皿	直行形	黄橙色	粗雑ナデ	8.8	2.2	4.8	回転糸切	
20	SR01	土器	小皿	丸形	黄橙色	粗雑ナデ	8.6	1.9	5.1	回転糸切	
21	SR01	土器	小皿	直行形	黄橙色	粗雑ナデ	8.8	2.4	5.8	回転糸切	
22	SR01	土器	小皿	直行形	黄橙色	粗雑ナデ	8.7	1.9	5.8	回転糸切	
23	SR01	土器	小皿	丸形	黄橙色	粗雑ナデ	8.8	1.8	6.0	回転糸切	
24	SR01	土器	小皿	丸形	黄橙色	粗雑ナデ	9.0	2.3	5.0	回転糸切	
25	SR01	土器	小皿	直行形	黄橙色	粗雑ナデ	12.0	3.1	6.7	回転糸切	

番号	遺構名	類別	器種	形状	胎土色調・品質	成形	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	底部特徴	備考（推定産地・年代）
26	SR01	土器	小皿	丸形	暗橙色	粗雑ナデ	12.2	3.3	6.3	回転糸切	
27	1次検出面	土器	小皿	直行形	灰黄色	粗雑ナデ	6.9	1.9	4.7	回転糸切	
28	1次検出面	土器	小皿	直行形	灰黄色	粗雑ナデ	7.4	1.8	5.2	回転糸切	
29	1次検出面	土器	小皿	直行形	灰黄色	粗雑ナデ	8.0	1.9	5.2	回転糸切	
30	1次検出面	土器	小皿	直行形	黄橙色	粗雑ナデ	8.0	1.9	5.1	回転糸切	
31	1次検出面	土器	小皿	直行形	黄橙色	粗雑ナデ	8.4	2.2	4.8	回転糸切	
32	1次検出面	土器	小皿	丸形	黄橙色	粗雑ナデ	7.7	1.8	5.4	回転糸切	
33	1次検出面	土器	小皿	—	灰褐色	粗雑ナデ	—	—	5.4	回転糸切	底部片・孔有
34	1次検出面	土器	小皿	丸形	黄橙色	粗雑ナデ	7.9	1.8	5.7	回転糸切	
35	1次検出面	土器	小皿	直行形	黄橙色	粗雑ナデ	7.9	2.1	5.7	回転糸切	
36	1次検出面	土器	小皿	直行形	黄橙色	粗雑ナデ	8.2	1.9	5.0	回転糸切	
37	1次検出面	土器	小皿	丸形	黄橙色	粗雑ナデ	8.8	2.2	5.0	回転糸切	
38	1次検出面	土器	小皿	丸形	黄橙色	粗雑ナデ	8.2	2.2	4.8	回転糸切	
39	1次検出面	土器	小皿	丸形	灰白色	粗雑ナデ	8.4	2.2	5.6	回転糸切	
40	1次検出面	土器	小皿	丸形	灰黄色	粗雑ナデ	8.3	2.0	4.5	回転糸切	
41	1次検出面	土器	小皿	丸形	黄橙色	粗雑ナデ	8.7	2.3	5.0	回転糸切	
42	1次検出面	土器	小皿	丸形	黄橙色	粗雑ナデ	8.6	2.1	5.8	回転糸切	
43	1次検出面	土器	小皿	丸形	黄橙色	粗雑ナデ	8.6	2.3	5.3	回転糸切	
44	1次検出面	土器	小皿	直行形	黄橙色	粗雑ナデ	9.0	1.8	5.8	回転糸切	
45	1次検出面	土器	小皿	直行形	灰黄色	粗雑ナデ	8.8	2.2	4.9	回転糸切	
46	1次検出面	土器	小皿	直行形	橙色	粗雑ナデ	9.6	2.2	5.2	回転糸切	

番号	遺構名	類別	種類	色調	焼成	縦幅(cm)	横幅(cm)	厚さ(cm)	凹面	凸面	備考・特徴
7	S D01	瓦	平瓦	N41/5C	良	—	—	2.1	布目痕	米字文？	
8	S D01	瓦	平瓦	7.5YR6/1灰	良	—	—	1.5	布目痕	縄叩き	
9	S D01	瓦	丸瓦	10R5/1赤灰	良	—	—	1.6	布目痕	削り（ナデ？）	



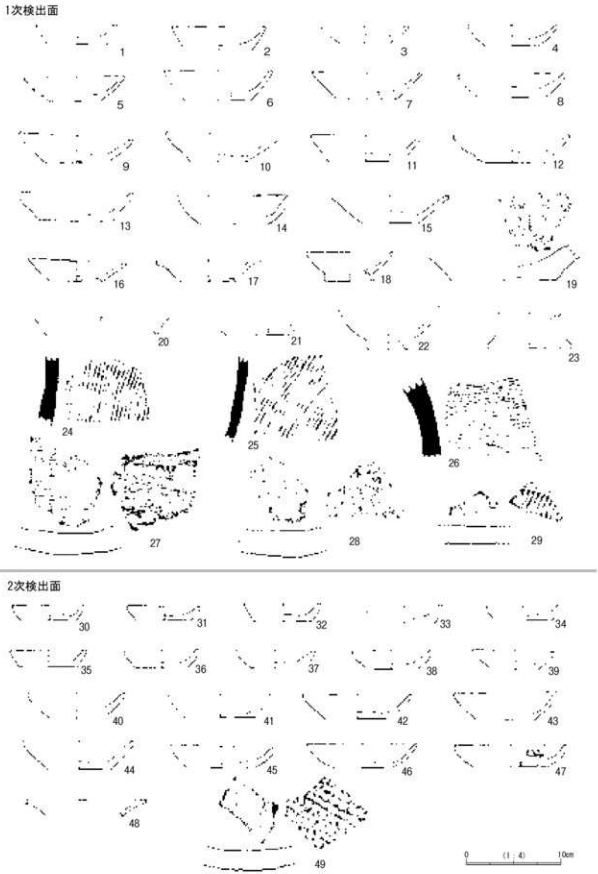
第49図　八幡屋磯五郎大門町店地点　出土遺物（SD01・SP1～5・SR01・遺構外）



番号	遺構名	類別	器種	形状	胎土色・特徴	成形	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	底部特徴	備考（推定産地・年代）
1	1次検出面（土器）	小皿	連台形	灰黄色	精緻	8.5	2.1	6.5	回転糸切		
2	1次検出面（土器）	小皿	連台形	橙色	精緻	9.9	2.5	7.2	回転糸切		
3	1次検出面（土器）	小皿	連台形	灰黄色	精緻	9.2	1.9	5.6	回転糸切		
4	1次検出面（土器）	小皿	丸形	黄橙色	精緻	9.5	2.2	5.8	回転糸切		
5	1次検出面（土器）	小皿	醤形	褐色	精緻	10.6	2.6	5.8	回転糸切		
6	1次検出面（土器）	小皿	連台形	灰黄色	精緻	11.4	3.1	7.0	回転糸切		
7	1次検出面（土器）	小皿	連台形	黄橙色	精緻	11.4	2.8	6.5	回転糸切		
8	1次検出面（土器）	小皿	丸形	灰黄色	精緻	11.4	2.6	6.9	回転糸切		
9	1次検出面（土器）	小皿	丸形	黄橙色	精緻	12.1	2.8	6.8	回転糸切		
10	1次検出面（土器）	小皿	丸形	黄橙色	精緻	12.1	2.9	6.2	回転糸切		
11	1次検出面（土器）	小皿	連台形	黄橙色	精緻	11.5	2.8	7.9	回転糸切		
12	1次検出面（土器）	小皿	連台形	黄橙色	精緻	13.2	2.9	7.2	回転糸切		
13	1次検出面（土器）	小皿	連台形	褐色	精緻	12.0	3.1	8.0	回転糸切		
14	1次検出面（土器）	小皿	丸形	灰黄色	精緻	12.0	3.1	7.0	回転糸切		
15	1次検出面（土器）	小皿	連台形	灰黄色	精緻	12.4	3.0	6.1	回転糸切		
16	1次検出面（陶器）	小皿	折縁形	黄橙色	精緻	10.4	2.2	5.6	削出高台・輪ドケ	瀬戸美濃系（16C）	
17	1次検出面（陶器）	小皿	端反形	黄橙色	精緻	11.2	2.4	6.0	削出高台・輪ドケ	瀬戸美濃系（16C）	
18	1次検出面（磁器）	碗	丸形	端灰色	精緻	—	—	—	—	中国龍泉窯（14～15C）	
19	1次検出面（陶器）	すり鉢	—	端灰色	—	—	—	11.0	ナデ	珠洲系（13～15C）	
20	1次検出面（陶器）	—	端反形	灰褐色	精緻	14.0	—	—	—	山茶碗？	
21	1次検出面（陶器）	小皿	—	灰黄色	—	—	—	6.6	削出高台	瀬戸美濃系	
22	1次検出面（陶器）	中碗	丸形	灰白色	精緻	—	—	4.4	削出高台		
23	1次検出面（陶器）	高台部		灰褐色	精緻	—	—	9.0	—		

番号	遺構名	類別	器種	形状	胎土色・特徴	成形	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	底部特徴	備考（推定産地・年代）
24	1次検出面（陶器）	壺	—	端灰色	押き調整	—	—	—	—	珠洲系（13～15C）	
25	1次検出面（陶器）	壺	—	灰色	押き調整	—	—	—	—	珠洲系（13～15C）	
26	1次検出面（陶器）	壺	—	灰黄色	押き調整	—	—	—	—	珠洲系（13～15C）	
30	1次検出面（土器）	小皿	丸形	黄橙色	精緻	7.4	1.7	5.5	回転糸切		
31	1次検出面（土器）	小皿	連台形	黄橙色	精緻	7.7	1.6	5.8	回転糸切		
32	1次検出面（土器）	小皿	連台形	黄橙色	精緻	8.3	1.9	6.2	回転糸切		
33	1次検出面（土器）	小皿	連台形	灰色	精緻	8.0	1.9	6.4	回転糸切		
34	1次検出面（土器）	小皿	醤形形	灰黄色	精緻	7.6	1.6	6.0	回転糸切		
35	1次検出面（土器）	小皿	連台形	黄橙色	精緻	8.0	1.8	6.0	回転糸切		
36	1次検出面（土器）	小皿	連台形	灰白色	精緻	8.0	1.8	5.6	回転糸切		
37	1次検出面（土器）	小皿	丸形		精緻	8.2	2.0	4.9	回転糸切		
38	1次検出面（土器）	小皿	丸形	灰黄色	精緻	8.5	2.1	5.5	回転糸切	灯明皿	
39	1次検出面（土器）	小皿	連台形	灰黄色	精緻	8.8	2.1	5.2	回転糸切	灯明皿	
40	1次検出面（土器）	小皿	連台形	灰黄色	精緻	10.2	2.7	5.7	回転糸切		
41	1次検出面（土器）	小皿	連台形	黄橙色	精緻	10.8	2.5	7.4	回転糸切		
42	1次検出面（土器）	小皿	連台形	灰黄色	精緻	11.6	2.6	6.8	回転糸切		
43	1次検出面（土器）	小皿	丸形	黄橙色	精緻	11.1	3.0	6.0	回転糸切		
44	1次検出面（土器）	小皿	連台形	黄橙色	精緻	11.8	3.0	6.8	回転糸切		
45	1次検出面（土器）	小皿	丸形	黄橙色	精緻	10.8	2.3	7.2	回転糸切		
46	1次検出面（土器）	小皿	丸形	灰褐色	精緻	11.6	2.6	6.0	回転糸切		
47	1次検出面（土器）	小皿	丸形	灰黄色	精緻	11.6	2.3	8.0	回転糸切		
48	1次検出面（磁器）	小皿	輪花皿	端灰色	精緻	13.0	—	—	—	中国龍泉窯（14～15C）	

番号	遺構名	類別	種類	色調	焼成	幅(cm)	横幅(cm)	厚さ(cm)	凹面	凸面	備考・特徴
27	1次検出面	瓦	平瓦	2.5YR4/1赤灰	良	—	—	2.3	布目痕	ナデ	
28	1次検出面	瓦	平瓦	5YR6/6橙	やや良	—	—	2.6	布目痕	縄叩き	
29	1次検出面	瓦	平瓦	7.5YR6/6橙	やや良	—	—	1.9	布目痕	並行叩き	
49	2次検出面	瓦	平瓦	10YR7/3黄橙	良	—	—	2.0	布目痕	格子目叩き	

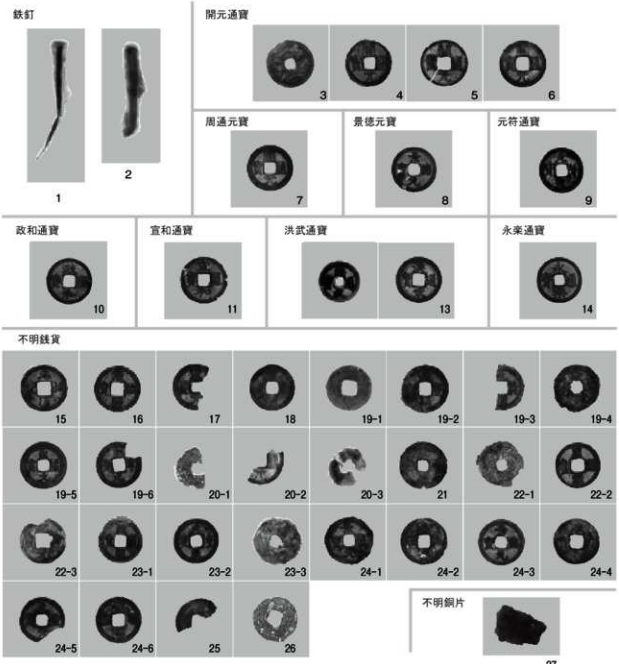


第50図　八幡屋磯五郎大門町店地点　遺構外出土遺物（1次面・2次面）

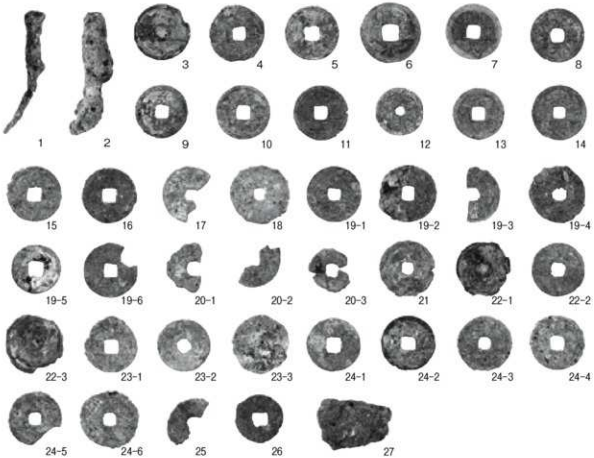
（4）出土金属製品

出土金属製品の概要　本調査区では、42点の銭貨と２点の釘が出土している。出土地点はSP02やSP10などの小穴からも数点出土しているが、多数は検出面及びトレンチからの出土である。確認された他の遺物と同様に溝跡に近い調査区西側において集中して出土する傾向を示す。

出土銭貨　出土した銭貨のうち、判読可能なものは12点である。鋳造年代順に列記すると、唐銭の開元通寶４枚、後周銭の開通元寶１枚、北宋銭の景徳元寶１枚・元符通寶１枚・政和通寶１枚・宣和通寶１枚、明銭の洪武通寶２枚・永楽通寶１枚となり、江戸期に鋳造された銭貨は出土していない。その他判読できない銅銭が多数出土しており、30㎡の小調査区において極めて高い密度で銭貨が出土している状況が、本調査地点の特徴の一つとして挙げられる。



第51図　八幡屋磯五郎大門町店地点出土銭貨（S≒1/2）



◎八幡屋磯五郎大門町店地点出土金属製品

遺物No.	遺物名	材質	出土位置	法量（mm） 全長（直径）	最大厚	最大幅	重量（g）	鋳造 国	年	西暦	整理No.	備考
1	鉄釘	鉄	Tr 1	74.0	9.0	11.0	8.01				13	
2	鉄釘	鉄	SP10	58.0	18.0	8.0	12.66				28	
3	銅銭「開元通寶」	銅	1 次検出面	26.5	0.7		2.67	唐	武德 4 年	621	10	
4	銅銭「開元通寶」	銅	2 次検出面	25.0	1.5		3.95	唐	武德 4 年	621	16	
5	銅銭「開元通寶」	銅	2 次検出面	24.5	1.5		2.92	唐	武德 4 年	621	18	
6	銅銭「開元通寶」	銅	Tr 1	25.0	1.0		2.81	唐	武德 4 年	621	5	
7	銅銭「周通元寶」	銅	1 次検出面	25.0	1.5		2.51	後周	顯德 2 年	955	24	
8	銅銭「景德元寶」	銅	1 次検出面	24.0	1.0		3.02	北宋	景德元年	1004	1	
9	銅銭「元符通寶」（真）	銅	1 次検出面	24.0	1.5		3.72	北宋	元符元年	1098	9	
10	銅銭「政和通寶」（真）	銅	1 次検出面	25.0	1.5		4.01	北宋	政和元年	1111	25	
11	銅銭「宣和通寶」（真）	銅	Tr 1	25.0	1.5		3.37	北宋	宣和元年	1119	4	
12	銅銭「洪武通寶」	銅	SP10	22.0	1.3		4.36	明	洪武元年	1368	27	
13	銅銭「洪武通寶」	銅	Tr 1	23.0	1.5		3.30	明	洪武元年	1368	3	
14	銅銭「永樂通寶」	銅	Tr 1	25.0	1.5		4.06	明	永樂 6 年	1408	6	
15	銅銭「元□通寶」	銅	Tr 1	25.0	1.5		3.39				7	
16	銅銭「元□□□」	銅	SP02	25.0	1.7		3.51				14	
17	銅銭（不明）	銅	SP02	25.0	1.5		6.02				15	
18	銅銭（不明）	銅	Tr 1	26.0	2.5		4.52				12	
19	銅銭（不明）6 点	銅	Tr 1				18.35				8	
20	銅銭片（不明）4 点	銅	Tr 1	22.0	1.5		2.36				21	
21	銅銭（不明）	銅	Tr 2	25.0	1.5		2.96				22	
22	銅銭（不明）3 点	銅	1 次検出面	24.0	1.0		9.75				11	
23	銅銭（不明）3 点	銅	1 次検出面	25.0	1.0		17.27				26	
24	銅銭（不明）6 点	銅	2 次検出面	25.0	1.0		19.29				17	
25	銅銭片（不明）	銅	2 次検出面	24.0	1.0		1.27				19	
26	銅銭（不明）	銅		22.0	1.0		1.21				2	
27	銅片（不明）	銅	SP17	27.0	5.0	20.0	6.00				20	

第Ⅳ章　自然化学分析

株式会社パリノ・サーヴェイ

第１節　はじめに

元善町遺跡を含む長野遺跡群は、裾花川の旧扇状地に相当する段丘面（第２段丘面）上に形成された湯福川扇状地（中村・小林，1974）上に立地している。これまでの長野遺跡群の発掘調査では、縄文時代から近現代に至る各時期の遺構・遺物が確認されており、同扇状地上では古くから人間活動の場であったことが明らかとされている（長野市教育委員会，2006）。

今回発掘調査が実施された元善町遺跡仁王門東地点は、善光寺仁王門の東、仁王門以北の平坦面南西隅に相当し、平安時代後期から鎌倉時代の大規模な地盤造成、建物跡等が確認されている。元善町は、1707年（宝永７年）に現在の位置に善光寺本堂が造営されるまで本堂が位置していた場所とされ、今回確認された遺構は中世善光寺と直接的に関連する可能性が示唆されている。

本報告では、上記した地盤造成の痕跡とみられる堆積物（盛土）より出土した炭化材や焼土塊に付着した炭化物を対象に放射性炭素年代測定を実施し、地盤造成に伴う盛土の形成年代について検討する。

第２節　試料

試料は、地盤造成によって形成された盛土内より出土した炭化材２点である。調査所見では、黒～暗灰色を呈する旧地表面とみられる堆積物上位に、石積（石積３）および炭化物や壁土、瓦、等が多量に混じる焼土を主体とする盛土（盛土３）、礫が混じる明灰～明褐色土からなる盛土（盛土２）、盛土２上部に礎石が据えられる状況が確認されている。上記した試料は、焼土を主体とする盛土３の中層（資料１）および下層（資料２）より出土した炭化材である。

試料の観察では、資料１は被熱を受けた土塊状を呈し、表面には炭化物の細片が多く観察された。資料２は、炭化材が５個確認された。資料１は、現状の形状を保存を優先したため表面に認められた炭化材の小片１点を抽出し、分析試料としている。資料２については、それぞれに仮名（１～５）を付し、比較的保存状態の良好な炭化材１点（資料№２－１）を選択し、分析試料としている。各試料の詳細は、結果と共に表１に示す。

試料採取位置（資料１）

第３節　分析方法

（１）放射性炭素年代測定

炭化材を分析対象とした。根等の目的物と異なる年代を持つと思われるものが付着、あるいは混入している場合は、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後、HCl による炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOH による腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HCl によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分の除去を行う（酸・アルカリ・酸処理）。

試料をバイコール管に入れ、１ｇの酸化銅（II）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30分）850℃（２時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素＋エタノールの温度差を利用し、真空ラインにて CO_2を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製した CO_2と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径１㎜の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、３MV 小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS 専用装置（NEC Pelletron ９SDH-２）を使用する。AMS 測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-II）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に13C ／12C の測定も行うため、この値を用いて δ^{13}C を算出する。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68％）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02（Copyright 1986－2005 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

暦年較正とは、大気中の14C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C 濃度の変動、及び半減期の違い（14C の半減期5730±40年）を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位での表記が通例とされるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正時の再計算、再検討に対応するため、本報告では１年単位で表記している。暦年較正結果は、測定誤差σ、２σ双方の値を示す。σは統計的に真の値が68％の確率で存在する範囲、２σは真の値が95％の確率で存在する範囲である。表中の相対比とは、σ、２σの範囲をそれぞれ１とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

表１．放射性炭素年代測定結果

資料No	試料							種類	補正年代 BP	δ13C (‰)	測定年代 BP	Code No.	Measurement No.
1	NGMY	２次検出面	盛土２	－	中層	No79		炭化材（針葉樹）	1,510±30	－25.61±0.67	1,530±30	9837－２	1AAA－71965
２－１	NGMY	２次検出面	盛土２	－	下層	No60		炭化材（サワラ）	950±30	－27.06±0.58	980±30	9837－１	1AAA－71964

1）年代値の算出には、Libby の半減期5568年を使用。
2）BP 年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
3）付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68％が入る範囲）を年代値に換算した値。

表２．暦年較正結果

試料		補正年代 (BP)		暦年較正年代（cal）												相対比	Code No.
資料No１	炭化材（針葉樹）	1,512±29	σ	cal	AD	538	－	cal	AD	598	cal	BP	1,412	－	1,352	1.000	9837－２
			２σ	cal	AD	434	－	cal	AD	492	cal	BP	1,516	－	1,458	0.165	
				cal	AD	508	－	cal	AD	518	cal	BP	1,442	－	1,432	0.016	
				cal	AD	528	－	cal	AD	620	cal	BP	1,422	－	1,330	0.819	
資料No２－１	炭化材（サワラ）	945±28	σ	cal	AD	1,031	－	cal	AD	1,051	cal	BP	919	－	899	0.242	9837－１
				cal	AD	1,081	－	cal	AD	1,126	cal	BP	869	－	824	0.564	
				cal	AD	1,135	－	cal	AD	1,152	cal	BP	815	－	798	0.196	
			２σ	cal	AD	1,026	－	cal	AD	1,156	cal	BP	924	－	794	1.000	

1）暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02（Copyright 1986－2005 M Stuiver and PJ Reimer）を用いている。
2）暦年較正は、表中に示した丸める前の値を使用している。
3）統計的に真の値が入る確率はσは68％、２σは95％である。
4）相対比は、σ、２σのそれぞれを１とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

（2）炭化材同定

炭化材の木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）について割断面を作製し、断面が水平になるよう剃刀等で調整し、アルミ合金製の試料台にカーボンテープで固定する。実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡で木材組織の種類や配列などを観察し、その特徴を現生標本と比較して種類を同定する。同定根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東（1982）および Richter 他（2006）を参考にする。

第4節　結果

（1）放射性炭素年代測定

結果を表1，2に示す。同位体効果による補正を行った測定結果（補正年代）は、資料1（№79）は1,510±30BP、資料2（№60）は950±30BP を示す。この補正年代に基づく暦年較正結果（σ）は、資料1（№79）は calAD538－598、資料2（№60）は calAD1,031－1,152である。

（2）炭化材同定

放射性炭素年代測定試料に供した資料2の炭化材（2－1）とこの他の炭化材4点（2－2～4）は、全て針葉樹のサワラに同定された。一方、資料1の炭化材は、実体顕微鏡による観察では針葉樹と判断されたが、放射性炭素年代測定試料とすることを優先したことから、種類の特定には至らない。以下に解剖学的特徴を示す。

・サワラ（Chamaecyparis pisifera （Sieb. et Zucc.）Endlcher） ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型～スギ型で、1分野に1－3個。放射組織は単列、1－15細胞高。

第5節　考察

地盤造成時の盛土（焼土層）から出土した炭化材の暦年較正年代は、盛土3下部の炭化材（資料2）は11世紀前半～12世紀中頃、同中部の炭化材（資料1）は6世紀前半～末と異なる年代を示した。なお、焼土層は人為的に形成された堆積物であり、壁土や瓦、漆喰壁等の何らかの要因によって生じた廃棄物等が多量混じる状況から、炭化材は廃棄物と共伴し、同時期性の高いことが推測される。これらの点や今回の調査結果を参考とすると、焼土層は炭化材（資料2）が示した11～12世紀頃、あるいは、それ以降に形成された可能性がある。

また、資料2の分析試料とした炭化材とこの他の炭化材（№2～4）の5点は、いずれも針葉樹のサワラであった。サワラの木材は、木理が通直で割裂性・耐水性が高く、加工用は容易といった特徴を有する。炭化材が出土した焼土層からは、建築材料に由来するとみられる遺物が多量出土していることから、同層から出土した炭化材には建築材として利用された木材も含まれている可能性もある。

ところで、長野県内における当該期の建築部材等の調査事例は、大部分が竪穴住居跡から出土した炭化材を対象としたものである。これらの結果をみると、落葉広葉樹のクヌギ節やコナラ節を中心とする種類組成であり、サワラを含む針葉樹の利用は少ない（森，1988；パリノ・サーヴェイ株式会社，1992a，1992b，1995,2005；鈴木・能城，1993）といった特徴が指摘される。なお、古代の寺院では、法隆寺がヒノキを中心としているなど、針葉樹の利用が多いことが知られている。長野県内では、明らかに寺院の建築部材と判断される木材の樹種を明らかとした事例がなく、詳細は不明である。

(引用文献)

森　義直，1988．炭化物（炭化材）について．「長野県大町市埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書　来見原遺跡Ⅱ」．大町市埋蔵文化財調査報告書第14集．大町市教育委員会，118．

長野市教育委員会，2006．長野遺跡群　善光寺門前町跡　－竹風堂善光寺大門店地点－．長野市の埋蔵文化財第115集．44p．

中村三郎・小林　詢，1974．長野　L 地形．地形各論　長野　5万分の1．土地基本分類調査簿（国土調査）　第157号．経済企画庁，8－10

パリノ・サーヴェイ株式会社，1992a．下芝宮遺跡・下聖端遺跡炭化材同定報告．「国道141号線関係遺跡長野県佐久市長土呂国道141号線関係遺跡発掘調査報告書（本文編）　芝宮遺跡群下芝宮遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ、芝宮遺跡群上高山遺跡、周防畑遺跡群下北原遺跡、近津遺跡群上宮原遺跡、下蟹沢遺跡、長土呂遺跡群上大林遺跡、長土呂遺跡群下聖端遺跡Ⅰ・Ⅱ」．佐久市埋蔵文化財調査報告書第９集．佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財センター，355－391．

パリノ・サーヴェイ株式会社，1992b．女性原遺跡出土炭化物樹種同定．「久保在家遺跡」．長野県小県郡東部町教育委員会，252－253．

パリノ・サーヴェイ株式会社，1995．勝負沢遺跡　住居構築材の木材利用．「寄山洞畔に営まれた縄文中期集落の調査　寄山・寄山古墳」．長野県土地開発公社・佐久市教育委員会，857－859．

パリノ・サーヴェイ株式会社，2005．聖原遺跡の自然科学分析報告．「長土呂遺跡群　聖原　長野県佐久市浅間山麓田切台地上における巨大古代集落遺跡の調査　第５分冊」．佐久市埋蔵文化財調査報告書　第126集．佐久市土地開発公社・佐久市教育委員会，140－206．

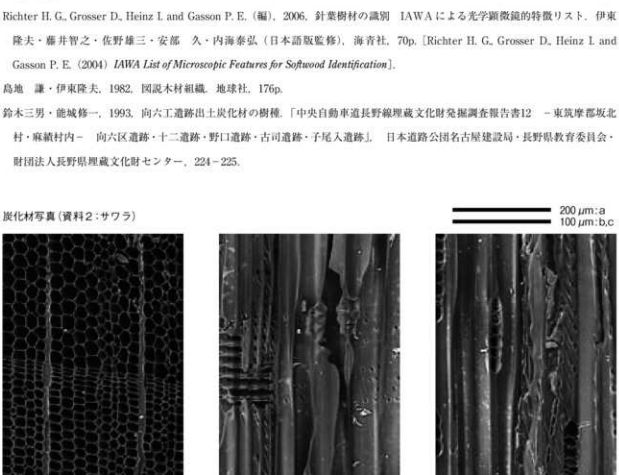
Richter H. G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P. E.（編），2006．針葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト．伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部　久・内海泰弘（日本語版監修），海青社，70p．［Richter H. G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P. E.（2004）*IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*］．

島地　謙・伊東隆夫，1982．図説木材組織．地球社，176p．

鈴木三男・能城修一，1993．向六工遺跡出土炭化材の樹種．「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書12　－東筑摩郡坂北村・麻績村内－　向六区遺跡・十二遺跡・野口遺跡・古司遺跡・子尾入遺跡」．日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会・財団法人長野県埋蔵文化財センター，224－225．

炭化材写真（資料２：サワラ）

200 μm:a
100 μm:b,c



a：木口　　b：柾目　　c：板目

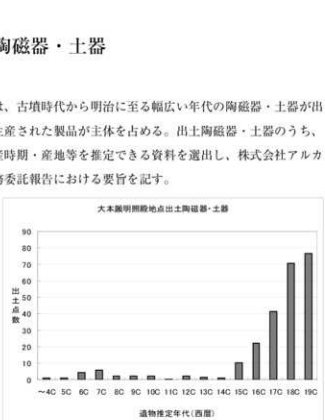
第Ⅴ章　結　語

第１節　大本願明照殿地点出土の陶磁器・土器

（１）出土陶磁器・土器の様相

元善町遺跡善光寺大本願明照殿地点の発掘調査では、古墳時代から明治に至る幅広い年代の陶磁器・土器が出土しており、中でも江戸時代中期から末期にかけて生産された製品が主体を占める。出土陶磁器・土器のうち、検出遺構に伴うもの及び比較的残存状態が良好で生産時期・産地等を推定できる資料を選出し、株式会社アルカに観察表の作成等整理分類業務を委託した。以下業務委託報告における要旨を記す。

出土の陶磁器・土器は、４次にわたる遺構検出時および検出遺構覆土より出土したものであるが、１次遺構検出面の近代建物跡や３次遺構検出面の古墳時代住居跡など遺構の具体的性格を想定できるものは一部に限られており、大多数は用途不明の土坑・小穴であった。本調査地点では、中世遺跡において一般的によく見られる中国景徳鎮系の青花製品や江戸時代初期から前期に見られる初期伊万里製品が全く確認されておらず、中世後期から近世初期にかけて生産された製品組成に著しい片寄りがあることが注目される。



※推定年代が２期以上にまたがる場合は、出土点数を按分している。

（２）中世後期から近世初期に比定される製品について

中世後期の遺物としては、中国系青磁と珠洲系甕、越前系擂鉢、瀬戸美濃系陶器などが出土している。青磁は龍泉窯系青磁であり、南宋から元にかけての製品と明代の製品がある。越前焼は擂鉢の口縁部破片が３次遺構検出面北西から１点出土している。胎土は淡い橙色で釉薬はなく、輪積み成形である。内面に間隔を開けた櫛描き摺目がみられる。瀬戸美濃製品は、大窯期から連房式登窯初期に比定される製品が合計12点出土している。うち４点が大窯期の灰釉小皿で、すべてが２次面 SD04からの出土である。大窯後期と見られる長石釉（志野）製品が碗２点と菊花小皿１点の計３点が確認される。碗２点は SK07と SK38からの出土で、菊花皿は灰釉皿と同じく SD04からの出土である。絵志野は碗１点で SK04から出土した。連房式登窯初期の製品と見られる。鉄釉製品は大窯後期から連房式登窯初期にかけての製品とみられるものが４点認められる。器種は天目茶碗２点、他に碗底部破片１点とやや大きめの皿破片が１点ある。SK38から天目茶碗と碗底部破片の２点が、天目茶碗１点が SD04から出土した。皿破片は３次検出面北東部から検出されている。

近世初期の肥前系陶器では大橋編年Ⅰ期（1580～1610年代）に比定される製品が６点出土している。出土状況はやや散逸的で、前出の２次遺構検出面 SK15出土灰釉陶器碗、SD04北列出土灰釉小皿の他に、３次遺構検出面 SK45出土陶器緑灰釉碗、１次遺構検出面 SD01出土藁灰釉碗、２次遺構検出面南東出土土灰釉碗、２次遺構面南西検出面出土土灰釉小皿である。６点に共通する特徴として、見込みに目跡がなく、また高台周辺は露胎で中央に兜巾状の削り残しが見られ、目跡は認められず、重ね積みの痕跡がない製品である。近世初期製品の中では全

体的にも多く確認される種類である。

一方、大橋編年Ⅱ期（1600～1650年代）肥前系陶器は、SK38から出土した砂目積皿１点のみである。SK38は近世初期の瀬戸・美濃系陶器と大橋編年Ⅲ期（1650～1690年代）肥前系陶器２点と供出していることから、ある程度年代を経た段階で廃棄された可能性が高い。また、ほぼ同時期に比定される肥前系磁器（初期伊万里）製品は、本遺跡からは１点も出土していない。長野市内では近世初期から近世・近代まで至る遺跡として松代城下町跡（2005　長野市教育委員会）があるが、そちらでは景徳鎮系青花製品や呉須系製品、初期伊万里製品が出土している。この差異は単純に時期別差があるとはいえないが、注目すべき事象であろう。

（３）元善町遺跡出土遺物の傾向

以上、元善町遺跡大本願明照殿地点の出土陶磁器・土器について概要と中世後期から近世前期にかけての特色を記述したが、全体的な様相としてまとめると、以下のような点が挙げられる。

① 古墳時代に比定される土師器が遺構に伴う形で確認された。

② 第４次遺構検出面瓦の瓦包含層から古代に比定される須恵器・土師器破片が確認された。

③ 中世に比定される遺物が第３次遺構検出面 SD02・03から確認された。

④ 近世初期に比定される製品で、瀬戸美濃系陶器と肥前系陶器が第２次遺構検出面 SK15・SD04からまとまった形で検出された。

⑤ 近世初期に比定される製品において、大橋編年Ⅰ期（1580～1610年代）陶器が６点確認される一方、大橋編年Ⅱ期（1600～1650年代）肥前系陶器は１点のみで、大橋編年Ⅱ期（1610～1650年代）肥前系磁器は確認されなかった。

⑥ 全体的には、検出面出土から遺構・土坑出土品を含め、江戸時代中期から後期にかけての製品が主であることが確認された。

今回の発掘では、古墳時代の竪穴住居跡などの遺構が確認される一方で、奈良・平安時代の遺構は検出できなかった。しかし、第４次遺構検出面の瓦包含層から出土する須恵器・土師器の破片や、第２次遺構検出面 SK04出土の頸部に凸帯が回る平安期の尾張系広口長頸壺破片など、古代に比定される遺物は少量ながらも出土している。これは古代の遺構が、調査地周辺に存在したことを示すものであり、中世以降の大規模な造成に伴って消失した可能性が考えられる。今後、周辺での発掘調査を積み重ねることにより、部分的にでも現存する古代遺構を確認できる可能性はある。慎重かつ丁寧に調査資料を蓄積する必要がある。

また、出土遺物の傾向全体をみると、古代から中世までの陶磁器･土器製品が極端に少ない傾向を示している。この傾向は、大本願明照殿地点だけではなく、仁王門東地点についても同様であり、瓦や壁土など建物に関する構造材は多量に出土するものの、生活に密接に関連する陶磁器・土器は小破片が僅かに確認されるに留まっている。このことは、元善町遺跡が一般的集落とは異なり、古代・中世において多種の生活用具を必要としない寺域であったことを示している可能性も考えられる。

第２節　出土瓦の検討

―大本願明照殿地点出土単弁六弁蓮華文軒丸瓦について―

元善町遺跡（大本願明照殿地点・仁王門東地点）において出土した古代瓦は、合計で2,200点を超え、長野市内での古代瓦出土最大数となった。出土点数もさることながら、新たに確認された文様瓦・文字瓦は、古代信濃の仏教文化を考える上で、貴重な発見であった。中でも、大本願明照殿地点（以下大本願）出土の軒丸瓦は、文様構成が近江国（現滋賀県）の一部で確認されている湖東式軒丸瓦の文様と酷似していることが判明した。本節では、大本願より出土した軒丸瓦と湖東式軒丸瓦との比較・検討を行い、今後の課題を明らかにしたい。

まず、「湖東式軒丸瓦」について述べることとする。湖東式軒丸瓦とは、文字通り琵琶湖の東岸地域に分布する瓦を指し、近江国愛知郡（現滋賀県愛荘町）を中心としている（※１）。湖東式軒丸瓦が出土する代表的な遺跡は、軽野塔ノ塚廃寺・野々目廃寺・小八木廃寺などが挙げられ、出土した軒丸瓦を比較した結果、以下の特徴が判明している。①蓮弁は単弁と重弁の二種類②蓮弁数は六弁と八弁の二種類③蓮弁の中央には稜線がある（主に八弁形式に見られる）④中房中央蓮子は大きなもの一つ、もしくは小さな蓮子の周囲に圏線を巡らす⑤外区内縁に珠文帯、などである。特に、①･③･⑤については、確認されている軒丸瓦に共通する特徴で、逆に言えば、単弁・重弁の蓮弁に稜線を持ち、外区内縁に珠文を巡らす文様の軒丸瓦は「湖東式軒丸瓦」と定義できる。しかし、重岡卓氏はこの定義について、「かなり漠然としたグルーピングになってしまう。（中略）広い範囲で包括する概念のある「系」を用いて「湖東系軒丸瓦」と称するのが穏当。」としている（※２）。また、湖東式軒丸瓦には、重弧文の下端に指頭圧痕を加えて波状にする軒平瓦が組合わさるものと考えられている。

湖東式軒丸瓦は、近江以外でも出土していることが知られており、美濃国・尾張国（現岐阜県・愛知県）と越前国（現福井県）で確認されている。美濃・尾張で確認された湖東式軒丸瓦は、ほとんどが六弁形式のもので、蓮弁に稜線を有しているものはごく一部である。中房の蓮子は、規則的に間弁の延長線上に配されているが、外区内縁の珠文が欠落している個体も見受けられ、文様の退化、あるいは独自の文様構成に変化したものとみられる（※３）。越前で確認された湖東式軒丸瓦は１点のみである。こちらも六弁形式のものであるが、美濃・尾張出土の資料に比べると造りは端正であるように見受けられ、中房の蓮子は間弁と蓮弁の延長線上に規則的に配されている（※４）。近江以外で確認されている湖東式軒丸瓦は、六弁形式のものが主体であり、遡源と考えられる湖東地域で六弁形式が確認されているのは、軽野塔ノ塚廃寺・野々目廃寺のみである。

ここで、再度大本願出土の軒丸瓦の特徴を確認する。①単弁の蓮弁が六弁②蓮弁中央に稜線③中房は圏線によって形成される④中房中央に大きな蓮子一つ、もしくは圏線の内側に小さな蓮子⑤中央蓮子の周囲に環状の蓮子⑥外区内縁に珠文帯⑦外区外縁には一条の圏線を巡らす⑧外区圏線の外側は平坦、以上の事が挙げられる。これらの特徴の中で、①・②・⑥は上記の湖東式軒丸瓦の定義に当てはまり、本軒丸瓦が「湖東式軒丸瓦」と呼称するのに充分な要素を有していることが確認できた。

大本願出土の軒丸瓦が、湖東式軒丸瓦と確認できた時点で問題となるのは、近江で確認されている湖東式軒丸瓦が、信濃に流入したルートとその背景である。湖東地域で出現したとされる湖東式軒丸瓦は、軽野塔ノ塚廃寺出土八弁形式のものがその初現とみられ、後に六弁形式が派生したと考えられている。八弁形式から派生した六弁形式の湖東式軒丸瓦は、東山道と北陸道を経由して美濃・尾張と越前に持ちこまれたものと思われ、各地域で展開をする。美濃・尾張出土の湖東式軒丸瓦は、蓮弁稜線が欠落し、外区内縁珠文の数が少なく、大本願出土の軒丸瓦と比較すると、直接的につながる要素は見出せない。一方、越前小粕窯跡出土の湖東式軒丸瓦は、中房蓮

子の規則的配置や、外区内縁の珠文数の多さなど、大本願出土の軒丸瓦との共通点が見出せる。そのため、軒丸瓦の類似性という観点からは、湖東式軒丸瓦が北陸道ルートで信濃に持ちこまれた可能性が考えられる。しかし、小柏窯跡出土の軒丸瓦との相違点（中房圏線がない・外区に二重圏線）もわずかに看取できる。また大本願出土の軒丸瓦にみられる蓮弁表現や、中房径が小さいことなどの要素は、近江出土の八弁形式の湖東式軒丸瓦と似ており、近江からの直接流入というのも選択肢の一つであると思われる。

湖東式軒丸瓦の成立背景として、近江では渡来系氏族の関与も示唆されているが、現時点で北信濃における渡来系氏族の動向や、古代善光寺造営に関する郡の体制がどのようなものであったかが不明瞭である。今後、瓦の文様だけではなく、地域の特色を明らかにするなどの多角的な研究を行う必要がある。

（※１）滋賀県内では、湖東地域以外の湖北地域でも一部確認されている。

（※２）名称としては「式」の方が広く使われているため、本報告書では「式」を踏襲させていただく。

（※３）美濃国で湖東式軒丸瓦が出土した遺跡は、平蔵寺跡・弥勒寺跡・輪形古窯跡・元薬師寺跡である。尾張国で出土した遺跡は、東流廃寺・薬師堂廃寺である。薬師堂廃寺は現在の愛知県に所在している。

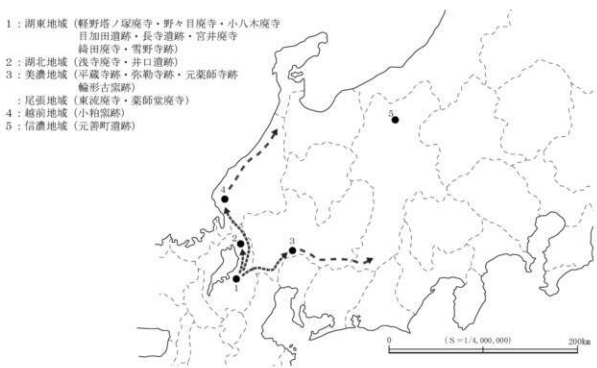
（※４）福井県で湖東式軒丸瓦が出土した遺跡は小柏窯跡で、二基の窯が存在している。

元善町出土湖東式軒丸瓦

八弁形式

六弁形式

近江軽野塔ノ塚出土湖東式軒丸瓦

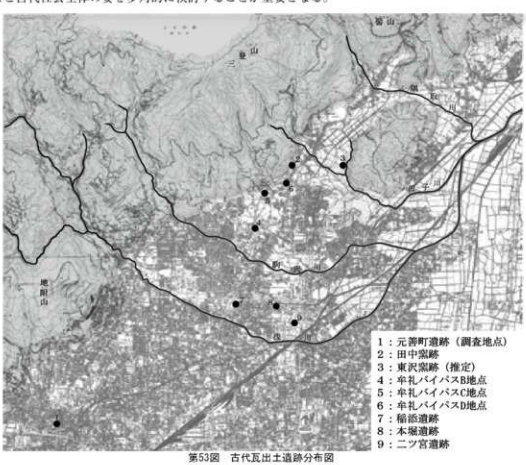


第52図　湖東式軒丸瓦出土分布図

第３節　北信濃における古代瓦の生産と流通

長野市内で現在までに確認されている古代瓦の大多数は、旧水内郡域（千曲川・犀川以北）出土であり、中でも善光寺境内周辺と浅川扇状地遺跡群に集中している。浅川扇状地遺跡群牟礼バイパスＢ・Ｃ・Ｄ地点の調査では住居跡を中心に古代瓦を確認している。出土した軒丸・軒平瓦は、善光寺境内出土とされる複弁蓮華文軒丸瓦・偏行唐草文軒平瓦と同種の文様構成であり、古代善光寺との関連性を指摘できる。また、牟礼バイパス地点の南東にあたる二ツ宮遺跡・本掘遺跡・稲添遺跡の調査では、瓦や多数の瓦塔片が出土している。これらの遺跡は全て集落遺跡であり、寺院等の建物遺構を確認できないことから、瓦の生産・流通に関連する集落と考えられる。旧水内郡域の古代瓦の生産遺構としては、牟礼バイパス地点北方の山麓にて水道工事の際に瓦の堆積層が確認された田中窯跡と、その東方に存在したといわれる東沢窯跡がある。窯跡出土とされる瓦は現存するが、今までに発掘調査を実施していないため、窯跡の操業期間や正確な位置などは把握できていない状況である。

一方、善光寺境内は、古くから古代瓦が出土することで知られていたが、これまで境内域で発掘調査を実施したことはなく、工事等に伴う表採資料が数点現存するのみであった。今回の調査では、大本願明照殿地点および仁王門東地点にて多量の瓦が出土しており、仁王門東地点では大規模な造成とともに建物礎石と想定される遺構も確認されている。これにより少なくとも中世前期には善光寺に関連する建物が現仁王門付近に存在していたことが想像される。また、大本願明照殿地点では溝東式軒丸瓦や桶巻き作りの平瓦の出土によって、調査地周辺において８世紀代に瓦葺き建物が存在した可能性が高まった。今後は、これらの古代瓦がどのように生産され、流通したのかを検討することが必要である。そのためには窯跡の調査や瓦が出土する集落跡との関係、道路・河川の役割など古代社会全体の姿を多角的に検討することが重要となる。



第53図　古代瓦出土遺跡分布図

附章　参考文献

（出土陶磁器・土器に関する文献）

愛知県陶磁資料館　1984 「近世城館跡出土の陶磁」 特別展

出光美術館　2004 「古唐津」 展覧会カタログ

井上喜久男　1992 「尾張陶磁」 ニュー・サイエンス社

大川清・鈴木公雄・工楽善通編　1996 「日本土器事典」 雄山閣

大橋　康二　2004 「世界をリードした磁器窯　肥前窯」 新泉社　シリーズ「遺跡を学ぶ」005

小野正敏ほか　2001 「図解・日本の中世遺跡」

加藤唐九郎編　1972 「原色陶器大辞典」 淡交社

唐本田又三　1993 「信州　松代焼」 信毎書籍出版センター

北九州市立考古博物館　1988 「北九州の中国陶磁―出土品にみる古代の日中交流」 特別展

九州近世陶磁学会　2000 「九州陶磁の編年」九州近世陶磁学会10周年記念

九州近世陶磁学会　2001 「国内出土の肥前陶磁―東日本の流通をさぐる」第11回　九州近世陶磁学会資料

古泉　弘　2002 「地下からあらわれた江戸」 教育出版　江戸東京ライブラリー19

沢田　由治　1974 「日本のやきもの13　常滑」 淡交社

（財）瀬戸市埋蔵文化財センター　2002 「江戸時代の瀬戸窯」企画展図録

（財）瀬戸市埋蔵文化財センター　2003 「江戸時代の美濃窯」企画展図録

上越市史専門委員会考古部会　2004 「考古―中・近世資料―」

新宿区内藤町遺跡調査会他　1992 「内藤町遺跡」

新宿区南山伏町遺跡調査団　1997 「南山伏町遺跡」

杉原荘介・大塚初重編　1971～1974 「土師式土器集成　本編　1～4」東京堂出版

土岐市美濃陶磁歴史館　2001 「三条界隈のやきもの屋」企画展図録

土岐市美濃陶磁歴史館　2003 「織部の流通圏を探る　東日本」企画展図録

土岐市美濃陶磁歴史館　2004 「織部の流通圏を探る　西日本」企画展図録

土岐市美濃陶磁歴史館　2004 「土岐市収蔵品図録 II―収蔵品にみる美濃窯の歴史」

長野市教育委員会　2005 「松代城下町跡―中本町・西本町・紺屋町―」長野市の埋蔵文化財第109集

楠崎彰一・林屋晴三・長谷部楽爾ほか　2000 「増補　やきもの辞典」 平凡社

日本福祉大学知多半島総合研究所　1994　全国シンポジウム「中世常滑焼をおって」資料集

長谷部楽爾・今井敦　1995 「日本出土の中国陶磁」 平凡社版中国の陶磁12

矢部良明ほか　2002 「角川日本陶磁大辞典」 角川書店

山梨県教育委員会　2004 「甲府城下町遺跡」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第215集

横浜市歴史博物館　1999 「秀吉襲来―近世関東の幕開け―」 特別展

（湖東式軒瓦に関する文献）

井上　満郎　2001 「近江と渡来人―穴太廃寺建立氏族をめぐって―」「西田弘先生米寿記念論集　近江の考古と歴史」真陽社

上原　真人　1997 「瓦を読む」歴史発掘11　講談社

大塚　章　1996 「美濃地方における湖東式軒瓦の展開～特に、各務原・加茂地区を中心として～」「岐阜県博物館研究報告」第17号　岐阜県博物館

小笠原好彦　1989 「白鳳寺院と瓦窯―宮井廃寺、辻岡山瓦窯の発掘調査から―」「滋賀県埋蔵文化財センター紀要３」（第45回埋文センター研究発表要旨）

小笠原好彦　1989 「近江の古代寺院」近江の古代寺院刊行会

小笠原好彦・大脇潔　1997 「渡来系氏族の古墳・寺院研究の現状」「季刊　考古学」第60号　雄山閣

小笠原好彦　1997 「近江の渡来系氏族の古墳と軒瓦」「季刊　考古学」第60号　雄山閣

小笠原好彦　2000 「近江の考古学」サンライズ出版

小笠原好彦　2001 「湖東式軒丸瓦の成立年代と系譜」『西田弘先生米寿記念論集　近江の考古と歴史』真陽社
小笠原好彦　2005 「日本古代寺院造営氏族の研究」東京堂出版
梶山　勝　2002 「美濃と尾張の湖東系軒瓦」『藤澤一夫先生卒寿記念論文集」　帝塚山大学考古学研究所
北村　圭弘　1994 「近江の古代寺院研究の基礎資料Ⅳ」「滋賀文化財だより」193 （財）滋賀県文化財保護協会
北村　圭弘　2007 「近江・犬上群以北と越前の重弁蓮華紋軒丸瓦―湖東式を中心に―」「飛鳥白鳳の瓦づくりⅩ―重弁蓮華文軒丸瓦の展開―」　奈良文化財研究所
久保　智康　1994 「北陸南西部における軒瓦の受容と伝播―越前地域を中心に―」「古代」第97号　早稲田大学考古学会
重岡　卓　1997 「「湖東系軒丸瓦」に関する基礎的考察」紀要第10号　（財）滋賀県文化財保護協会
仲川　靖　2007 「近江・愛知群以南の重弁蓮華文軒丸瓦―湖東式を中心に―」「飛鳥白鳳の瓦づくりⅩ―重弁蓮華文軒丸瓦の展開―」　奈良文化財研究所
西田　弘　1989 「近江の古代瓦の諸問題」「滋賀県埋蔵文化財センター紀要３」（第45回埋文センター研究発表要旨）
松浦　俊和　1995 「壬申の乱と造寺」「近江の歴史と文化」思文閣出版
宮崎　幹也　1989 「瓦の型式学的諸問題」「滋賀県埋蔵文化財センター紀要３」（第45回埋文センター研究発表要旨）

（善光寺に関する文献）
井原今朝雄　1988 「中世善光寺の一考察―長野県史荘園遺構調査報告５―」「信濃」40－３
井原今朝男・福島正樹・牛山佳幸ほか2000「長野市誌」（第２巻歴史編　原始・古代・中世）長野市誌編さん委員会
井原今朝男　2002 「中世善光寺平の災害と開発―開発勢力としての伊勢平氏と越後平氏」
上田市立信濃国分寺資料館　2005 「信濃の古代・中世の仏教文化と関係遺跡」
牛山　佳幸　1991 「信濃善光寺史関係文献目録」「寺院史研究」２
牛山　佳幸　1991 「善光寺創建と善光寺信仰の発展」「善光寺　心とかたち」第一法規出版
牛山　佳幸　1996 「信濃善光寺史関係文献目録補遺（その１）」「寺院史研究」５
牛山　佳幸　1996 「中世律宗の地域的展開―信濃国の場合―」「信濃」48－９
牛山　佳幸　1997 「「善光寺縁起」の成長」「古代・中世人の祈り―善光寺信仰と北信濃―」長野市立博物館
牛山　佳幸　1999 「中世武士社会と善光寺信仰」「鎌倉時代の社会と文化」東京堂出版
風間　栄一　2000 「科野・善光寺平における渡来系集団とその動向」「月刊考古学ジャーナル」459
川瀬　博美　1972 「善光寺平における条里制の歴史地理学的研究」「地理学報告」39愛知教育大学　地理学会
倉澤　正幸　2004 「上田地方における古代仏教関係資料の考察」「信濃」56－９
小林計一郎　2000 「善光寺史研究」信濃毎日新聞社
小林　敏男　1999 「善光寺と若麻績氏」「信濃」51－８
鎌田　宣之　2003 「研究の窓　栗田氏と善光寺に関する一考察」「信濃」55－11
坂井　衡平　1969 「善光寺史」東京美術
笹本　正治　1999 「中世末から近世初頭の善光寺門前町」「国立歴史民俗博物館研究報告」78
清水　保　1950 「善光寺研究における二・三の問題」「信濃」２－12
塚田一夫ほか　1980 「長野市元善町誌　善光寺門前町百年の歩み」元善町誌編集委員会
長野市立博物館　1985 「善光寺信仰」
原田　和彦　1994 「千曲川流域における古代寺院―研究の前提として―」「長野市立博物館紀要」２
原田　和彦　1997 「古代善光寺をめぐって」「長野」191
原田　和彦　2001 「善光寺平の官衙研究をめぐる諸問題」「信濃」53－11
福島　正樹　2002 「古代における善光寺平の開発について―旧長野市街地の条里遺構を中心に」「国立歴史民俗博物館研究報告」96
古川貞雄・福島正樹・井原今朝男・青木歳幸・小平千文　1997 「長野県の歴史」山川出版社
湯本軍一・井原今朝男・小林計一郎ほか　1986 「長野県史」（通史編２中世１）長野県史刊行会
大和　岩雄　1990 「信濃古代史考」名著出版
米山　一政　1971 「信濃の古瓦」「一志茂樹博士喜寿記念論集」一志茂樹博士喜寿記念会
米山　一政　1978 「信濃出土の古瓦再論」「中部高地の考古学」長野県考古学会
米山　一政　1996 「信濃史の諸問題と善光寺・戸隠」信濃毎日新聞社

報告書抄録

ふりがな	ながのいせきぐん　もとよしちょういせき・ぜんこうじもんぜんまちあと
書名	長野遺跡群　元善町遺跡・善光寺門前町跡（2）
副書名	
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財
シリーズ番号	第121集
編著者名	宿野隆史・柴田洋孝・山野井智子・佐々木麻由子
編集機関	長野市教育委員会　文化財課埋蔵文化財センター
所在地	〒381－2212　長野県長野市小島田町1414番地　ＴＥＬ　026－284－0004
発行年月日	2008（平成20）年３月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
元善町遺跡（大本願明照殿地点）	長野県長野市大字長野字元善町500	20201	C－003	36°39′27″	138°11′13″	20070215～20070405	500㎡	社寺改築
元善町遺跡（仁王門東地点）	長野県長野市大字長野字元善町468－1	20201	C－003	36°39′30″	138°11′16″	20070925～20071012	60㎡	住宅建設
善光寺門前町跡（2）	長野県長野市大字長野字大門町82－3	20201		36°39′25″	138°11′15″	20070704～20070714	30㎡	店舗建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
元善町遺跡（大本願明照殿地点）	集落 社寺	古墳時代～近世	古墳時代住居跡 中世溝跡 近世土坑　など	軒丸瓦（単弁六弁蓮華文）、 軒平瓦（重弧文）、 陶磁器、土器、 板碑、五輪塔　など	湖東式軒丸瓦の出土
元善町遺跡（仁王門東地点）	社寺	古代～近世	盛土造成跡 礎石状遺構 石積　など	軒丸瓦（巴文）、 軒平瓦（均整唐草文） 陶磁器、土器　など	中世善光寺の造成跡
善光寺門前町跡（2）	集落	中世	溝跡、石積 土坑、小穴	陶器（古瀬戸・珠洲） 土器（かわらけ） など	中世善光寺門前町

1968年　第1集　『信濃長原古墳群』
1976年　第2集　『浅川西条』
1978年　第3集　『中村遺跡』
　　第4集　『塩崎遺跡』
1979年　第5集　『塩崎遺跡群（2）』
1980年　第6集　『三輪遺跡　－付水内坐一元神社遺跡』
　　第7集　『田中沖遺跡』
　　第8集　『篠ノ井遺跡群』
　　第9集　『四ツ屋遺跡（第1～3次）・徳間遺跡・塩崎遺跡群（3）』
1981年　第10集　『高谷古墳群・長礼山古墳群・駒沢新町遺跡』
　　第11集　『箱清水遺跡・大峰遺跡・大清水遺跡』
1982年　第12集　『浅川扇状地遺跡群　－牟礼バイパスA・E地点』
1983年　第13集　『浅川扇状地遺跡群遺川遺跡・
　　川田条里的遺構・石川条里的遺構』
1984年　第14集　『石川条里的遺構（2）・上駒沢遺跡』
　　第15集　『箱清水遺跡（2）』
1985年　第16集　『石川条里的遺構（3）・(付上駒沢遺跡)』
1986年　第17集　『浅川扇状地遺跡群　－牟礼バイパスB・C・D地点』
　　第18集　『塩崎遺跡群Ⅳ　市道松節－小田井神社地点遺跡』
1987年　第19集　『たけ将軍塚古墳　－重要遺跡確認緊急調査－』
　　第20集　『三輪遺跡（2）』
　　第21集　『芋田小学校遺跡』
　　第22集　『長野吉田高校グランド遺跡』
1988年　第23集　『横田遺跡群　富士宮遺跡』
　　第24集　『塩崎遺跡群Ⅴ　殿屋敷遺跡』
　　第25集　『小島柳原遺跡群　　南川向遺跡』
　　第26集　『東善場遺跡』
　　第27集　『小柴見城跡』
　　第28集　『宮崎遺跡』
　　第29集　『浅川扇状地遺跡群　浅川端遺跡』
　　第30集　『地附山古墳群』
　　第31集　『町川田遺跡』
1989年　第32集　『中条遺跡』
　　第33集　『鴨前遺跡』
　　第34集　『石川条里遺跡（4）』
　　第35集　『篠ノ井遺跡群Ⅱ』
1990年　第36集　『旭地遺跡Ⅱ』
　　第37集　『篠ノ井遺跡群Ⅲ』
1991年　第38集　『栗田城跡・下宇木遺跡・三輪遺跡（3）』
　　第39集　『塩崎遺跡群（6）・石川条里遺跡（5）』
　　第40集　『松原遺跡』
　　第41集　『小島柳原遺跡群　中保遺跡・
　　浅川扇状地遺跡群　神踊遺跡・樋田遺跡』
1992年　第42集　『田中沖遺跡Ⅱ』
　　第43集　『南宮遺跡』
　　第44集　『塩崎遺跡群（7）』
　　第45集　『石川条里遺跡（6）』
　　第46集　『篠ノ井遺跡群（4）』
　　第47集　『浅川扇状地遺跡群　二ツ宮遺跡・
　　本堀遺跡・柳田遺跡・稲荷遺跡（2分冊）』
　　第48集　『小島柳原遺跡群　中保遺跡Ⅱ』
1993年　第49集　『浅川扇状地遺跡群　三輪遺跡（4）』
　　第50集　『浅川扇状地遺跡群　本村東沖遺跡』
　　第51集　『松原遺跡Ⅱ』
　　第52集　『田牧居屋遺跡』
　　第53集　『川崎遺跡』
　　第54集　『古町遺跡流入堀』
　　第55集　『浅川扇状地遺跡群　駒沢新町遺跡Ⅱ』
　　第56集　『上見林遺跡』
　　第57集　『石川条里遺跡（7）』
　　第58集　『松原遺跡Ⅲ』
　　第59集　『史跡松代藩主真田家墓所』
1994年　第60集　『篠ノ井遺跡・宮ノ下遺跡』
　　第61集　『栗田城跡（2）』
　　第62集　『浅川扇状地遺跡群　三輪遺跡（5）・
　　小島柳原遺跡群　上中島遺跡』
　　第63集　『松原遺跡Ⅳ』
　　第64集　『小島柳原遺跡群　宮西遺跡』
　　第65集　『浅川扇状地遺跡群　牟礼バイパスB地点遺跡（2）』
　　第66集　『石川条里遺跡（8）』
1995年　第67集　『浅川扇状地遺跡群　本村東沖遺跡Ⅱ』
　　第68集　『栗田城跡（3）』
　　第69集　『浅川扇状地遺跡群　徳間本堂原遺跡』
　　第70集　『八幡田沖遺跡』
　　第71集　『浅川扇状地遺跡群　二ツ宮遺跡（2）・吉田町東遺跡』
　　第72集　『塩崎遺跡群（8）・石川条里遺跡（9）』
　　第73集　『松代城跡』
　　第74集　『松代城跡Ⅱ』
1996年　第75集　『浅川扇状地遺跡群　吉田四ツ屋遺跡・
　　三輪遺跡（6）・柴河原遺跡』
　　第76集　『浅川扇状地遺跡群　駒沢城跡・
　　小島柳原遺跡群　中保遺跡Ⅱ』
　　第77集　『浅川扇状地遺跡群　松ノ本旧遺跡』
　　第78集　『布施塚1号古墳・2号古墳』
1997年　第79集　『稲荷山遺跡』
　　第80集　『小島・柳原遺跡群　水内坐一元神社遺跡Ⅱ』
　　第81集　『梨花川扇状地遺跡群　村南遺跡』
　　第82集　『浅川扇状地遺跡群　松ノ本旧遺跡Ⅱ』
　　第83集　『下宮ヶ谷遺跡』
　　第84集　『浅川扇状地遺跡群　吉田古屋敷遺跡』
　　第85集　『上九反遺跡』
　　第86集　『梨花川扇状地遺跡群　寺村遺跡』
1998年　第87集　『長野遺跡群　西町遺跡』
　　第88集　『小島柳原遺跡群　水内坐一元神社遺跡Ⅲ』
　　第89集　『梨花川扇状地遺跡群　見張城跡』
　　第90集　『西前山古墳』
　　第91集　『梨花川扇状地遺跡群　西方遺跡・中沢城館跡』
　　第92集　『松原遺跡Ⅴ』
　　第93集　『柴河原遺跡（2）・田中沖遺跡Ⅲ』
　　第94集　『浅川扇状地遺跡群　小板屋遺跡』
1999年　第95集　『鴨内遺跡群　高野遺跡』
2000年　第96集　『南宮遺跡Ⅱ（第1分冊・遺構編）』
2001年　第96集　『南宮遺跡Ⅱ（第2分冊・遺物編）』
　　第97集　『長野吉田高校グランド遺跡Ⅱ』
　　第98集　『川田氏館跡・宮崎遺跡Ⅱ』
　　第99集　『浅川扇状地遺跡群　徳間樋田遺跡』
2002年　第96集　『南宮遺跡Ⅱ（第3分冊・写真編）』
　　第100集　『四ツ屋遺跡Ⅱ』
　　第101集　『篠ノ井遺跡群（5）』
2003年　第102集　『浅川端遺跡（2）・若出遺跡　三合塚西古墳・
　　石川条里遺跡（10）』
2004年　第103集　『篠ノ井南条遺跡・浅川扇状地遺跡群辰巳池遺跡・
　　本郷前遺跡』
　　第104集　『浅川扇状地遺跡群　天神木遺跡・獅爪遺跡・雅現堂遺跡』
　　第105集　『浅川扇状地遺跡群　樋田遺跡（2）』
2005年　第106集　『鴨内遺跡群　南条遺跡』
　　第107集　『梨花川扇状地遺跡群　西方遺跡（2）』
　　第108集　『浅川扇状地遺跡群　桐原宮西遺跡・雅現堂遺跡（2）・
　　吉田古屋敷遺跡（2）・高井遺跡』
　　第109集　『松代城下町跡』
　　第110集　『松代城下町跡（2）』
　　第111集　『石川条里遺跡（11）・浅川扇状地遺跡群　本村東沖遺跡（3）・
　　上長畑遺跡』
2006年　第112集　『浅川扇状地遺跡群　吉田町東遺跡（2）』
　　第113集　『小島・柳原遺跡群　水内坐一元神社遺跡（4）』
　　第114集　『松代城下町跡（3）』
　　第115集　『善光寺門前町跡』
2007年　第116集　『平林東沖遺跡』
　　第117集　『篠ノ井遺跡群（6）』
　　第118集　『吉田古屋敷遺跡（3）』
　　第119集　『吉田古屋敷遺跡（4）・田牧居屋遺跡（2）』
2008年　第120集　『吉田古屋敷遺跡（5）』

長野市の埋蔵文化財第121集

長野遺跡群
元善町遺跡
善光寺門前町跡(2)

平成20年3月24日　印刷
平成20年3月31日　発行

編集　長野市教育委員会
発行　長野市埋蔵文化財センター
印刷　ほおずき印刷株式会社